第五章　資料編

阪神・淡路大震災シンポジウム

阪神・淡路大震災シンポジウム

「人と動物の大震災

何がおこり、何をなすべきか」

ヒトと動物の関係学会
兵庫県南部地震動物救援本部
共催

●目次

プログラム …… 274

シンポジウム　第一部 …… 275

シンポジウム　第二部 …… 295

総合討論　第三部 …… 319

1995年10月22日　　於：神戸文化ホール

阪神・淡路大震災シンポジウム
「人と動物の大震災　何がおこり、何をなすべきか」

10:00　開会
　来賓の挨拶

10:10　シンポジウム第1部
　「震災と動物の行動　動物は何をみたか」
　座長　会田　保彦（日本動物愛護協会事務局長）
　1)　地震予知と動物　　弘原海　清（大阪市立大学理学部長）
　2)　動物園の動物たち　　榊藤　眞禎（神戸市立王子動物園長）
　3)　避難所の動物たち　　吉田　明子（日本愛玩動物協会）

11:40　話題提供
　災害救助犬とは　　本田　　薫（JKC中央訓練委員会委員長）

12:10　昼食休憩

13:30　シンポジウム第2部
　「震災の中の人と動物の関係 ―人は動物に、動物は人に何をしたか―」
　座長　旗谷　昌彦（兵庫県南部地震動物救援本部副本部長／社神戸市獣医師会長）
　1)　動物救援本部報告　　宮崎　一美（三田動物救護センター所長）
　2)　動物救護センターの動物と人　　市田　成勝（神戸動物救護センター所長）
　3)　初期活動のボランティア　　馬場　国敏（馬場動物病院／川崎市）
　4)　淡路からのリポート　　安藤　武樹（安藤動物病院／兵庫県）
　5)　神戸からのリポート　　安達　忠幸（安達動物病院／神戸市）

15:30　休憩

16:00　第3部
　総合討論（会場参加）
　「何をなすべきか ―動物救援マニュアルの確立に向けて―」
　座長　林　　良博（ヒトと動物の関係学会長／東京大学農学部教授）
　話題提供者
　杉原未規夫（兵庫県保健環境部生活衛生課主査）
　松山　早苗（動物救援本部副本部長／社日本動物福祉協会阪神支部副支部長）
　山田　　誠（名古屋市）
　原　　希（千葉県佐倉市）
　山口千津子（社日本動物福祉協会獣医師）
　戸田　耿介（兵庫県立人と自然の博物館　三田市）

17:55　閉会の挨拶　鷲尾　勝彦（動物救援本部本部長／社兵庫県獣医師会長）

18:00　閉会

《開会の挨拶》

（司会者）

大変お待たせ致しました。ただいまより阪神淡路大震災シンポジウム「人と動物の大震災－何が起こり何を為すべきか」を開会致します。

始めに、この大地震の犠牲となられましたたくさんの人々と、犠牲となった多くの動物達の冥福を祈り黙祷を致します。ご起立お願いします。

・・・・　黙　　祷　・・・・

有難うございました。

開会の挨拶を日本動物愛護協会事務局長会田保彦さんよりお願いします。

（会田保彦事務局長）

只今ご紹介にあずかりました財団法人日本動物愛護協会の会田でございます。なお、人と動物の関係学会の理事も勤めさせていただいております。本日は皆様お忙しいところかくも多数ご来場賜りまして誠に有難うございました。開会に先立ちまして、一言ご挨拶申し上げます。

かの大震災よりはや９カ月経ちました。この間、被災地の皆様におかれましては多大なご心労、並びに復興におきますご努力、本当に心からお見舞い申し上げます。同様に、ご案内の動物救護につきましてでございますが、兵庫県南部地震動物救援本部を構成致します関係各位の皆様の日夜をおかぬ多大なご努力によりまして、どうやら軌道に乗りつつあるところでございます。

もとよりこの救護事業につきましては、全国各地の動物を愛する皆様から寄せられた多くの物心両面にわたるご支援があった賜物と深く感謝している次第でございます。

そういう意味で本日のシンポジウムにおきましては、この震災で何が起こったか、そしてどうあるべきかについてですね、以降多数の演者の皆様のですね、貴重なご示唆を頂けたらと思っております。その上でですね、今後日本のどこかで起こりうるかも知れない震災時における動物救済のひとつのマニュアル作りにつながればと念じている次第でございます。簡単ではございますが、ご挨拶とさせていただきます。有難うございました。

（司会者）

このシンポジウムの源とも云うべき動物救護に関しまして、たくさんの方々からのご援助がありました。特に、行政として総理府、兵庫県、神戸市、各団体として日本獣医師会、大阪府獣医師会、大阪市獣医師会をはじめとする近畿獣医師会連合会、さらに愛護団体として日本動物愛護協会、日本動物福祉協会、日本愛玩動物協会、ジャパンケンネルクラブ等から非常に多大なご援助を頂いております。また、このシンポジウムの後援と致しまして総理府、農水省、国土庁、兵庫県、神戸市、ＮＨＫ神戸放送局、神戸新聞社、AM神戸、日本獣医師会、近畿獣医師連合会が後援されております。それらの方々を代表いたしまして、2人の方にご挨拶を賜りたいと思います。始めに、兵庫県保健環境部次長横山邦也さんお願いします。

（横山邦也県保健環境部次長）

皆さん、おはようございます。只今、ご紹介頂きました私、兵庫県の保健環境部の次長の横山でございます。このシンポジウムが開催されるにあたりまして、一言お礼なり、お祝いのご挨拶を申し上げたいと思います。本日は全国から多数の動物関係者の皆様にこのようにこの被災地兵庫県に集まって頂きまして、この人と動物の大災害ということでこのようにシンポジウムを開いて頂いておりますことを心よりお喜びを申し上げますと共に歓迎を申し上げる次第でございます。

１月17日阪神淡路大震災が起こりまして、私たち兵庫県は多くのものをなくしました。五千余名の方、また30万にも及ぶ家屋等、あるいは貴重な財産もなくした訳でございます。

しかし、その中で私たちは貴重な経験も学ぶことが出来ました。その一つは、全国から何万人、何十万人という方にボランティアとしてご参加を頂きまして、人と人とのつながり、また、家族あるいは近所の付き合いがいかに大切であるかということを学びました。また、この人と人とのつながりの大切さ、そしてこの震度７というこの都市の直下型地震のあのような状況の中におきまして住民の方に冷静に対処していただき本当に有り難かったな、とこのように思っております。

今もご紹介申し上げましたように、たくさんの方に全国から馳せ参じて頂き、また貴重なご支援もして頂きましたことをこの高い席からではございますけども、厚くお礼申し上げる次第でございます。

このような中で、動物、犬、猫といったペット動物につきましてもたくさんの被災を出し、また、人と共に生活が出来ないという状況に至ったわけでございます。このような事から、私ども、只今ご紹介頂きました兵庫県南部地震動物救護本部というものをですね、関係者の皆さんとご相談申し上げてこの神戸市の北区、そして三田市に2ケ所センターを設置をしていただきまして、救援活動をして頂いたわけであります。ここにもたくさんの方に日夜を分かたず来て頂きましてご支援を頂き、また多大なご寄付も頂き本当に有難うございました。

これまでに約1400匹の動物を救護致しました。そして、只今は約100匹程度になっているというような状況になっておるわけでございます。いずれにいたしましても本当に有難うございました。心よりお礼を申し上げる次第でございます。

私たち、この兵庫県、この9カ月を経過致しまして、鉄道、あるいは水道、あるいは道路といったものをおおむね回復を致しました。避難所の方につきましても5万という仮設住宅に移って頂いて、瓦礫の街と化していたこの神戸等の街につきましても瓦礫の撤去を致しまして、おおむね各街には復興の足音が響くような状況になってきております。私どもはこの兵庫県をもう一度日本に、あるいは世界に誇れる街にしたいということで、阪神淡路大震災復興総合計画というもの、いわゆるフェニックス、500年に一度蘇るというあの不死鳥の名をとりまして、フェニックス計画と命名致しておりますけれど、そのフェニックス計画を作って今頑張っておるところでございます。また、この動物救護活動につきましても、かつて経験したことのない状況であり、今後のためにも、拠点あるいは救済するセンターというようなものが必要ではないか。またこの動物愛護については、兵庫県では平成5年の4月から条例化をしておるわけでございます。さらに、こういった動物愛護を、県民の方に理解していただく場というものが必要ではないかなど考えております。

いずれにいたしましても、今日はこの被災地兵庫県に来て頂きまして、この大災害において人と動物というものはどうしなければならないのか、またどういうことが起こるのかということをご検討していただく、ご議論していただくということをお聞き致しまして大変意義のある素晴らしいシンポジウムになるのではないか、このように期待を申し上げまして、最後になりますが、今日このようなシンポジウムを開催されました方々のご苦労に感謝を申し上げまして、お祝いなり、お礼のご挨拶に代えさせていただきます。本当に今日は有難うございました。

(司会者)

続きまして、社団法人日本獣医師会副会長鈴木一則さん、お願いします。

(鈴木一則日本獣医師会副会長)

只今ご紹介頂きました日本獣医師会の副会長の鈴木一則でございます。今日は杉山会長がお邪魔を致すべきところでございますが、たまたま北海道の獣医師大会と重なっておりまして、会長はそちらに出ておりますのであわててお邪魔を致した次第でございます。ご挨拶を申し上げる前にまずもって、この度の大災害で被災をされました方々、不幸にもお亡くなりになりました方々に対しまして心からお見舞いを申し上げ深甚な哀悼の意を表する次第でございます。

また本日のこの会を主催をしていただいております動物救援本部を組成される皆様方には、災害発生以来本当に自分たちの家庭がそれぞれ被害を受けておられるにも関らず、本当に献身的なご努力を為されまして、1480余頭に及ぶ動物達の命を救って頂いたことに対しまして、全獣医師を代表して心からお礼を申し上げる次第でございます。

私事で恐縮ではございますけども、震災直後のまだ焼け跡も生々しい時に前後2回に渡って現地を見せて頂き、それから三田、神戸の収容所で働いておられる皆様方の実態もつぶさに拝見をさせて頂きました。そして、いろんな事を感じたわけでありますが、その中で特に感じました事はこのような大きな災害に対して政府行政はもちろん、私ども獣医師会といたしましても、これに対応するマニュアルを何も持ち合わせておらなかったという深い反省でございます。

第2点は、これはマスコミも大きく、特に外国のマスコミにも大きく取り上げられておりましたが、災害を受けられた市民の皆様方の実に沈着冷静な対応だった。これだけの災害がおきれば略奪暴動が起きても不思議はないというのが多い世相でありますが、そういう中で神戸の市民が実に整然と列を作って物資の配給を待つ、という姿は外国の人たちには非常に奇異といいますか、立派に映ったようでございます。その点私も同じような事を痛感をいたした次第でございます。

それから、もう一つは三田および神戸の動物救護

センターで真剣に働いておられますボランティアの若い人たちの姿に私は非常に感銘致しました。私たち戦時中に同じ世代を過ごしたものから見ますと、今の若い人たちの姿というのは、ここにおられる林先生たちが作った犬の無気力症候群という言葉が今ちょっと流行語になっておりますが、私に言わせれば若い人達は身勝手症候群だとなっております。正直そう感じるわけであります。

そうした若い方々が本当に真剣に、また喜々として明るくいわゆるそうしたボランティアという仕事に献身をしておられる。そういう姿を私は見て、これは身勝手症候群だなんて言っちゃいかん、意識を改めなければいけない、と私はひとつ強く感じたわけであります。

今回のシンポジウムは、鷲尾会長や渡谷会長に伺いますと、そうした今まで得たり月の体験をもとに改めて関係者の方々が一同に介して、この問題を総括をして後世に残し、そして、いかに対応していくかという事を何か残せれば幸いである。そのためにこの企画を開催したんだ、というお話を承りました。誠に日本獣医師会としてはこれは時宜を得た施策でございまして、出来るかぎりのご支援を申し上げ、またその機会正からんことを心から祈っている次第でございます。

本日まで本当に献身的なご努力をされてまいりました皆様方に心からお礼を申し上げ、敬意を表すると共に、この会が大きな成果をもたらしますことを心から祈念を致しましてご挨拶に代えさせて頂きます。有難うございました。

(司会者)

二つほどお詫びとお願いがあります。ひとつは、今手元に渡っております本、シンポジウムの抄録集なんですが、おそらく数々の誤り、それは演者の方々の誤りではなく、編集する段階での誤植等であります。それは可能な限りその都度その都度訂正を致したいと思います。一重に私の責任であります。よろしくお願いします。

それともう一点これはお願いでありますが、この動物救護の報告、まだ中間報告ですが、資料集というものを今回編集いたしました。いろんな論議がありましたが、実費で販売するということで、2000円になっております。これが売れ残ってしまいますと大変な赤字になってしまいますので、できるだけお買い求め願いたいと、思います。

それでは、第一部シンポジウム、「人と動物の行動、動物は何を見たか」を始めたいと思います。座長の会田先生、よろしくお願いします。

(座長、会田先生)

それでは、只今よりシンポジウム第一部を開催させて頂きたいと思います。私、座長を勤めさせて頂きます会田です。どうぞよろしくお願い申し上げます。

一番最初の演者の方をご紹介させて頂きます。大阪市立大学理学部長弘原海清先生でございます。演題は地震予知と動物、大変興味のあるテーマではないかと思います。弘原海先生どうぞよろしくお願いいたします。

(弘原海先生)

それでは時間も迫っておりますので、早速始めたいと思います。

まず最初に私がこういう住民の観察に基づく前兆的な異常ということに取り組んだ動機をお話ししたいと思います。それで、そのなかで、今物理あるいは化学的な機器計測によるシステムとの補完の必要性ということも触れたいと思います。

これは1989年の秋に3カ月間、私がサンアンドレアス断層沿いの活断層、世界最大の活断層ですが、それを調査した際に用いた資料です。1988年にパークフィールドで書かれたものですが、predictionというのは「予知」、promiseというのは「約束します」、「予知は約束できますよ」という見出しで書かれたものであります。これを含めてずっと調査をしてまいりまして、最後でサンフランシスコに到着して、そこでサンフランシスコのノーマンプリタ地震に遭遇したわけであります。ところが、そのパークフィールドをはじめいろんな予知研究センターの膨大なデータからは何の地震の前兆的な予知あるいは予報が出ておりません。

しかし、よく調べますと、牧場の牛だとか、あるいは活断層に穴を開けて住んでいるリスたちは、1週間前から異常を示しており、また、前世紀の末に起こった有名なサンフランシスコの大地震でも動物が激しく異常を示したという結果があります。是非、調べてみなければいけないということであります。

まず、どんなことがやられているかといいますと、このサンアンドレアス断層沿いの地震というのは30年周期ぐらいで実にきれいに地震が起こるわけです。1988年には、その周期から必ず地震が起こる、という絶対的な自信をもって、発表されていたわけです

が未だ起こりません。というわけで、そこではありとあらゆる限りの観測装置が導入されており、これも1桁スケールの小さいものが東海、あるいは関東に設置されておるわけです。そして、一番北部にありますサクラメントというところに、各地のセンターのデータが24時間オンラインで運ばれまして、そこで新幹線の制御卓のごとくモニタリングしておるわけです。しかし、これだけやっても機器計測システムでは地震予知に成功してないということから、アメリカでは急激にこの方向の離しさ、hopelessであるというようなことから、予知から防災へと転換していきまして、ちょうど1年前のロサンゼルスノースリッジ地震が起きました。これも予知に失敗したわけですが、そういう状態になっておるわけです。

そのようなことから、結局、何としてもこの地震予知を成功させるということに関しては物理的な計測に、まだ明かりが見えない。現在も、世界的に行われているにも関わらず、まだ一度も成功していないということから、私はある意味で実績のある、住民の観察に基づくようなことを是非やりたい、それをあわせてやりたいというように思ったわけです。そして、そういうことを考えている時に、この阪神淡路大震災が起こりまして、私は地質屋ですから活断層と被災状況の調査に現地に入ったわけですが、かなりの人がそういう経験をしていることが分かりました。これは是非記録に留めて、そして無駄にしてはならないということでマスコミを通じて呼び掛けてお願いした訳でございます。ちょうど2月10日に一斉にお願いしたんですが、次の日からは、ファックスでどんどん、どんどん入ってくる、その次は葉書や手紙も来るという状態でした。これを見ながら思ったことは、地震というのは地下の現象ですが、その現象はどういう形で地上の自然の現象に異常が伝わっていくのか、ということです。そして、そこで起こった、しかも地震前に起こるような地下での異常が、どのようにして地震前の自然の異常につながり、またどのようにして動物がそれをストレスとしながら、普段我々が経験しない異常あるいはパニック的な行動を起こすのか、この関係はどこにあるのか。

それからもう一つ大事なことは、そういう動物やものに起こる異常は人間が観察するということですから、この観察がどれだけ正確か、あるいは能率的かということであります。

それから、今いわゆる心理学の方々が是非この証言を研究させて欲しいという形で来ておられます。その時に経験したことは、記憶という形で人間が持ってるわけですから、その記憶が3週間ほど後に私が求めた証言という形で思い出されて、提供されるまでの心理的なプロセスとは一体どういうものであるか、そしてその時におけるいろんな問題というものもどんどん学問的に深められてくると思います。

そういうわけで今日は、自然における異常な現象がどのようにして動物のストレスなり異常行動をつくったのか。そのことに関してまず証言の整理と、それから現在私が考え、これから研究しようとしていることを少しお話して今日の役目を終えたいと思います。

まず最初に証言ですが、ちょうど3月末で切り上げたわけです。すなわち3月20日のサリン事件以降、もう一切証言も途絶えましてマスコミからも全く干渉がなくなったということで、時間が出来たため一生懸命まとめ始めたわけであります。ここにありますように兵庫、大阪というのが証言者の最も多いところでありますが、その他にはその周辺の県にもあります。

これをもう少し分かりやすくしようということで、地図の上に落としたのがこれです。ですから、ある意味でやはり震源地に近いところからたくさん異常が出てるんです。今この会場にもおられますが、高校を中心にして、たくさんの中学の生徒さんからですね、何人かそういう異常を経験したかというような調査が行われるようになりました。その結果、被災地を中心としてだいたい30%、ところが楠木のあたりに行きすと10数%、半分以下、姫路に行きますと2%前後ということで、いわゆる震源地からどんどん離れるに従って急激に、その異常の出現というものが減ってくるということが分かってきました。そのことは逆に、そういうものを前もって観察できてそれが集められますと、だいたいどこで地震が起こりそうかというようなことが分かるのではないかという希望を表わしております。

それから、どんなものが表われたかということですが、先程言いましたように、自然の現象というものがどっちにしろ動物にストレスを与えて異常な行動をさせたに違いないということで、自然の中で空と大地の異常、大地の変化というようなものが出ております。それから観察する対象である人間自身も動物であるわけですから、いろんな異常な経験をしているわけです。特に人間の場合は、内面的な、いろんな心理的な、あるいは夢というようなものも証言できるという意味で、感覚とは違った経験の証言

が出来るということです。獣類、鳥類、魚類、爬虫類、昆虫、植物、その他というのはこれは電子機器です。そういうものに異常が現れたという状況です。

まず、自然の異常でありますが、この空と大地の中で全体の29%、すなわち490件が空と大地の異常になるわけですが、その中で地震雲というのが44%で一番多かった。それから月が異常であったというのが25%、空の色あるいはくすみとか空に虹がかかったとか、そういうような現象が20%、それから発光した、稲光がした、夕焼けあるいは朝焼けの状態が異常であったとか、虹、その他ということでございます。

この中で、たくさん証言がありますからそれは本にお願いするとして、この地震雲については、今気象庁が躍起になって、そんなものは無いんだというように言っておりますが、映像としても随分たくさんの地震雲をとらえているわけで、これは2種類あるということが分かります。それは後で写真を見せながら説明致します。

それから大地の変化というものは、最も多いのが地鳴り、それから群発地震あって、それから井戸の水が非常に増えた、減った、あるいは池の水が無くなった。こういう温度が上がった、海が非常に濁った、泡がたった、湧き水、川などその他、大地の変化が記録されております。

少し送られた写真を見てみますと、この私の「前兆証言1519」の中の表紙になっている写真でありますが、これは2種類の地震雲が出てるというんで選んだ訳です。この一つは水平に非常に長い、そして長時間滞留する、飛行機雲とは明らかに違う形、もう一つは大地から渦巻き状の雲になって噴出してくる、この2種類でございます。そして、これは明らかに普通の気象雲ではございませんが、これに対してはいろいろと意見がある、という状況であります。

しかし渦巻き状の地震雲と言ってもいろいろございまして、遠くから撮られたもの、近くから撮られたもの、いろいろあるわけですけれども、これは非常に近くから撮られたものです。振り返ったら前は真青な空で後ろは一部空が見えていますが、こんな形で真黒な雲がわあっと沸き上がっていくというような状況です。これすぐ真下で撮ったものですが、もう少し遠くから撮ったものを見てみますと、これは余震の時に出てきたものですが、こういう形でわあっと出てきている。これは前の方は地震の被害を受けておりますが、こういうものが、これは関東大震災の時でもいずれも言われている現象でありましたが、今度も随分見られました。

そして、空気が黄色のフィルターをかけたような状況になった、あるいは空が霞んで、そしてその中で発光現象が見られた、あるいは渦巻き地震雲がどんどん発光を伴って昇っていった、非常に強い臭いがしたというような形で、それからその中に入ったらものすごく暑かったというような証言が集まっております。

それから月の色も、これはコピーのコピーですから分かりませんが、大変異常な空気の中で、これはそんなに赤くはないですが、赤い月が昇ったと。それから、これが二重の虹ですが、このようなものを見られた方々が、写真を盛んに現在でも「あのカバーの写真を見たけど、私も同じのを撮ってる」と言って送ってきておられます。甲虫というような形で、これは色はサーモンピンクのものすごくいやらしい色をした写真であります。

それから医学的にはレントゲン写真にこのようなスパークが、こういうのは未だかつて一度も撮れなかったのに、この地震の前、2日前のレントゲン写真で出てきた、ということが証言されております。なぜこうなってくるのかという原因は、あの渦巻き地震雲で巻き上がる雲に秘密が隠れているのではないか、非常に強い電荷を帯びた微粒子、岩石の非常な微粒子が雲の要素となって地中から飛び出してくる帯電エアーゾル、これはトリビッツさんという人が言ってたんですが、それを証明したものではないかというふうに考えています。

それで非常に強い帯電状態というのは今のレントゲンフィルムとか、あるいはこれから説明しますその他の現象、証言にもたくさん出てまいりますが、獣類、ここで問題になっています獣類の中では、一番証言の多かったのは犬の35%、これが全体で19%、324件の中の35%、ネズミが25%、猫が25%、次いでイタチ、モグラ、ウサギ、ハムスター、リス、それからイノシシ、イルカ、その他という形で報告が来ております。どっちにしろ犬とネズミと猫、これが最も主要な獣類であります。

それから鳥類では、全体の16%、281件ですが、カラスが35%、鳥達って分類は分からないスズメ、カモメ、ハト、インコ、ヒヨ、キジその他という形で、今まで記録にあるような鳥も含めて証言が寄せられております。この中でカラスが一番皆さんに強いインパクトを与えているようでありまして、まず群れが出来る、それからその鳴き声が、普通のカーカーという声からグアーグアーというような低い声

に変わる。とにかくぱっと窓を開けたらベランダのところにカラスが止ってものすごい声でこっちを見て鳴いていると、ヒッチコックの鳥だ、えらいことだ、という印象で見られたようであります。この中にも経験された方があるかもしれませんし、ないかもしれません。

魚では、やはり名前が分からない、それからナマズ、イカ、金魚、ボラ、グッピー、プレコ、ドジョウ、コイ、カレイその他ということになって、やっぱりナマズが一番注目されて、最近ではいろんな水族館のナマズ、海遊館のナマズも非常に詳しく報告が出ておりますし、それから滋賀県の県立の水族館のナマズも含めてですね、その暴れ方、その特徴、それらも出ておりますが、いわゆる住民レベルでは、自宅で飼っている、机の上にプラスチックの水槽でナマズを飼っておられるそのナマズが蓋を吹き飛ばしてものすごく暴れる。それで困ったということで。今までのナマズが暴れたというのは池だとか、川だとか、そ水だというところの話でした。ですから、地電流がなんか変わって、そしてそのナマズを刺激して暴れていたと、そういうことだったんですが、実はそういう、プラスチック容器で飼っているナマズだとかカレイだとかキンギョだとかそういう全ての魚達は、地電流とは絶縁されているわけです。にもかかわらず、今回ものすごく暴れた、そのことは一体何を物語っているのかという意味で今までとは違ったいろんな解釈が必要ではないかと思っております。

その他昆虫とかの問題、それから今回初めて出てきたのはオーディオビジュアルの関係、それから自動車のナビゲーションシステム、あるいはコンピューターシステムというようなものに現れた異常でありまして、電波的な電磁波の問題とそれから静電気による異常というものを意味しているんだと思います。

ここで注目したいのは、この会で、愛玩動物を含めてどのぐらいの動物が前兆異常を示したのかというようなことを調査されておるということを新聞で見ました。すなわち全ての動物が異常を示すわけではありません。個性があるということですね。しかも現れ方にしても、激しいパニック状態を呈して猛烈に鳴き、鎖を引っ張りというような暴れ方の他に、大変な自失状態で毛を逆立てて、そして歩行も困難で餌も食べないというような意味での異常、大きく分けて２種類あるんですが、そういう意味で我々がこの地震予知にこれを活用する時には、そこらの辺りが非常に問題になってくるんであろう、と思います。

というわけで、何がなぜというような事をやはりきっちり押さえていくことが、今後地震予知に正確に反映する時に必要になってくると、そういうふうに思われます。動物の異常を示した歴史的な地震というのは、もう世界中調べてみますと、場所とか時間とはあんまり関係なくやはり大きな地震の前には必ず動物異常が現れているという事が分かってまいりました。

これの分類と合わせるためにちょっと視点を変えて今度の阪神淡路大震災の動物の異常を集計してみたわけです。ここのいわゆる大型の獣類、小型の獣類、これがここまで41%ほどあるんですが、大部分は小型の獣類という分類になるんであろうと思いますが、これは都市の動物層を表しております。鳥でも、家禽類と野鳥を見ますと、これが鳥達ですが、ほとんどは野鳥で家禽類は非常に少ないということ。それから魚類ですが、これは海の魚、川の魚、とにかく比較的数が他に比べて小さい。これは爬虫類ですが、これをちょっと頭の中に置いて頂きまして、次にこのデータを見てください。

すなわち中国での獣類、これが大型、小型、それからこれが鳥ですが、野鳥と家禽類はほぼ同じです。そして魚がこんなにいっぱい。日本の歴史地震のデータを調べてみますと、これが獣類、それからこれが鳥類です、野鳥とか。それから、あと魚がこれだけあるわけです。半分以上は魚。しかも、その中では海の魚が非常に多い。それで、川の魚はこれだけ。すなわち、日本の地震の多くは海洋のプレート境界に起こる巨大地震に伴った記録が随分入っておりますから、魚が少ない。海洋直下型の地震では、このように魚が非常に多いわけです。中国はこれだけです。すなわち中国の地震、この50件ですが、これは全部直下型です。すなわち直下型の地震では魚は非常に少なくて獣類と鳥類が多い。それが日本では獣類も鳥類も割合が少なくて魚が非常に多い。それで阪神淡路の、今さっきのと比較してみますと、まさに中国の類、すなわち魚が非常に少ないということで、しかも、この割合が都市の特徴を持っており、都市直下型地震の前兆を示している、ということが非常に重要であります。

そして、そういう動物に異常が現れるような地震を、またそのマグニチュードを調べてみますと、この中国の50件の地震のマグニチュードは８、７、６、５、ここまでは動物異常が現われるんですが、それからぱたっと出ない。すなわち、直下型地震の場合にマグニチュード５よりも大きいひどい地震を動物

異常は示しております。

それで日本の場合を見ましてもですね、8、7、6、で5からはなくなってしまう。すなわち、海洋直下型の地震は震源地が遠いですから、そういう意味ではより大きな地震に対して動物異常が現われる。つまり、どちらにしても、動物異常が現われるようなものはひどい地震であるということを意味しております。

それで、このようないろんなことから、場所、それからどんな規模というようなことが色々分かるわけですが、一番の問題はいつ起こるのかということであります。

いつ起こるのかということですが、これが今の皆さんが提供してくださった428件について、すなわち月、カラス、ネズミ、犬、猫、月というのは空気の状態ですが、そういうものを並べてみます。第一段階、昨年の秋ぐらいから正月、すなわち1カ月前ぐらいから10日前ぐらい、それから10日から1日前がこのライン、そして24時間以内でものすごく異常が高まってきたという状況であります。このようなことから、大きな地震の場合には必ず直前にはこういう住民で観察できるような異常が急に現われる。現在の状況でしたら、これは非常に大きな一種の情報としても伝わり、これが分からないというような事はまずないと思われます。それで時間がございませんから、現在どうなっているか、ビスポというシステムで私が全国からの情報を今集めておりますが、伊豆の地震の場合に現在どういうものが集まってるかといいますと、前兆、動物における前兆の異常は来ております。そして、それを見てみますと、魚、やはり魚が利尻で最初に非常に大騒にとれたとこういうようなこと、それから陸上のものでは穴にすんでいる蛇、ミミズ、それから穴に住んでいるような、岩場を這ってるあれ、なんて言うのか知りませんけど、そういうものにとにかく異常が現われる。

しかしたくさんある温泉でも、温度を計ったり水位を計ったりしておられますが、それには異常は出ていないというように、それぞれの特徴があるわけで、今私のところに来ている情報を含めて、日常的なノイズという様な問題、それからマグニチュードに対してどうかとか、より早い段階から出てくるものを地道に積み上げることによって、将来地震予知にこれが有効に使われると思います。

後は実験をどうしようかという話は時間が足りませんから致しませんが、そういうものも同時に五感以上というものの視点においての計測という様なことも可能である。帯電エアーゾルを計るということは神戸の機械メーカーが検討しております。このメーカーは、世界的にも有名ですが、今度の地震で被害に遭いましたけども、そういうものを使えばですね、動物異常とこれとの対応関係も分かるということで、どんどんそういう方向で研究を進めていきたい、そういうふうに思っております。

以上、本当の中間発表、私としては非常に中間発表的な話でありますが、しかしこれをまず知って頂く、みんなで共有するということが今後非常に大事だと思って、本という形で出版いたしました。どうもご静聴有難うございました。

（座長）

弘原海先生どうも有難うございました。今、科学万能の時代ですが、それに頼り過ぎると逆に、人や動物が本来持っている叡知が曇かにされてしまうんじゃないかという、そんな面を含めた貴重なご示唆を頂いたかと思います。特に本日ご来場の皆様におかれましては、犬猫を飼っていらっしゃる方も多数いらっしゃるかと思いますが、要は日頃からよく観察を続けるという事が大事なのかなと感じております。先生どうも有難うございました。

なお、フロアの皆様からもご質問を承りたいと思うのですが、それは今お手元のプログラムの、お三方のご講演が終わった上でまとめてご質問承らせて頂きたいと思いますので、ご了承ください。

それでは、お二人目の演者をご紹介させて頂きます。神戸市立王子動物園長権藤眞様、演題は「動物園の動物達」です。権藤先生お願いいたします。

（権藤先生）

紹介頂きました王子動物園の権藤でございます。今、弘原海先生がおっしゃったことは大いに、我々参考にしたいと思っております。

動物園は皆さんがご存じのように、被害の大きかった灘区にあります。面積は8ヘクタールで、象から鼠いろんな鳥を入れて200種類の1,300点の動物を飼育しております。当日ですが、向かいの県立美術館が潰れたりしておりまして、被害は無いというわけではありません。新聞報道では無いということで出ておりますが、小さな亀裂とか水鳥のプールが割れて水が無くなったとか、建物にヒビがいったとか、地下埋設のパイプが折れたとか、濾過器が倒れたとか、いろんな被害が出ておりまして、現在修復工事をやっておるとこでございます。

当日、1月17日は朝なもので動物園は無人状態です。それで、直前のことはどうであったか、ということがなかなか分かりません。まず私が心配したのは、最近の動物園というのは鉄格子の檻で展示するということをやめて、動物が自然に生きている状態を再現したいということで、ガラス張りで中に水があったり木や草が生えておる、というような状態のものを作っておりましたので、瞬間、あっ、アシカ池の450トンのプールの窓ガラスが割れて出てるんじゃないか、白熊舎の200トンの水が、ガラスが割れて出たんじゃないかとか。それからチンパンジーとかキンシコウとかオラウータンとかそういうものは寝室もガラス張りでして、その安全合わせガラスが割れたんじゃないかとか。

それから爬虫類ですね。ワニとか蛇はやはりガラス展示のプールにおりますから、そこが割れて動物が飛び出しておるんではないかとか、そういうふうに不安を感じたんですが、とにかく行くことも出来ず連絡もなかったんです。しかし暗がりでも3人ほどが行きまして、どうだったかと聞きますと何の被害もない、動物も怪我も無く、死んでもいないと言うことを聞いて、やれやれということで出勤していったわけです。しかし、これは不特定多数の集客施設、年間130万人の人が来ておるわけですから、もし昼間そういう事故があったらどうなるかということについては、東海地震の頃にできた大規模震災特別措置法に、猛獣舎は一般の建築基準法より強くしなければならないとか、観客の安全を保つためにどう対処すべきかということがありまして、昭和26年にできた動物園なんですが逐次動物園の老朽化施設を、対震耐力を20%程増して作っておりますので、今回の震度7の直下型地震でも建物の倒壊がありませんでした。我々、お客さんと動物を守る立場でやっておりましたのが非常によかったなというように思っております。

ところが、その当日に動物園で何をするかといいますと、駆け付けてくれたのが全体で、職員やいろんな人をいれまして150人ほどおりましたが、その内18人が夜、夕方までに出てきて動物の安全を確認したということです。

それから、もう一つは、あまり被害がひどいため、王子動物園の北側にあります王子体育館に避難者の方と亡くなられた方の収容をしておりました。しかし、そこも収容できないということで、王子動物園の科学資料館にある300席の、絨毯敷のホールに遺体を収容できないかということで、難区の対策本部から要請がありまして引き受けたわけです。それで、私とあと3人ほどで18日の明け方までに41人の亡くなった方を抱きかかえて安置しました。ですから、動物園の動物を見にいく暇がなかったわけです。

それから、自衛隊が出動してきました。動物園のすぐ東の陸上競技場にヘリコプターがどんどん、どんどん降りてきて物資を搬入する。それから、自衛隊の方が来られたんですが、彼らの泊まるところというのはテントですが、都会ではコンクリートとアスファルトでテントが建てられない。陸上競技場はヘリコプターとかトラックが入りますので、動物園の中を使わせてくれということで17日の夕方からどんどん、どんどんトラックと自衛隊の方が来られて、おおよそ当日から800人の方が動物園の上の上でテント生活をされたわけです。

そういうことで我々17日から1月の末まではほとんど避難者の方の食料調達とか、ご遺族の方の茶毘に伏すお手伝い、そういうことに明けくれておりました。それから、非常に困ったことは、新聞、テレビ、ラジオの方がどんどん、どんどん来て同じことを何遍も聞くわけです。

誰かが対応しなければいけないということで私が事務所で一人で18日から対応しておりましたが、動物が逃げ出してない、動物が怪我をしてない、動物舎が壊れてないということを、マスコミの人が聞いても、それがちっともニュースにならないわけです。

そういうことから今度は一般の方のほうで、たぶん動物舎が壊れて動物が逃げているんじゃないかという様に思われたのではと思いますが、出勤途上の代替バスの中で、(神戸の人は自分のことで大変ですからそういう話はでないんですが、)関東方面から来た京京弁の若い二人が難区の動物園、王子の動物園のトラが逃げて難区がパニックになったと、そういう話をしてたということを聞いております。他の人もそういう話をしている、というデマがでるんですね。

ですから、いかにこういう地震の時、火事の時はデマが出てそれに惑わされることがあると思いますが、我々動物園は以前から、地震の時、火事の時の動物の事故を想定しているので動物は絶対逃げ出しません。猛獣等は二重三重構造で扉が壊れても外に出ないという構造にしておりますし、また動物が脱出した時の捕獲訓練もやっておりましたので、そういうデマは絶対に出ても信用しないでくださいよ、というように言ったんですが、それもほとんど報道されなかったんです。

それで動物のことになりますが、動物園の動物は大体夜は寝室に入れます。外に置いておきますと、夜だれかが来て変なことをするとか、こういう事故の時に飛び出されるんじゃないかということで、全部寝室におりました。したがって、前日の5時半以降は誰も見てないわけで、動物の異常行動があったかどうかというのは後で聞いたんですが、みんな何もなかったということでした。それから、神戸の人間、我々も含めて地震が神戸で起こるということを夢にも思わなかったわけです。

そういう訳で、後であの時そうじゃなかったかな、いう話を聞いたのは、４５０トンの水がたまっておりますアシカのプールで、いつも餌をはやるとき寄って来て食べるわけですが、普段は地球の北半球におります水中の動物は大体左回転で遊泳をしているのに、1月16日の昼には飛び上がったり急に回転したり、右回りしたり非常におかしいと状態でした。その当時見ておりました飼育係と獣医師が、「これは地震が来るのと違うか、おかしいで！」と言ったんですが、「何を言うとん、地震なんか来るかい」、ということで誰にも言わなかったというようなことを、後で聞いております。

それから、私は事務所にいたり避難所に走ったりしておりましたが、余震がどんどん来ますとね、ほとんど、あっ今度は震度４ぐらいちゃうかなという具合に当たるようになったんです。その度に近くの象舎にいる、日本で一番年寄りの、象のスワコ、53歳の所に飛んでいきますとやはり部屋の隅で、いつでも座ろうという、我々の言葉で言いますとへっぴり腰、前脚は立っているんですが、後ろ足はこう落としている状態でじっとしてるわけですね。

私は動物園に、20年おりますが、朝必ず象舎の前に行ってサラームと言う挨拶をしますと鼻をあげてくれるわけです。それでナンキンなんかをあげるんです。それでそのときも大声でサラーム、サラームと言いますと、やっとこちらに気がついて、姿勢を直して鼻をあげて近づいてくる。それが余震の度に走っておりますので、事前にどうしたかは分かりませんが、振動の恐怖とかで、そういうことになるんじゃないかと思っております。　それから地震の後、17日から全ての動物を寝室に閉じ込めたまま飼うことにしたのは、大きな余震が来るかも知れない、外において暴れて怪我をさせてはいけない、また檻が外れるかも分からないからということで、ほぼ２週間ぐらい寝室に閉じ込めて飼っていたんですが、この作業が大変だったんですね。

この地震で我々生活するほうも一番困ったことは、人間にとっても、生き物にとっても、大事な水の不足だと思います。電気、ガスがなくても生きていけますが、水がなかったら大変だ。動物園では井戸を３本水道と併用しておりますが、90メーターの井戸２本が振動で壊れて、電気が通っても水が上がって来ませんでした。幸い200メーター掘ってある井戸が助かりまして、これは日量400トンぐらい出るんですが、これをアシカとシロクマに使っていました。そういう井戸水を使っていたので何かアシカが地下からの異常を感じて動いたのかな、と科学的に興味のあることなんですが、そんなふうに思っております。

それから、やはりびっくりして餌を食べなかったのではということを皆さんが言われているんですが、オオアリクイが一日二日食べなかっただけで、他の動物はけろっとして食欲はぼりぼりあった。食べなかった動物はないということを皆言っております。というのは、我々都会の人間は五感が減っているのと同様に、動物園の動物もほとんど動物園生まれで、動物園の小さな所でしか暮らさない、上げ膳据え膳で餌をもらっているということで、そういう地震の前兆を感じないのかなあとそのように思ったりしております。

例えば、アシカは群れで泳いでおりますが、他の動物は一匹か数匹で生活しております。カバについては17日に雌が水の中にはいって出てこなかったので、キーパーの方がびっくりして死んだんじゃないかと思って棒で小突き回しても動かず、水を抜いて初めて、ああ生きておったと確認されました。

これは雌のカバでチャメコというんですが、アフリカから来て日本で子供どんどん増やしております。もう一つの雄の方は動物園生まれ動物園で育ってるわけで、地震が起こっても外で欠伸かいて寝てたというふうなことです。

それからライオン、トラでも地震の後ぼうわあっと吠えております。ところが食欲も全然変わらない。

猿類はやはりびっくりして抱き合うのですが食欲はちっとも変わらなかったというような状態でございました。

やはり、個体差が非常に多いなというふうに感じております。というのは、須磨のイルカ７頭ショーを１頭だけがショーに参加しないで、異常な行動をしたということも聞いております。こないだの伊豆の群発で、網代に油壺マリンワールドという水族館に、そこの船長が友達なので、電話して予兆がある

かどうか調べておいてくれよと言いますと、やはり1頭だけが大変な異常行動を起こしたそうです。割と個体差があるなと感じました。それから、当日からはほとんど動物を見る機会がなかったのですが、やはり、爬虫類のワニは胴体が地べたに長くひっついて水の中におりますので、明くる日の朝はそのガラス張りのガラスに暴れて擦った跡があったそうです。ひょっとしたら事前になにか感じて暴れたんじゃないかと思ったりしております。

スライドを持ってきておりますので、ちょっと見て欲しいと思います。お願いいたします。

これは現在の動物園の入り口を示しております。次、お願いします。

これはこの辺りが動物園でございまして、こちらが摩耶の方、これが陸上競技場のヘリポートです。ここはサブグラウンドで自衛隊のトラックとテントがあります。この辺は遊園地ですので全部テントだらけで、これちょうど桜の花が咲いているところで、自衛隊さんと非常に仲良くなりましたので、隊長さんに上空写真を撮りたいと言ったら、どうぞということで乗っけてくれたわけです。次、お願いします。

これは、ついでに飛んであげるということで阪神高速が倒れてなくなった青木の辺り、深江ですか、あの辺りの写真です。次、お願いします。

これは長田の駅の焼けたほうでございます。次、お願いします。

これもその辺りじゃないかと思いますが。はい、次、お願いします。

これは動物園はその当日から閉鎖しておりましたので、こういうふうな看板を出しております。次、お願いします。

駐車場が800台ほど停れるんですが、ここの場所は全国の派遣された警察のパトカーとそれから避難してこられた方の方の車でいっぱいでした。次、お願いします。

これは動物園の建物から隣のヘリポートを見て、今ちょうどヘリコプターが飛び上がる瞬間です。この辺にいっぱいあります。それでヘリコプターが18

▲写真1

日からブンブン動物園の30メーター上空を飛び回りましたので、地震で動物がびっくりしたというよりは、騒音でびっくりしております。それから、前の道を消防車、救急車が走りますので、私は戦争中子供でよく知っておりますが、まるで戦争中の飛行機の空襲かなと思うくらいだったんですが、そういう騒音で猿が逃げ回ったり、入り口のフラミンゴ200羽ほどがみんな飛び回って落ち着きませんでした。本来ならその当時にフラミンゴは巣を作って卵を産むんですが、ヘリコプターが飛ばなくなった3月の中頃まではそういう巣作りをしなかったので、ストレスが非常にあったのだと思います。次、お願いします。

これは自衛隊さんに動物園が占領されているということで、こういうのどかな風景に厳めしいトラックがあることを撮ってございます。次、お願いします。（写真1と2）

これは南ゲートの前の広場ですね。ここは通信隊がおりましてこういうアンテナが立っております。次、お願いします。

これ遊園地のロボ君と言って有名なものなんです

▲写真2

▲写真３

が、そこが医療隊の場所、これが指令テントでございます。こっちが食堂でございます。次、お願いします。

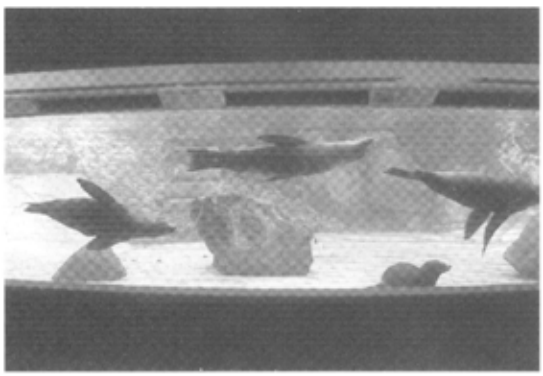
これもテントがいっぱいあるとこですね。（写真３）はい、次、お願いします。

これは入り口入った所のフラミンゴです。当日はカメラが壊れて飛び回っている写真が撮れてなかったんですが、こういうのんがおります。次、お願いします。

これがアシカ、先ほど言いました450トンの水がたまってる10メーターのガラス窓ですね、ここはずっといつも左回りをする場所なんですが、こういう状態のところが地震にも耐えたということです。（写真４）次、お願いします。

これもシロクマのプールなんですがぜんぜん事故も無く、もっております。ただここからの濾過器にいくパイプが潰れてついこの間まで水が濁ったままでございました。次、お願いします。

これはチンパンジーの1,000平米ほどある放養場ですが、ヘリコプターが上を飛び回りますので走り



▲写真４

▲写真５

回ってキャーキャー騒いでいるというような状態がありました。次、お願いします。

これはあの金糸猴、ゴールデンモンキーという中国からお借りしてる樹上生活の猿ですが、やはりヘリコプターが飛び回りますと落ち着かなく下の方へ来たりしております。次お願いします。

やはり動物園というものは、人に来ていただかなければならないところですし、被災を受けた学校が避難所になっておって子供の授業ができない、遊んでばっかりおる、どうにかならないかということで、動物園の本体の方の、自衛隊の車が走り回る所は避けて、動物愛護の気持を育てるという心でつくりました、子供の国というふれあい動物園の8,000平米の方には自衛隊が入ってないので、３月１日から避難所になってる学校の子供達を、避難所のボランティアが連れて来る、ということで早速笑顔を見れたということでございます。次お願いします。

これはその当日どんどん入ってきておるところです。（写真５）次お願いします。

日頃動物園ではこう目の前でレクチャーはしないのですが、職員もほぼ１カ月くらいお客さんが来てくれなかったので、張り切って子供達にコアラの生態学とか、どんな餌を食べているのかとかということを笑顔でやってこれるようになっております。次お願いします。

こういうところですね。はい次お願いします。

終わりです。有難うございます。

まあ動物園の方は出勤してきたみんなの食べるものが無いので、被災者の方にどんどん送ったりする仕事をしていました。やはり地震が起こった時、何

か災害のあった時には、動物の餌も大変大事ですが、世話をする人の食事も大変だったなあと思います。調達に苦労したわけでございますが、動物園の餌はだいたい保存食、冷凍肉とか乾燥、まぐさの乾燥したもの、ペレットがたくさんありましたので苦労はしておりません。しかし生鮮野菜が少なくなったので京都動物園からもらったり、水鳥のプールが割れて飼えないので大阪動物園に預けたり、そういうことをやっておりました。

それから一番困ったのは、爬虫類は、電気やガスを使って暖房しておるのですが、それがちょっとできない。つまり、電熱器とか温風ヒーターをいれますとヒューズが飛んでしまうということで、爬虫類を死なさないような仕事に四苦八苦をしておりました。

それから動物の異常行動というのを少し言わなければならないのですが、先程もゾウがヘッピリ腰になったとか、カバが水に飛びこんだとかいうことぐらいです。それからアシカのことですが、やはり非常に個体差があるなということを思っております。

それから私の知り合いも他の避難所で聞いてみますと、6匹猫を飼っていてその内1匹だけが自身の前から逃げ回ったということでして、やはり個体差があるのではないかと思っております。

それから私のほうも、あの中国の天津の動物園と20年来の付き合いをしておりまして、先程弘原海先生が、中国のデータを示しておられましたように、中国の方はここ20年来、唐山とか、海城とか、渤海の震度7くらいの地震が続いております。唐山地震のときに、討論をした。天津の地震局というのがありまして、大きな州に、7つの地震観測所があってその内2つで動物を飼って震度計と併せて併用してるということでございます。なぜ地震局でこういうことを始めたかといいますと、やはり地震の前にいろんな動物が騒ぐのだそうです。

天津の動物園にパンダが3時間か4時間前にキーキー鳴いて転び回ったとか、ヤクが餌を食べなくて地べたを跳ねたとか、白鳥と、たくさん飼っております鷲鳥とが池から出てしまったそうです。それから農家、日本と違いましてまだまだ農家がたくさんありますので、そういうところの家畜異常ということも、どんどん出てきたので、そういうことを物理学と両方併せてやるということをしてるようです。

私は聞きましたが、もう既に一般住民の方の通報システムが出来ておるようです。1つの村に、委嘱された方を呼びまして、簡単なレクチャーを受けるそうです。そしてその方が地震局にどういう動物がどうなっているか報告するそうです。動物園からも報告をするということになっております。

それで、地震局でどういう動物を飼っているかと聞きますと、鸚哥、鶏、犬、馬、牛、羊、馬、鼠、鯉、鯰等を飼ってるようです。あとは鯰とか鯉の水の中で暴れる状態を電気的に数値に現しているようです。それから鸚哥は泣き声を多分声紋か何かの変化を捕えてそれを参考にしてるというようなことをされておられます。

それから余談になりますが、一般の方に地震のことを通知するために、おおよそ十万人ぐらいに動物に事前にどういう変化があったか、地震の時にどうしたらよいかというふうなパンフレットを作ってレクチャーしておりました。その中に今迄中国でも歴史的なデータとか最近の動物の異常の報告から、おおよそ50種類くらいの動物が一般の方の目につくということで、それに対する観察、一般の人の観察ということで歌が出来てるんですね。詠み上げますと、「地震の前、動物に予兆がある。大衆の観測で予報することが大切だ。牛、羊、騾馬、驢馬は囲いに入らず、豚は餌を食べず、犬は狂ったように吠え、家鴨は水に入らず岸辺を騒いでいる。鶏は木の上に飛び上がり、金切り声で鳴く。凍てつく空のもと蛇は穴から雪原に這い出し、親猫は小猫を銜えて逃げ回る。兎は耳を立て跳ね回まわり物にぶつかる。魚はパニックで水面に飛び上がる蜜蜂は巣から離れて騒ぎ回る。鳩は怯えて飛び巣に帰らなくなる。皆で一緒に観察し、異常をまとめて予報しよう」

こういうことを一般の方に覚えていただいて、通報システムを併用し地震を予知しようということで、海城地震の時は上手くそれらと併せて地震の震度計などいろんな方法で調べられたため、通知で大体40万人ぐらいが助かったそうです。後は唐山地震の時はそういうことが上手く機能しなくて、24万人の

方が亡くなったそうです。色々中国の方は経験が多いので、我々もそういう方面から勉強したいなと思っております。

動物園は全国で160ほどあり、水族動物もたくさん飼っておりますので、私としたら日本動物園水族館協会でひとつの標準的な観察指標を作ってなにか役に立つことはないかと考えておる次第でございます。以上有難うございました。

（座長）

篠藤先生有難うございました。動物が地震を果たして予知できるのかどうかという大変興味あるテーマでございますが、先程の弘原海先生、今の篠藤先生の話を通じまして、必ずしも全ての動物が予知して以上行動をとっているわけではなくて、個体差、個性差があるということですね。ということは若干興味があるテーマではありますが普遍性には欠けているのかなと感じます。

しかし篠藤先生の今のお話にありましたように、異常行動を標準化して、観察手法がもっと考案されて、データが蓄積されていけば、今以上にですね、動物の予知ということに関心と興味を持って頂けるようになるんじゃないかなと思います。

それでは、３人目の演者をご紹介申し上げます。日本愛玩動物協会の吉田明子さんです。演題は「避難所の動物達」です。お願いいたします。

（吉田さん）

日本愛玩動物協会、大阪府愛玩動物飼養管理士会の吉田でございます。今回私共は、一番身近な避難所におけるペットと、ペットと一緒に避難された飼いまの方たちの実体調査を致しました。避難所で生活をされているということは大なり小なりの被災に遭われた方ばかりでございます。人間と共に動物も一緒に大震災を越えて避難してきて飼い主と一緒に生活をしているということになります。

私達が避難所に入りましたのはちょうど大震災から１月目の２月18日からでした。川西市、西宮市、芦屋市、そして神戸市へ入りいまして、灘区、東灘区と避難所68箇所を回りました。内１箇所は調査を拒否されましたけれども、67箇所の避難所を回りまして、飼い主210名にお会いし、生活なさっているペットの様子などを伺ってまいりましたので、本日発表させていただきます。

それではスライド１番からお願いします。

これはどの避難所でも見られましたが、避難所の入り口に、いろんな生前情報を掲示されている掲示板です。私達も、（この辺りなんですが、）ペットに対する情報を見つけますと、全部メモして帰り、そしてまた対策本部、それから動物救護センター等の案内等も提示して帰りました。次お願いいたします。

これは避難されている方の現在飼って入る動物の場所についてお尋ねいたしましたところ、一番上から、

避難所でペットが飼い主と同居している　犬が64、猫が22。

避難所内の廊下等で飼っている　犬が２、猫は０でした。

避難所の屋外で飼っている　犬が25、猫が２。

それから避難所に入らなくて自発的にテントの内、又は外で飼っている犬が31、猫は１。

また自分の車のなかに入れている　犬が２、猫は０でした。

で、後、動物病院に預けている　猫が４。

それから自宅などでそのままペットをおいている　犬が34、猫が50

これは猫の習性で、連れてこようと思っても猫がそのまま逃げてしまったりして、餌を運んで自宅でそのままおいているという回答です。

それから親戚友人宅、それから行方不明。このような結果になっております。次のスライドお願いします。

はいこれは少し見えにくいかと思いますが、地震後の動物の状態はどう言うふうになっていったかとお尋ねいたしましたところ、こちらの方が犬です。こちらが猫のデータです。

犬の方では、約60%の犬が、室内の寝場所にちゃんといたと答えておられます。

そして猫の方は室内の寝場所にいたと答えたの75%もございました。

次いで、庭に繋いでいた犬が4.7%、それから庭の小屋にいたと答えた犬が4.7%、それから室内のケージの中にいた犬が2.4%、その他となっております。

で、猫のその他22.7%ございますが、室内のケージの中にいた猫が2.3%。このその他の内訳で、倒れた家具や瓦礫の下にいたという犬や猫が一番多かったように思います。スライド５番お願いします。

これは地震に対してどのような対応、反応をしましたかという質問に対してお答えいただきました。黒が犬で、網が猫でございます。一番上から

どこかに逃げてしまっていた　犬が6.8%、猫が21.7%

じっと隠れていた犬が10.6%、猫が17.4%

非常に怯えていたと答えた犬が最も多く、51.6%、猫では51.2%　ほぼ同じ数の犬と猫が非常に怯えていたということがわかりました。

そして、興奮していた　犬が20.5%、猫が10.9%

盛んに震えていた　犬では46%もございました。猫では19.6%

そして、盛んに鳴いていた　犬8.7、猫では4.3%

それから、普段どおり落ち着いていた　犬猫それぞれ8.7%

その他　となっております。次お願いします。

これは瓦礫の中で見つけた猫で、調査員が撮影しました。飼い主は避難所生活なさってるんですが、毎日この猫のために餌を届けているそうです。次お願いいたします。

はい、これは地震に対する後遺症についてお尋ねいたしましたところ、元気が無いと答えた飼い主が

犬8.5%　猫8.3%

その次、食欲不振であると答えられた　犬が13.5%、猫では8.3%

下痢をする犬が12.8%

嘔吐がある　犬では3.5%

震えがある　犬9.9%

未だに怯える　犬22%、猫では22.2%

毛づくろいが乱れた　犬が10.6%、猫では5.6%

私共が調査いたしました時には震災からもう1月過ぎておりましたので、その時点でのデータだと思ってご覧ください。次お願いします。

これは避難所でペットと同居なさっている方を撮影させていただいたんですが、今度の調査でこのようにペットと一緒に暮らしている動物たちは後遺症が少なく、また回復も早いということがわかりました。次お願いします。

これは避難所の中で飼えなくて、外で飼っているワンちゃんです。これは飼い主の方が自発的に室内の中で飼っていた犬ではなくて、普段から外で繋いでいたり、犬舎の中で飼っていた犬で、1月過ぎて一番寒い頃だったのにもかかわらず、ワンちゃん達も震えながら飼い主の言うことをよく聞くというようなことでございました。次お願いします。

これも廊下の片隅で暮らしているワンちゃんです。これも飼い主が、避難所で犬の嫌いな人、それからペットアレルギーの方がおられるということを聞いて、自発的に廊下の外で飼っているというような状態です。次お願いします。

これは予知行動ということで、本日のテーマになっておりますが、この予知行動という言葉は調査カードに使わせていただいておりますのでそのまま出ております。飼い主の方々に、今思いだして、あなたがたの犬猫は地震の前、何か思い当たるような不思議な行動をしましたかとの質問と思って頂ければよいかと思います。そのようにお尋ねいたしましたところ、異常に鳴いた犬と答えた方が43.6%、猫では46.7%もございました。

落ち着きが無かったと答えた犬では35.9%、猫では26.7%、怯えた犬が15.4%、猫では6.7%、その他　となっております。

ある調査員の報告なんですが、この異常に鳴いた犬が、ちょうど大震災の起こった朱明、この時間いつも散歩をなさってる飼い主の方が、いつものように犬を引いて散歩に出ようとすると、玄関の鍵を開けるのももどかしく、リードをどんどん引っ張って外へ連れ出してくれた。いつもはこんなことはしないのに今日はおかしいな、と思っていた直後に大震災が起こり、その方の家は潰れていまい、難を免れたとおっしゃっておられました。

こういう命を助けられた、犬のおかげだ、猫のおかげだという報告は、いろんな調査員のカードに残っております。はい次お願いいたします。

これは大変恵まれた避難所暮らしをしている飼い主とペットの様子ですが、後ろのシーツがかかっておりますこの中にも犬が犬舎の中に入っています。人を見ると大変怯えるようになったので垂れ幕でちゃんと囲ってありました。私達は覗かせていただいたんですが、落ち着かないでうろうろと歩き回っているような状態でした。次お願いいたします。

はいこれは避難所の中に入れなくて、温室のような場所がありましたので、そこを借りてペットと一緒に生活なさっている飼い主もおられました。次お願いいたします。

スライドはこれで終わりです。

このように私達の一番身近な、会場の皆さんは自分の居住地の避難所はどのへんにあって、その建物の中はどのようになっているか、ご存じでしょうか。地域の学校や福祉会館が避難所になり、またスポーツセンターや各種会館の中、そして近くの公園。そういう場所を一度はペットと訪れて、そして大震災のような災害が起こった場合、一体こういう場所でペットとどのように生活したらいいのかを想定して、一度お考えになる必要があるように私共は思いました。

そして今回調査して、我が家であろうと避難所であろうと、飼い主、又は人の言い付けはきちんと守れるように躾けておくことが大切ではなかろうか、躾けができておれば避難所ではこうあるべきだということは何も無いということもわかりました。地震のショックで多少は躾けが乱れたことでしょうが、飼い主が愛情をもって接することにより、回復していき、またペットの回復を毎日目の前で眺めることにより、飼い主もまた復興への情熱が沸いてくるということを我々は今回の調査を通して学ばせていただきました。

最後に世界中の人々の願いでもある、この神戸の一日も早い復興を願いまして、私の報告を終わらせていただきます。どうも有難うございました。

(座長)

吉田さん、どうも有難うございました。大きな混乱の中で、心情的にも非常に厳しかったと思いますが、被災地での被災動物の事情調査という大変貴重なデータをお作りいただいたということでございます。以上をもちまして御三方のご講演終わられたわけですが、フロアの皆様の中で、特に御質問をとご意向の方いらっしゃれば承らせていただきます。いかがでしょうか。時間の関係もありますので極力短くとは思っておりますが、どなたかいらっしゃいませんか。

はい、それでは無いようですので、プログラムをすすめさせていただきます。それでは続きまして話題提供でございます。ジャパンケンネルクラブ中央訓練委員会委員長で、宮城県で犬の学校を経営しておられます本田薫先生です。トピックスは「災害救助犬とは」というテーマで御講演いただきます。本来本田先生はビデオを御準備いただいて皆様に御披露する予定だったんですが、会場設備の関係でビデオが放映できませんので御講演をお願いしております。お願いいたします。

(本田さん)

只今御紹介いただきました本田でございます。私仙台からこの神戸にまいりましたわけでございます。2月にもちょっと参ったんですが、2月とはまた大分変わったなあというような感じで見ておりました。本日のこの人と動物の学会のなかで、「災害救助犬とは」ということをトピックスというかたちでお話ししてくださいと依頼がありまして、本日この会場へ来たわけでございます。

皆さんにとっても災害救助犬というのは御馴染みの名前になってきたのではないかと思います。特に神戸には1月17日にスイスから、そしてフランスからとみえられたわけですし、それに日本からも数は少のうございましたが、神奈川、それから富山、京都、大阪とそれから地元という形で大体日本からも十数頭の犬がこの被災地に入ってきたわけでございます。なかなか日本は地震国でございます。なぜ今までこの災害救助犬というのがあんまり評伝されてなかったか、またあんまり名前を聞かなかったか。1990年に私どもジャパンケンネルクラブの前理事長でございましたカーリアム理事長がヨーロッパに行きました際に、スウェーデンに参りまして災害救助犬の訓練所というか、そういうもの見させていただいた。地震の無いスウェーデンですらこのぐらいの設備をもってやってるのに地震国日本がなぜこんな遅れてんじゃないかということは地震だけではありません。日本の場合ですね、水害とか土砂崩れなんかが大変多い。そういう中で、土砂崩れで生き埋めになった方、また家が流されたりというような形でいっぱい災害があるじゃないかと。

そういった中でなぜ日本だけがこの災害救助犬に着手しなかったのかということで1990年にJKC、ジャパンケンネルクラブがこれを考えてみようという形になりまして、91年に正式にスウェーデンの方に派遣がなされました。派遣されて見てきた結果、シュミレーションセンターのようなものについては、日本ではこんな大規模なものはとても出来ないなと思いました。こんなことやるには日本では国全体が頑張っていただかないと出来ないんじゃないかなという感じで帰ってきたんですが、その後全国に4箇所から5箇所ぐらいの訓練所を特定いたしまして、育成という形で始まったのが日本の最初であると思っていただいて結構だろうと思うんです。

私、今日皆様のもとに、レジュメの中に入っております小冊子の方に色々なこと書いてございます。私は25分という時間以内にお話しをしなければなりませんので、こと細かくみなお話しをするということに出来ません。ですからこの中から特に重要ではないか、日本の救助犬はこれからどうあっていけばいいのかというようなことをちょっとお話しをしながら参りたいと思います。さらに5分間程質問があればお受けするというような形を取らせていただきたいと思います。

海外における反応というか対応というのはスウェーデンが災害救助犬としての先進国であります。スウェーデンは人口が800万ぐらいの人口ですが、土地は大体日本の13倍から14倍くらいの土地をもっております。そのため、あの広大な土地で国を守るとなりますとやっぱり犬の力なども借りる、という形で救助犬が出来上がってきたようです。

本来救助犬って言うのはイギリスが発祥です。イギリスは第二次世界対戦の時に爆撃でビルが崩壊する。要するに戦争状態においての救出というのがこの救助犬の生まれたわけと言いますか、そういう形になっています。それがだんだんとビルの崩壊とか、これは地震によってもビルの崩壊があるということで、そういう形から災害救助犬という名前にどんどん変わってきました。

ヨーロッパは今ドイツにもあります。それからフランスにもあります。スウェーデン、スイス、それからアメリカの方にもあります。

アメリカはカリフォルニアの方が地震が多いと、サンフランシスコなんかは地震が大変多いということで、まあ西地区のほうですね。要するに西海岸のほうにこの協会があります。アメリカは約十年くらい前からこれが正式に動きだしてる。

スウェーデンは二百頭ぐらいの救助犬をもっております。スイスとなりますと五、六百頭はいるんじゃないかなという話でございます。フランス、イギリス、ドイツ。ドイツはシェパード犬の原産国でもあります。これだけ頭の良い犬をもっている国が救助犬を作らないのはおかしいということで救助犬づくりを初めまして、今六百頭という犬が登録をされておるという現状だそうでございます。

まあ日本の方はまだまだで、それこそ日本のことを話しますと十七、八頭がいいとこだろうと思います。ただ日本のほうの現状を見ますと本年6月にジャパンケンネルクラブの方に災害救助犬の委員会ができました。それで、訓練所隊員にアンケートを取りましたところ、いますぐにでも作れますよという訓練所さんが35箇所ほどあります。まあ全国にアンケートを出したわけでございますが、その中ですぐに可能な限り出られますという犬は46頭ぐらいという答えが返ってきております。只今訓練中という犬も大変多いわけでございます。

まあ最終的には、来年度ぐらいには180頭になるのではないかというのを基本にJKCがやっています。ただ日本にはジャパンケンネルクラブだけではございません。宮山の方にも、それから各地方自治体そのものが独自に考えてるところもあります。

特に私ども宮城県、神戸からは遠いところでございますが、宮城県では昔から、昭和48年から始まっていますが、これは災害救助犬ではございません。山岳遭難救助犬でした。富山県も最初は山岳遭難救助犬から入っております。

で、山岳遭難救助犬を48年からずうっとやってきまして本日この小冊子に書いてありますが、その様子を本来ならばビデオでお見せしようと思うておったわけですが、どうもビデオのセットが整わないということで急遽口頭でお話しすることになったわけです。

私ども宮城県の場合は、宮城県のことばかりですが、山岳遭難救助犬連盟の理事もやっております。それは警察犬の変更という形でやっております。だけど今回の災害救助犬は全く異質なものになるだろうと。

それは何故かと言うと山岳遭難救助犬の場合は山の中でございますし、あんまり人もおりません。パニックになる場所っていうのもあまりありません。ところがこの災害救助犬っていうのは完全なるパニックの状態の中に入っていかなきゃならない。なぜかというと、騒音があります。人が多い。悲鳴がある。火事がある。煙がある。臭いがある。いろんな悪条件のなかに犬を持ってかなきゃならない。これにかなりの耐久力のある犬じゃないと使えない、という現状があるわけです。

ですから災害救助犬の育成っていうことになりますと最低でも一年から一年半ぐらいはかかるんじゃないかと思います。ちょっと海外のことに触れましたが、海外の場合はシュミレーションセンター、要するに模擬訓練所がかなり大規模な形で作られております。町ひとつがもうなんか潰れたような形の、団地ひとつがなくなったような形のシュミレーションセンターをつくっておる国もございます。日本にはとてもじゃないけどそういうのは無いわけでござ

いまして、現実に即応した訓練場所というのはございません。

日本の場合、スウェーデンに本年も派遣されました結果、小さな一戸の家で、土管をちょっと埋めて、そのうえに瓦礫を重ねるという訓練方法もあるんだというのを見て参りまして、それならばまだ日本でも出来るんではないかなあと思いました。日本ならばせいぜい四、五坪のところに瓦礫を置いて、そこに人を埋めといて、上から犬がいって探すようにすればよいと思います。

ただこの探す場合はちょっと皆さんで誤解なさると困るのでお話ししますが、警察犬の場合ですと、足跡を追っていくわけです。犯罪捜査でもそうなんですが。ところがこういう大震災では、歩いてた方が陥没するわけがありません。お住まいのうちの中でそのまま沈んじゃうとわけですから、なかなか足を辿っていくっていうことは出来ない。そうする場合にどうしても教えていく中で、足を辿っていくやり方を教えますと、行方不明者を探す犯罪捜査と同じになってしまう。そうではなくて土管を埋めて、地下を歩かせて、その瓦礫の下にいるような設備を採らないと、なかなか教えにくいと、そういった現状なんです。

ですからそういったシュミレーションセンターというものを作ることが、まず大変だろうと思います。私どもも今、5坪ぐらいの所に土管を一本だけ埋めまして、横に一本、縦に一本埋めて、縦の方の上に瓦礫を重ねて、下から人間の臭いがしたらそれに反応するというやり方でやっています。ただこれは騒音もありません。それから人もおりません。ただ犬とその瓦礫があって下に人間がいるだけですからあんまり気にしないで訓練に励めるのですが、これが実際このあいだの神戸のようになりますと、大変人が右往左往します。「ウウー」救急車の音がします。といろんな状況のなかで犬をつくっていかなきゃいけない。これはこれからの課題として日本の救助犬が世の中に、それも海外の方に地震があったとき出て行けるようになるまでには多少時間はかかるだろうと思いますけれども現状として今日本ではこういう訓練施設というものの造り方、それが出来上がれば、犬の方ももっともっと数多く出てくるんではないかなというふうな感じをもっておるわけでございます。

それで、この中に書いてありますように訓練の仕方でもそうですが今日ここにおいでの方で犬をお飼いになってる方、たくさんいらっしゃると思います。その中で、ヤッ、わたしんとこの犬も救助犬にならないかしら、というご質問が出るかもわかりませんが、その前に私の方からお話しいたしますと、救助犬になるには、まず適性というものがございます。

これはこの小冊子のなかにも書いてございますが、適性を見ていただきますにはどういうことをやれば一番いいのかと言いますと、これはどうしても大変な極限状態にある現場に向かうわけですから、その中でへこたれずにやらなきゃならないものなんです。

その中でどうしても必要なものということになってきますと、忍耐強くと書いてございますが、忍耐強くやる気があって、そして好奇心に満ちて、常に前向きでいわゆる生活力旺盛な犬、要するに失敗にもへこたれない。何故かっていうと、真暗闇の穴の中へ押し込んでやったり、潰れた、狭い穴のほうへ入れてやったり、それから細い橋みたいなとこ渡ったり、不安定なぶらつくところを歩いたり。それからコンクリートですと、それが瓦礫になってますから、足切れるようなところを歩いたり。それから火が脇で燃えてるようなところを歩いたりするようなときに、今行ったような本当に生活力旺盛な犬じゃないと、とてもじゃないけどびびって尻尾まいて帰っちゃう。そういう犬ではだめなんです。

それから今お持ちの方々でも、自分の犬、一回テストしてみてください。先ず、一番いいのは細い板を渡します。そこを歩いてみます。そこの板が揺れます。バウンドします。それでも犬はへこたれないで尻尾を振って歩くような犬だったら、少しは役に立つんじゃないかと思います。

それから後は穴ん中へ入れてみてください。暗がりへおいてみてください。もう暗いとこ行った途端にびびって戻ってくるような犬では無理です。暗いとこでもどんどん入っていく犬、それくらいの意欲ある犬じゃないととてもじゃないけど、救助犬には出来ない。

やっぱり皆さんの飼ってる犬なら、どの犬がいいとか悪いとかはありません。雑種でもけっこうです。あんまり雑種という言葉は言いたくない。これはミックスブリードとも言いますけども。私達は宮城県で生まれた犬は宮城犬って名前つけてるぐらいですから。神戸で生まれれば神戸犬でもいいだろうと思うんですが。そういうふうに雑種であろうがそれからシェパードであろうがラブラドールであろうがなんでも構いません。

ただ、ヨーロッパはどちらかというとあまり毛の長い犬は使ってはおりません。あれは火災っていう

か燃えてるところに行きますと毛が燃えちゃうっていうのもありますので、ラブラドールとかそれからフラットコーデットレトリーバー、シェパード、こういうのが殆どです。日本の場合はラブラドール、シェパードが主流になってます。

ただ今回神戸の方にフランスから参りましたが、フランスから参った方々の中に、小型犬、小さいのが何頭か交って、まあスイスからも小さな犬が来てました。あれは自分で持ち上げて、二階から潰れたようなところで、自分が入れないところに小犬を放り込んでやる。大きなセントバーナードだと放り込めませんので、小さな犬だと放り込んで、そこに誰かがいるか教えてくれるということです。小型犬の活用というのも、もうヨーロッパの方では始まっている。日本ではまだちょっと小型犬の活用は先かと思いますが、小型犬でもかなり能力のある犬でしたら出来るんではないかという感じで、犬種は問わず、要するに生活力の旺盛な犬を、つくることがひ重要ではないかと思います。

ただこのつくるということをやっていきましても、結果的に、こんなこと言っていいかどうかわかりませんが、いつ起きるかわからない地震でございます。今はこの生々しさが残っております。ですから救助犬救助犬という言葉もそう遠くなく聞こえるかと思いますが、何十年後、何百年後にまたあるかわからないのに救助犬が果たして残っていくことができるのか。

ヨーロッパはこれを永久に残すために訓練の大会をやっております。その救助犬の大会があります。日本でもこれからは、救助犬ができ上がってきたならば、こういうふうにずうっと努力をして継続的にやっていくために、やはりシュミレーションのセンターと、それから訓練の練磨ということで大会などを催しながら、いざ有事というときに即応できるようなやり方をしていかないといけないだろうと思います。

それからまだ日本の場合は一番の問題がございます。行政とのタイアップといいますか、協力といいますか。犬は生きてここにいますよと教えてくれます。ただそれを誰が助けるか。我々が手で持ち上げて持ち上がるようなものであれば構わないのですが、そのコンクリートの下に入ってる、それを助けてくれる時に、どなたかやっぱりいてくれないと困る。そういった場合に行政との連携がしっかりできていないと上手くない。

今回のこの大震災を教訓に、消防庁などがかなり救助犬に対して協力的になってきて、さる九月一日に東京都で防災の日に訓練が行われました。それで消防庁の方からのお手伝いをいただいて救助犬が行方不明者を発見いたしました。発見した途端に救助隊が来て瓦礫を起こしてくれてそこから救出する。そういった形になってる。それがまだまだ救助犬の場合そういった組織づくりがでいてないのも現状です。

それでさらにその災害救助犬の問題というか、問題のなかで、どのように出動体制、また受入体制。今回も確かにこの阪神の大地震に遠くからも行きたい、出たい、出動したいというのがジャパンケンネルクラブの方にも届いてたわけです。ところが大阪まではすぐ来れるけれども、そこから先はどなたにいえばいいのか。またどなたを通っていけばその救助犬が使えるのか、それさえもわからない現状であった。

それからどこの県がどこで地震があるかわからないわけですから、その場合でもこの教訓を活かして必ずやや出動というためにはスムーズな行動が出来るようなこともこれからの課題として残っているわけでございます。

災害救助犬というのはとにかく地震国日本で遅ればせながら始まったひとつの訓練でございます。今までは警察犬、盲導犬、成田には麻薬犬と言ったようにいろんな多種に渡って使われてきましたが、本当にこの災害救助犬というのは「今になって」と言うくらい遅まきではございますが、百八十頭くらいが全国に散らばってれば、いざというときすぐにでも役に立つんではないか。

ただこれはあくまでもプロの訓練士だけでは出来ません。皆さんのひとりひとりのボランタリーが必要になってきます。ですからアマチュアの方々に訓練のご指導、そしてシュミレーションセンターをつくっての練習の機会を与えながら、いざというとき誰もが参画できるような救助犬の、スウェーデンをたとえて言いますと民間防衛という事で全員が、軍隊も何も無く全員その国民ひとりひとりがその防衛に当たるという組織づくりをしております。ですから犬のこの災害救助犬の場合もひとりひとりがみんなでひとつのグループをつくり、そして何かあればすぐに派遣できるようなシステムづくりがこれからの急務だろうと思います。

それで、出動体勢も大体一人で出掛けるということ出来ません。大体スウェーデンですと一グループ三人でリーダーを必ずつけると。そうやって事故も

二重事故等を起こさないようなシステムづくりも必要になってくるということであります。

私どもの方でもまだまだこういった災害救助犬というのは出来たばかりでございます。これからどのように変わっていくかは、我々がひとつのカリキュラムをつくり、その中に訓練の規定、それから訓練の試験みたいなのもやりながら、より良い救助犬の確立ということで考えていくわけでございます。

なかなか救助犬と言うものが警察犬みたいに毎日事件があってすぐ出るというものであれば、皆さんはそれぞれに協力するということであるんですが、地震の場合はなかなかただでさえいつ起きるかわからないのに、千年間も二十年間も待たなければいけない。大体犬の寿命なんて最高生きて十五年でしょうが、その中で現役で使えると言うと十歳くらいです。とくに救助犬の場合はああいった苛酷な条件の中に入ると、やっぱり十歳が限度ぐらいです。十年で一サイクルですから百年後に起きたとしたら十頭は最低でも飼わなければいけないと言う。

まあ機械じゃありません。生き物ですから。私らは機械として扱う気は全くありません。やっぱり今日の「人と動物の関係学会」ではありませんが、我々は犬を機械と思ってません。我々の良きパートナーだと思ってます。

ですから我々と一緒に人を助けること、それも仕事と言えば仕事ですが、犬にも助けたときのあの喜んだ顔はあります。我々よく山岳遭難で行方不明者がおります。ずばりその遭難者を見つけたとき、あの時はやっぱり私も喜びますけれども、犬も喜びます。

あの喜び、災害の時に助けること喜び、これを我々にとっては喜びという言い方は大変失礼なんですが、我々が探そうとするのを探したときのあの意気込みというのをやっぱり犬と一緒に味わいたいな、そう思っております。

ですから今日この中で色々と本来は話さなければいけない部分があったんですが、海外における、それから日本における、それから訓練の方法、訓練するための犬の選定方法その他がございます。あまり長く専門的にお話しを申し上げても、却ってわからなくなると困ると思いますので、簡単に今日お時間をいただいた、ちょうど私の時間はとっくに過ぎてあるんですが、遅れてそのまま入って参りましたんで、このぐらいで私のお話しを終わりたいと思います。あの何か犬について、救助犬だけでなくともけっこうですけども、まあ救助犬について私の犬はどうでしょうかというようなご質問があればお聞きしたいと思います。

（座長）

はい本田先生有難うございました。

本田先生ちょっとそのままご待機いただきまして、よく皆様存じのとおり震災当時は海外の災害救助犬がみえまして、マスコミ等で物議を醸し出したところでございますが、今のお話しにありましたように、日本でもいよいよ本格的にスタートラインについたというところのようでございます。

非常に珍しいテーマかと思いますが、災害救助犬ならびに犬に関してはという今先生のお話しもございましたので、フロアの方でどなたかご質問おありの方いらっしゃいますでしょうか？

はい、どうぞどうぞ。恐縮ですがお越しいただいたところとお名前をおっしゃってからご質問してください。

（質問者）

東京の亜細亜大学の法学部の教員でございまして、東京、京都で関西大地震の法律問題のシンポジウムがございます。それ済ましてこちらへやってきたということでございます。この、人と動物の関係学会の会員にも入れていただいております。

で、私の教えていただきたいのは、日本で山岳救助の場合、これは人間も赤字を覚悟で、また自分の命をも担保にしてで、やっておられるし、また災害救助に所災害で救助を受けるご家庭はで、一財産投げ出しても、報いなきゃならないというヒューマニズムと言いますかルールが出来上がってる。

しかし実際今、こういう地震なんかでの災害救助といいますと、犬はまあ小犬でも十五万以上の犬ばっかし、そして雑犬軽視の風潮で社会的ステータスとして犬を飼うという中で、私の見ます限りでは、犬の飼い主はエゴイストが多い。なかなかこの人間を、ボランティアでもっていくには、おっしゃるとおりシュミレーションセンターと人間の合意をどうしてはかっていくか、山岳救助犬のお人方、犬という生活の心情が、大都会の人間にどうしたらもっていけるんだろうかというところで、まさに人と動物との関係、で日本の犬はちょっと高すぎやしないか。

それから近親交配が多くて、役に立たない犬が多すぎるんじゃないか、これはやはりブレンダー、動物学者、犬屋さんの段階から基本を取り直して、そしてボランティアに対する人間の再教育が行われな

いと無理かと思いますが、この辺のとこちょっと突っ込んでご感想をお聞かせいただければ非常に有り難いんでございますが。

(演者)

はいわかりました。今の耳の痛いようなところも大変ございました。

確かにひとつひとつを掘り下げていくと、山岳遭難でも一回出動すると莫大な費用がかかる。ただこれについては県とか地方自治体によっては多少山岳隊協会とかそういうところでそれなりの助成をやっているところもあります。特に私ら宮城県の方ですと、山岳救助連盟の方で、二重事故、滑落など捜索員が事故を起こすこともあります。そのため、その出動した隊員には保険がかかるような方法にして、多少その費用の軽減を図っております。

我々も山岳遭難の場合は、個人依頼という形になることもありますので、そういうときはあまりにも莫大な費用ということになり大変なんですので、そこら辺はかなり、それこそ無料とは言いませんけれども、ボランタリーの部分があるんじゃないかなあと。これはひとつ言えるんじゃないかなあと思います。

それと犬の飼い主の問題になってきますと、なかなか、可愛がってしまって、今先生がおっしゃるようにエゴイストという言葉、私大変耳が痛い。

だけどやっぱり自分の飼ってる犬が全てだと思っている方が本当に大変多いことは事実です。でもやっぱりその中で、今回、今までずっといろんな絵(スライド、写真)を見せていただいてもですね、もう私は犬に上も下も無いと。私がこれだけは強く言えるのは、血統書があるからだとか血統書が無いからだとかそんなのは関係ないです。私から言うと人間なんてみんな血統書はありません。はっきり言って五代前って皆さん何に生まれたか。私なんて今は警察犬の訓練士なんて名前やってますけど、もとは大泥棒の子供かなあなんて思うときありますから。それから見れば、あんまり私、血統がどうとかいうんじゃ無くて、ただ、今先生のおっしゃったもうひとつの方では、どうしてもあの、インブリードされてんじゃないかと。

ただ、今は昔ほど、インブリードじゃなくて海外からの輸入も常態化されたというか、地球が狭くなったというか、やっぱり今ジャパンケンネルクラブでも145犬種ぐらい多く来ております。それに用途にあわせた犬たちがそろそろ来てるという現状もありますので、これからの私らが一番が訴えたいことは、確かにオーナーの方々の認識、犬を使って社会に貢献をするというような、警察犬の場合警察犬を使って社会に貢献をするというひとつの大義名分がありましたが、災害救助犬の場合も、我々の犬で人命を救うんだという意識が、これから生まれてくるようにこれからも努力していきたい。このぐらいで勘弁していただきたいと思いますけど、よろしいでしょうか。

(座長)

はいどうも有難うございました。他にどなたかいらっしゃいますか？

はい、それでは無いようでしたらこれをもちまして本日のシンポジウム第一部、「震災と動物の行動 ―動物は何を見たか―」を終わらさしていただきたいと思います。フロアの皆様に厚く御礼申し上げます。有難うございました。

(太田)

二、三事務連絡を致します。

遅れておりますけども、一応その一時半からシンポジウム第二部を初めたいと思います。したがって昼食の休憩時間が少し短くなるという、誠に申し訳ありませんがそうさせていただきます。

いくつかの連絡事項のうち、弁当が一応その千円で販売されております。必要な方は購入して食べてください。それと劇場の中では食べられませんので、ホールか、多目的室というものを用意しております。従いまして、あるいは今日天気がいいですから外でも結構だと思いますけれども、一応劇場の中では食べてはいけない、飲んではいけないということであります。それからその他牛乳が無料で配布されております。是非ともお飲みください。

それからお帰りの折りには、まだ午後がありますから是非ともそのまま居ていただきたいんですが、お帰りの折りには、お手元の封筒に一枚A４の紙が同封されておりますので、そこに氏名住所等をお書き願って、受付に渡してお帰りいただきたい。そのおりにペットフード等の無料の配布がありますので、是非ともお持ち帰りください。

それから夕方六時半より懇親会を予定しております。会費が二千円ですので、これにもぜひ参加していただけると助かります。それでは一応昼の休みといたします。

（司会者）

祝電が二通参っておりますので、ご紹介させていただきます。

大会のご成功をお祈り申し上げますと共に、実り多き会でありますよう期待致します。

味の素ゼネラルフーズ株式会社

ペットフード事業部　事業部長

阪神淡路大震災シンポジウムのご開催をお喜び申し上げます。シンポジウムのご成功と、災害時における人と動物の関係についておおいに意見交換が図られますことを期待申し上げます。

神戸市長　笹山幸俊

それでは定刻になりましたので、シンポジウム第２部　「震災の中の人と動物の関係　―人は動物に、動物は人に何をしたか―」　座長・旗谷先生、お願いします。

（座長・旗谷先生）

それでは只今より第２部を始めさせていただきます。私、神戸市獣医師会の旗谷と申します。どうぞよろしくお願いいたします。第２部では「救援活動の中の人と動物　―人は動物に、動物は人に何をしたか―」をテーマに、この度の阪神淡路大震災では人とともに実に多くの動物も被災したわけですが、この被災した動物を誰がどのように救助したのか、また極限の状態で人と動物の関係はどんな状態にあったのか等を、５つのセクションに分けてご報告していただきます。

まず始めに、第一セクションとして、三田動物救護センター所長の宮崎一美先生より兵庫県南部地震動物救援本部の設立の経緯及び、神戸、三田両動物救護センターにおける被災動物の収容状況についてご報告いただきます。よろしくお願いいたします。

（宮崎先生）

さる１月17日午前５時46分兵庫県南部地域を襲った地震は未曾有の大災害を引き起こしました。この地震は多くの人命を奪い、人々の生活を変え、そして人と共に暮らしていた動物達にも大きな被害を与えました。動物達は地震における直接的な被害に止まらず、被災した飼い主の動向に左右されより大きな被害を蒙ったと言えます。被害を受けた動物の実数は不明ながら、一万を越える動物が被害にあった

▲写真１

と推定されております。このような状況にあって兵庫県ならびに神戸市獣医師会は会員各位の大きな被害にもかかわらずあくまでも動物福祉の立場から兵庫県及び神戸市ならびに日本動物福祉協会と連係、協力し、関係省庁はもとより日本獣医師会及び各地方獣医師会等の支援を受けて震災４日後の１月21日に兵庫県南部地震動物救援本部を設置し、さまざまな動物救護の活動を行って参りました。スライドをお願いします。

兵庫県南部地震動物救援本部の設置でございますが、震災直後の１月21日、兵庫県獣医師会、神戸市獣医師会および日本動物福祉協会阪神支部の３団体が被災動物を救済するために兵庫県および神戸市の協力を受け兵庫県獣医師会長を本部長として兵庫県南部地震動物救援本部を設置し、ボランティアの協力を得て以下のような救済事業を行いつつ、次なる災害の指針となることを願い、活動を続けておるところでございます。次、スライドをお願いします。

活動の初期は物資の不足する被災地、避難所への餌の供給、放浪動物の保護収容および保護動物の情報提供、負傷動物の治療行為などを行ってまいりました。現時点の主要な事業としまして、飼育が困難な動物の一時預かり、所有権放棄動物の里親探し、動物に関する相談などを行っております。スライドをお願いします。

一時保管ならびに負傷動物および放浪動物の保管等を行うため、２つの救護センターが設置されました。神戸動物救護センター（写真１）が１月26日に、三田動物救護センターは２月13日に設置され、動物救護活動の主体となってまいりました。いま出ておりますのが神戸動物救護センターです。左の方が当初の施設でございます。右側の方が現在の施設でご

ざいまして、犬等につきましても運動場のつきましたパドック式の犬舎になっておるところでございます。次スライドお願いします。

これが三田動物救護センターの略図でございまして、左の方が当初の施設でございます。現在の施設が右の方でございまして、同じく初めはビニールハウスから始まりました。三田の場合はどちらかと言いますと初めから救護動物の方はプレハブでボランティアの方がビニールハウス、ということでございます。現在につきましては、施設も改良され犬等につきましては運動場付きのパドック式の犬舎になってございます。救護状況を申し上げます。スライドをお願いします。

9月15日現在で犬の保護頭数は967頭でございます。神戸動物救護センターでは727頭、三田動物救護センターでは240頭でございます。猫は484頭でございまして、神戸動物救護センターでは275頭、三田動物救護センターでは209頭となっておりまして総計すると1,451頭になってございます。先に総論的なことを話させていただきまして後、スライドを説明させていただこうと思います。

健康な動物の多くは新たな飼い主のもとで生活しており、その実態調査を計画しておるところでございます。しかしながらまだ各々の救護センターには犬99頭、神戸動物救護センターには48頭、三田動物救護センターには51頭、猫につきましては82頭、神戸に33頭、三田に49頭が収容されているところでございます。ちなみに10月21日の現在の収容頭数でございますが、犬71頭でございます。それから猫では39頭が、収容、飼育をされておるところでございます。今後これらの残されました被災動物の里親探しを広範囲に展開すると共に、我々のこうした活動から大災害における動物救護の在り方を早急に考えていかなければならないと考えております。

これは神戸動物救護センターに収容されました犬の行方でございますが、スライドのとおりでございまして、横の方が収容頭数、その隣が飼い主又は里親に引き取られた頭数でございます。そしてその上が収容されておる頭数でございます。10月21日現在で里子が29頭、それから一時預かりでは12頭、41頭の犬が収容されております。次スライドお願いします。

神戸市の猫の方でございますが、この図表のとおりでございまして、里子が16頭、それから一時預かりが5頭、合計21頭が収容されております。次スライドお願いします。

これは三田救護センターに収容されました犬の状況でございます。これも10月21日現在で里子が14頭、一時預かりが16頭、合計30頭収容されておるところでございます。次スライドお願いします。

三田救護センターに収容されています猫（写真2）の状況でございます。10月21日現在里子が6頭、一時預かりが12頭でございまして18頭の収容飼育をしております。次にスライドをお願いします。

これは神戸動物救護センターの一般ボランティアの参加数でございまして、9月15日現在でございますが966名の方、近畿はもちろん、その近辺、北海道から九州まで全国からボランティアの方にご協力していただいております。次スライドお願いします。

これは三田動物救護センターの一般ボランティアの参加数でございます。734名でございまして、ちょっと統計数値が神戸と違いまして7月24日現在になっておりますが、同じように全国津々浦々からボランティアに来ていただいております。スライド次お願いします。

このスライドは神戸および三田動物救護センターにおけるボランティア参加数でございますが、460名に及んでおります。これは7月24日現在の数字でございまして、これまた北海道から九州、特に近畿、

▲写真2

大阪でございますとか、それから一般ボランティアも含めて関東地方から多くの方に来ていただいているように見受けます。スライド次お願いします。

これは神戸動物救護センターの里親引き取りの犬猫全体の累計したものでございますが、このスライドのとおり近畿近辺はもちろんでございますが北海道から九州まで及んでおります。神戸の方では、初めから5月の15日までに700匹の動物が里親として引き取られております。次スライドお願いします。

同じく三田動物救護センターのものでございますが、全体で114匹がこのスライドのように里親として引き取られております。スライドを次をお願いします。

里親募集ワンワンフェスティバルと銘打ちまして開催、里子の里親募集を行っておりますが、9月15日から10月21日までですが、このように行っております。まだあと一回、11月12日に三田市の農業祭りで里親募集を行う予定でございます。どうかみなさん一つ、里子につきましては、資料集にこれらの写真を載せておりますので、購入をいただきまして、動物福祉のために、里親になって頂くなり、あるいは里親をご紹介をしていただきたい、こういうように考えておりますので、よろしくお願いをしたいと思います。次スライドをお願いします。

これは里親募集のいちばん初めの15日の模様でございます。（写真３、川西保健所）里親募集の風景でございます。次スライドお願いします。

9月23日龍野の里親募集の状況でございます。次スライドお願いします。

これは9月23日、姫路市での里親募集の風景でございます。（写真４、姫路市動物管理事務所）スライド次お願いします。

▲写真３

▲写真４

これが9月30日、養父郡八鹿町での里親募集の状況でございます。スライド、どうも有り難うございました。

このように色々里親募集、犬・猫の譲渡会を開催しているわけでございますが、非常に里親の成立数が少のうございます。里親希望動物が老齢、あるいは病気等、色々のハンデを持ちまして非常に譲渡しにくいというような状況のためでございます。しかし、先程も言いましたように、動物福祉の観点から一つ、ぜひ里親の紹介、あるいは里親になっていただきたいということを重ねてお願いする次第であります。

まとめといたしまして、誰も初めて経験する未曾有の大災害の中、何をしてよいのか手探りの状態で種々の対応を行って参りましたが、動物救護活動にとっても例外ではありませんでした。幸いにも兵庫県獣医師会、神戸市獣医師会、並びに日本動物福祉協会阪神支部の積極的な支援により、この3つの会を軸にして、多くのボランティアの方々を初めとする全国各地からの極めて温かい人的物的、そして経済的ご支援により、動物救護業務が比較的円滑に推進されていると考えおります。しかしながら、かかる事態に備え、拠点となる基地の確保、および提携できるボランティアの組織作り等を、平素から下地作りが重要であり、また収容した動物たちの里親探しの方法、手法、広報、輸送等々に、大災害時の動物救護対策に関するマニュアル化等を今後の課題として考えております。特に里親探しにつきましては、地元のみでは先程説明しましたように限界がございますので今後全国規模で里親探し、譲渡会を開催する必要があります。今後皆様方のご支援をお願い申

し上げる次第でございます。

最後になりましたが、この震災に際して全国の皆様から多大な義援金を頂きましたことと、震災復旧時に全国の皆さんが自ら動物救護センターを始め、避難所業務にボランティアとしてご支援いただきましたことを合わせて心よりお礼申し上げまして、本部報告といたします。

（座長）

宮崎先生有り難うございました。ご質問等多々あろうかと思いますが、すべての報告が終わりました後で、パネラーの先生方に壇上に上がっていただきまして、一括してご質問はお受けいたしますので、ご了承ください。それでは続きまして、第2セクションといたしまして神戸動物救護センター所長の市田成勝先生より、「動物救護センターの動物と人」と題しまして、1月・2月の厳寒期、ほんとうに何もない中からのスタートで、多くのボランティアの人たちと、救護した動物たちが、今日までどのような毎日を送ったのか、色々なエピソードを交えながらご報告いただきます。市田先生お願いします。

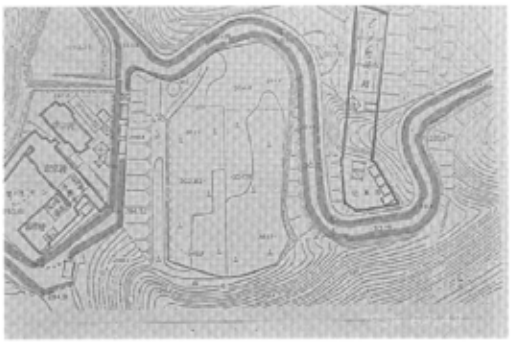
（市田先生）

震災後、神戸と三田に動物救護センターを設立して、動物の救援活動を行って参りました。われわれが経験したことの概略を説明いたします。なお、ほとんどのものが神戸のものを使用しております。スライドをお願い致します。

これは、われわれが当初つくりました、神戸市立動物管理センターの中の敷地で、神戸市から施設をお借りいたしまして、作ったわけでございます。これが動物管理センターの施設と、その中でここが受け付け、それからこれが多目的ルームと言いましょうか、治療室兼食堂とか、色々あります。また後で説明いたします。それからここにビニールハウス、いわゆるシェルターがございます。これが動物を収容していくメインのものだと言うことでございます。ビニールハウスを使用しております。それからここにコンテナハウスが並んでおります。これはアネックス、猫の里親舎、ここが犬の里親舎、ボランティアさんの宿泊コンテナ、それからここが会議室ですけどそこに女子の専用の寝室ということでつくっておりました。そしてこういうことが起こりましてから、5月の14日になりますと、ここからずーっと上に行きました、ここに新しい収容施設を設置しております。ここが墓地でございます。これはプレハブ舎3つを並べております。下は犬舎、2階が猫舎になっておって、4つの部屋に分かれております。このコンテナは、ボランティアさんの泊まるところ、バスルーム、キッチン、そういったものを設置して使用しているということです。（写真5）

それで、何でこういうのを出したかというと、一般の方にですね、初めからよく言われたことがあるんですけど、それは、「あなたたちは動物をどうしてるんですか、いらなくなったら殺してしまうんじゃないんですか」というふうなことをよく言われました。その度にですね、「いえ、私は兵庫県南部地震動物救援本部の人間で、行政とは違います」というふうなやり取りは何回となくあったわけです。結局ここに入ってきますと、ここが管理センター、右に行きますとここが事務所で我々の救護センターということで、まあいわゆるくっついているわけです。だからそういうふうな勘違いが多々あったんではないかと思っております。そして、何でここがその適当な場所かと言いますと、われわれの考え方といたしましては、動物管理センター、あるいは保健所、動物病院このようなところには動物関係の問い合わせっていうのがきっと来るでしょう。しかし、個々の動物病院や保健所で対応していても、バラバラで統制がとりにくい。管理センターであれば情報が一本化でき、施設あるいは敷地もある。普段からここで動物の相談や子犬の交換会などもやっているので知名度が高くてわかりやすいんではないかというふうに考えたわけです。ところが一般的には管理センター、それから救護センターという区別というものがなかなかつきにくかったんではなかったかと思われます。スライド次お願いします。

これは動物たちを飼育しているところでございますが、当初、先程言いましたシェルターですね、それは我々が建てるのに2、3日かかったんですが、



▲写真5

▲写真６

それがやっと出来上がった。（写真６）そしてこのようにケージなどを搬入しているところです。こちらはどんどん、どんどん動物が入りまして、このように、バリケンゲージというんですけど、こういうものに入れていくと。そして寒いものですからこのように毛布を掛けて、寝るときは周りも全部閉めて、それで少しでも寒くないようにということで行っております。こちらの方は一応猫なんですが、同じような形でこういうふうにつくっております。（写真７）スライド次お願いします。

これは先程のビニールハウスですけれど、こういうふうにして初めは搬入された。それで、こういうふうなここの緑色のとこですが、こういうところもすべてわれわれがゴルフのネットなんかを調達してつくりました。しかもこういう扉がありますけれども、こういったものも自動ドア的な形のゴムとかそういう物で、開きっぱなしにならないように、動物たちが逃げないようにとの工夫も多々したというわけでございます。次お願いいたします。

一般的にはこのように、これが今のビニールハウスでございますけれども、こういうふうに朝晩ボランティアさんが一生懸命こういうところを散歩に行っていたということです。これは、散歩に行っていただいて、便の状態とか何かおかしいことが有るか無いかということを一々チェックする、という光景でございます。（写真８）

ところが、このようにボランティアさんが一生懸命やってくれているということなんですけれど、こういう中で勝手な飼い主さんがいるもんだなあと思ったことがあります。それはある飼い主さんが自分の犬を散歩させたいと言ってこられたわけなのですが、それだったらいいだろうということで許可いたしました。ところがいつまで経っても帰ってこない。あれ、おかしい、ということで探しにまいりましたら、その飼い主さんは自分の犬ですが勝手に連れて帰っちゃった。家が倒壊して無いわけですけれど、避難所等を転々とされていたようです。

ところが、かなりのご高齢だったので、病気になって入院された。再びこちらの方にそういった事情だからということで要請がありまして、われわれが出向いていってボランティアが再び保護し、その方は無事に退院されて引き取られましたが、もしものときにはどうしようかということがありました。スライド次お願いします。

これは先程の動物管理センターの上、お墓だといったところで、こちら側がお墓になるわけです。これは駐車場なんですが、こういうふうにテントを張りまして。ドッグフードとかペットシーツとかいろんな救援物資をたくさんいただきまして、どこに置こうかということでこのようなところに置いているわけですね。（写真９）それがここここに見えますね、一部。これが今現在使用しているところの駐車場にテントを張っている、この草茫々のここに今はプレハブ舎が建っているということです。これは我

▲写真７

▲写真８

▲写真9

々神戸市獣医師会の先生方はテント張りに関しましては今はすごく上手になった。なぜかと言いましたら、これを畳んで建てて、風に吹っ飛ばされてまた建ててということを繰り返した。それで、こことここに置いて、今は現在この上に置いておるんですけれども、そういうふうな形をもう何回もやってその都度この中の物資をどんどん運んでというのを何回もやりました。また、当初1月・2月の時は、それを被災地、避難所の動物たち、あるいは被災を免れた動物病院へフードを搬入するということがございました。少しでも多く皆さんに運ぼうということで会員たちが一所懸命運んでくれた。缶詰とかそういったものはすごく重たい。それでも、どんどん、どんどん積んで何回も何回も行くものですから、特に重量オーバーで、ブレーキあるいはクッションなどがやられてしまって車を修繕しなくちゃいけない。それくらい頑張ったものです。この時は予定が有って無いようなもので、全く予定が立たない。そういう時だったと思います。スライド次お願いします。

これは一応受付風景を表したものです。(写真10)受付といいましても単純なものではございません。電話の応対、搬入手続、里親や飼い主返還の手続き、ボランティアの受け付け、迷子の相談、来訪者の応対、物資や医薬品の手配、それから各部署への連絡ということで、てんてこ舞いの忙しさでした。

▲写真10

当初動物の受付は、期限は全く切っておりませんでした。というよりもこちらの方が体制ができずにとにかく受け入れようというふうな形だけで、預かり期間は、だいたいその当時多かったのが半年とか一年、あるいは不明というのがいちばん多かったです。不明というのはどういうことかと言いますともう本人にもとにかく予定が立たない、聞いても何してもわからない。こういうふうなことが結構有りました。

ただこちらといたしましては預けっぱなしでも困りますので、「1カ月に一度は連絡してください。犬猫っていうのは生き物ですからけがしたり何があるかわかりません。だからそれだけはしてください」ということを連絡しましたけれども、実際に連絡したり、動物に逢いに来てくれた飼い主さんは少数であったということです。そしてこちらからどうなっているんだろうということで飼い主さんに連絡しようといたしましても、なかなか連絡が取れない。やっと連絡が取れましても、「もう全く動物飼えないところにいる」とか、「そんなもん引き取れない。予定も何にも立たないのでどないも仕方がない」という返事がどんどん返って来ました。そしてこちらから言いたいことは、「それでも1カ月に一回だけは連絡だけはしてください」これはお互いに、生きようということで、余裕というものが全く有りませんでした。でも月に一回でも寄ってくださいというふうなことを言いました。

そして多くの動物たちを長期間飼育したとき感じたことなんですが、動物たちというのはまず縄張りを持っているということです。散歩とか食事とか遊びの時も動物たちは縄張りをつくってしまいます。そして世話する人や動物に対して全然態度が今までと違ってくる。そしてまた世話するボランティアさんもどんどんと変わっていく。これはもう動物にとっては何とも理解しがたいようなことであったと思います。やはり主人が決まっていないと、頼れるものが必要でないかと思います。

そこで、われわれはそういう予定の立たない飼い主には「里親に動物を出したらどうか」ということを勧めました。「その方が動物も早く幸せになるでしょう。そしてまた早く引き取られていけばほかの動物を助けることができるんだ。」受付で「センターは満杯です。今は受け入れることができません。また後日連絡してください。」こういったことを言う

のは非常につらいことです。スライドをお願いします。

救護活動をしていて感じたことですけれども、里親1号ということで言いますと小型犬、それから子犬、これを希望する人が多かったのには驚きました。これは一応里親が成立してもらわれていくということです。いい飼い主さんが見付かってよかったということでこのように写真撮影と言う場面でございます。この手伝ってくれてる方は獣医さんで、獣医さんでありながら一般ボランティアとして参加していただいて、本当に大変助かりました。

震災を乗り越えた犬の話ですけれども、里親希望で来られてワンちゃんなんかを見ています。そうしますと急にぱーっとこう犬に近づいていって、まあチーズなんかをやってるわけですが、そしてどうしたんだろうと思って聞きますと、実は近所の知り合いの犬だったと。震災前は自分も面倒を見たことがあるんです、と言うことなんで。まあ、いきなり飼い主さんなんかが分かったわけですけれども、飼い主さん自体が飼える状態でもありません。犬の方も震災のショックからか情緒不安定で痩せ衰えて、精神的、肉体的にもひどい状態であった。しかしその里親希望の方は、暇を作っては会いに来てくれて、散歩に連れていってくれて、早くもとの状態に戻してあげたいということで一所懸命頑張ってくれました。

そうしますと犬の方もだんだんと普通の状態になってきて、毛づやもよくなってくる。性格も変わってくるというふうな変化が起こりまして、その里親希望者さんがやって来ると飛び上がって喜んでいるという、信じられないような変わりようであったということです。そして最後には元気になりまして里子として迎え入れられたということがございます。スライド次お願いします。

これは先ほど多目的ルームと申しましたけれども、まあこういうしょうもない写真です。（写真11）ここがもともと治療室です。多目的ルームというのはいわゆる治療をして、治療が終わりますとキッチンに早変わりする。そしてご飯、食事なんかを全部終わりますと、ボランティアさんの寝室になると。あるいは昼間の時間が空いたときにはボランティアさんがここで休んだり、あるいはミーティングしたりということで色々な使用目的で使われたということです。ということは先程も地図を見ましたけれど、ちょうど大体この辺が真ん中あたりになってくる。ガスもあれば湯沸かしとかそういったものもございますので非常に便利であった、使いやすかったという

▲写真11

ことです。当初、初めに救護センターができたときには何にも施設がございませんでしたので、ここに来られたボランティアさんは寝袋一つで来られて、これはタイルですね、この上に夜は寝てたわけです。寝袋をかぶってそのまま寝てた。それは寒いですよ。一月の終わりぐらいですから。「先生昨夜は氷点下4度ぐらいになりました」いうようなことよく言われました。まあそれ「頑張ってください」としか言いようが無かったので言っておりましたけれども。ところがだんだん設備が整い始めまして、毛布をお分けしたわけですね。「先生どうぞ使ってください」「いやああったかいですねえ、毛布っていうのはすごくあったかいですねえ、昨日はおかげさんでぐっすり寝れましたよ」と言われました。まあそんなとき、顔ではそうですかと言いますけど、心のなかではこんなんでいいのかな、この人達はいくら動物が優先と言ったって体が持たんぞ、と思いまして、それで早急にマットレスとかソファーとか、あるいは先程お見せしたコンテナハウスとか、温風ヒーターとかとかそういったものを入手しないとどうしようもないという事態で、本当にその時に来られたボランティアさんには頭が下がる思いがいたしました。次お願いします。

これは現在の犬舎です。（写真12）パドック式というのはこういうふうに区切ってて砂を中に入れてあります。ここは網ですね。このように1匹の場合もあれば、2匹の場合もあるということです。スライド次お願いします。

これも同じようにこのように仲のいい子の場合は2匹入れています。この子なんかは里親希望で私待っ

▲写真12

▲写真14

ておりますというような体制ですね。次お願いいたします。

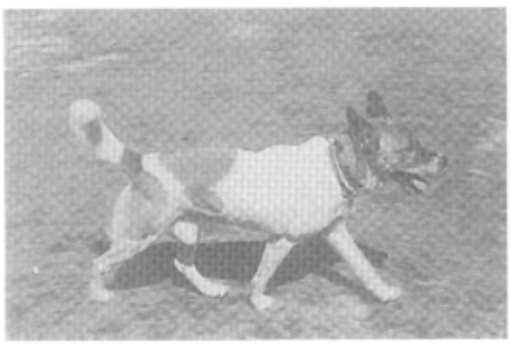
これはそれの２階にある猫舎です。時間が来ますとこういうケージでは基本的に寝かしてるんですが次々に扉を開けまして、性格の合う子を順次遊ばしておるということです。次お願いします。

これも同じように高いところに昇ったりとかこういうふうに上に昇ったりとか、猫ちゃんたちはおのおの好きなようにしといてもらってます。次お願いします。

これは里親として引き取られていかれた飼い主さんから送られてきたとこです。（写真13）この子元気そうに歩いておりますが、実は13歳と年をとってると。そしてこの子の番号が10番、つまり１月の27、8日に入って、それから今までずっとセンターにいたということです。なぜそうなんだろ。この子はお座りも出来るし、伏せも出来るし、待ても出来ます。ボランティアさんが一所懸命仕込んどいてくれました。それだけ出来て性格も良いのにと思うんですけれど、やはり高齢であった。顔もこう見るとかわいいんですけれど、見栄えが良くなかったんではないかということで、新しい飼い主さんになぜ引き取られたのかと聞きますと、「思わずこの子と目が合ってしまった。あっと思うと目が合った。それで気に入って連れて帰っちゃった」ということで、喜んでこの写真を送って下さいました。次お願いします。

これも同じように引き取られたところで、こういうふうに砂浜を一生懸命散歩してるということでうまく溶け込んでくれているんだなと思って、非常に晴れ晴れとした気持ちになったということです。（写真14）スライドお願いします。

それからこれは単にこういう子を写してるんですが、色々この子もエピソードがございます。（写真15）これはレスキューしてきた子のことなんですけれども、犬のレスキューというのもなかなか大変で、例えば電話で「かわいそうだ。きっと捨てられたんじゃないか」「猫が迷ってるみたいです。きっと震災で迷ったん違うか」そういうような連絡が入ります。が実際にそこに行ってみますとかなりの間違いがある。動物はいるんですが、どうもおかしいと思いますと、ちゃんと飼い主さんがいて繋いでいる。飼っているんだ。そういったことを時間帯が違う段階で見ますと、ここに繋がれっぱなしだ、あるいはここにおりっぱなしの猫ちゃんがいる、そういうふうなことに見られるということがございました。後日飼い主さんから苦情の電話が来たことがございます。それで、この子は、ここに写ってる子は、我々ではアメフトメリーというふうに名前をつけています。



▲写真13

▲写真15

これは飼い主さんは家が全壊して、飼い主さんが入院してしまってた。しかしメリーちゃんはそこを全然動こうとしなかった。そして近所の人がかわいそうなのでエサなどを運んでいたのですが、余りにも不憫だということでセンターに連絡してこられた。そしてセンターに保護されました。これもその飼い主さんが分かったのも、病院でテレビを見てたんですね。そしたらレスキューでこんなのがでったということで、「これはうちの犬やー」ということで連絡されて飼い主さんがわかったというふうな形です。この子も先ほど言いました十五歳と高齢ですので保護してまもなく、やはり容体が悪くなってきた。調べてみますと子宮蓄膿症、それから膀胱結石というのがあって手術をしなくちゃいけないというので、そのおじいさんに電話をいたしました。ところが自分自身もリハビリや手術をしなくちゃいけない。とてもじゃないけど身動きが取れないんだ、ということで　まあ年齢もあるのでだめかもしれないけど、とにかくあなたに任すしかありません　と、「何とかしてください」といいうことを言われまして、「よし」と、「では了解しました」ということで、会員の先生の病院に運びまして手術し、無事に手術が終わってセンターに戻ってくることができました。こういうふうに肩が腫れてると、おじいちゃんが言うにはこれはコブだ。確かにそうなんですけど、実は脂肪肉腫という、一応悪性の腫瘍、これがまあ数年前からだんだん大きくなってきたということでございました。センターにはこのような犬や猫がたくさん居ります。これらの動物を最後まで面倒見ることが我々の義務であると考えております。皆様の温かい支援を望んでいるのは本当はこういう動物たちではないでしょうか。両センター設立より日曜日も祝祭日もなく頑張ってきました。これも多くのボランティアの人たち、全国の人々の応援があったればこそ成しえたことだと深く感謝しております。本当に有り難うございました。これで終わらせていただきます。

（座長）

素晴らしい話をどうも有り難うございました。それでは続きまして第3セクション「救護活動とボランティア」と題しまして、神奈川県川崎市で開業しておられます馬場国敏先生にご報告いただきます。先生はサウジアラビアの湾岸戦争、あるいはオーストラリア、シェットランド、スペイン、南アフリカ等、世界各地で起きました、オイルタンカーの座礁や沈没により油まみれになった動物の救護活動等何回となく経験されており、日本における動物レスキューのエキスパートで、この度も地震直後の1月26日には被災地である神戸に到着していただき、以来2カ月に渡ってボランティアの方々と寝食を供にしながらそのノウハウの提供と指導をいただきました先生で、世界的視野から見た動物の救護についてご報告いただきます。よろしくお願いします。

（馬場先生）

川崎市内で小動物を開業しております馬場です。今日はよろしくお願いします。旗谷先生から今紹介にありましたように、今回ですね、我々の言葉に、災いは天から降ってくる、というのをよく使いますが、今回本当に何ら前世に罪があった何でもないのに災いがあっちからかかってきたというか襲ってきました。現地の方、それから被災に遭われた方、犠牲になられた方、本当にお気の毒だと思っています。それと同時にこの会場に参加しておられます方々というのは何らかの形で今回のレスキュー活動にご協力いただいているものと思っております。私は部外者なものですからそんな責任のあることはやっておりません。現地の獣医師会の方々から、また現地の愛護団体の方々、また現地のボランティアの方々、また近郊のボランティアの方々、本当に救護活動半ばなんですけれど、私のような部外者から言いますと、本当にご苦労様、大変ですねというふうなことで本当に心から皆さんに、感謝の気持ちを表したいと思います。

それと今現在皆さんがやっておられる救護活動が、世界から比較したらどういうふうな状況なんだろう、どういうふうな評価されてるんだろう、またどのようなレベルで進行しているんだろうかということをちょっと皆さんも感じておられることだと思います。そういうことですから、皆さんよりも私の方が少し世界各国のレスキュー活動に参加してるということでありまして、少しは経験豊富ではないかと思いますから、僭越かもしれませんけども、私の目から見て今皆さんのなさってる救護活動がどの程度の評価を与えられていいか、それとまた現地のと言いますか、皆さんに、また現地の獣医さんにも申し訳ない、また担当の行政の方々にもちょっと皮肉っぽく聞えるかもしれませんけど、もう少しこういうところを直したほうが良いんではないかという痛いところも少し指摘したいと思います。

それと、常に私、皆さんが皆さんがという言葉を

使っておりますけど、前の先生もおっしゃったように我々動物関係者、特に獣医さん、動物愛護家、それだけでは、本当にこういう動物の救護活動ということを100%運営することとは不可能であるわけです。そういうことですから本当の素直な気持ちで動物が大好きなんだ、また自然が大好きなんだという本当に素直な気持ち、と言いますか、心を我々がいだかないかぎり、これはまず成功しない。そういうふうに私自身も思っておるものですから、皆さんにお願いしますとか皆さん皆さんと言っておるわけです。

それとまあスライドをお見せしながら、世界のそういうレスキュー施設を説明したいと思うんですがその前に、午前中に非常に東京の方の先生の質問で素晴らしい指摘をなさったわけなんですけれど、本当に動物愛護というかボランティア精神が日本に根付いて本当に素直な形で見れるんだろうか不安だったという大学の先生の質問があったんですが、全く私もそういうふうに思っております。

そういう点においては動物愛護する人は一応口では動物愛護という言葉を本当に多く使っておるんですけど本当にはそういう気持ちがまだ培われてないというのが僕の考え方なんですね。それと、どうしても我々、日本人というのは本当にあの素晴らしい国民性を持ってると思うんですが、反面どうしてもその白眼システムというか、何かに没頭するとあの人はちょっと変人よとか、そういうふうに我々ついそういう目で見がちな国民ですからどうしても動物を本当の素直な気持ちでかわいがってると、町内会の皆さんはあの人はちょっと変わっているからとか言われて、嫌がらせでも何でもないのですがそのお家の方の前に猫を捨てていくとか犬を捨てていくなどの偏見があります。

でもこれを取り除かないかぎり、まだまだ動物愛護というのは本当に育たないんじゃないかと思っております。これが無くなったときに初めて、世界というか動物愛護先進国と同じような気持ちで進んでいけるんではないかと思います。

それと皆さんここに、僕自身も自分自身で自己暗示かけまして動物愛護、動物のためということでなくて人間のためなんですけれども、こういう活動、それと動物愛護の動機、意義、そこら辺を僕はこういうふうに思ってるんです。皆さんのこの中でも本当に動物大好きで自信を持ってそういう救護活動とか動物のために活動なさってる方がほとんどだと思うんですが、まだちょっと心安、あんまり確信持てないという方もいらっしゃるかもしれません。そういう方のために、僕はどういうふうに思ってるかということをちょっと説明したいと思います。

この動物愛護というか、動物をかわいがる、自然でも何でもそうなんですけれども、それは本当の純粋な思いやりの気持ちなんですね。この思いやりの気持ちは、ただ動物だけではなくて動物を愛するという気持ちが育まれれば、これは人間にも当てはまる、人間にも当然思いやりの気持ちを持って人間同士も潤ってくるわけです。今日行政の方もいっぱい来てらっしゃるんですけど、もしそういう思いやり、すべて社会人間に対して思いやりの育まれた方々が大勢出来上がったとする。行政もまたやりやすいわけです。常に行政に対しても思いやりの気持ちを持つ、行政もまた当然そういう人間、我々と同じ様な人間が行政をやってるわけですから、行政の方も我々市民に対しても思いやり、いろんな方にたいしても思いやりということとなる。

とにかくひいてはその動物愛護、自然を愛するという気持ちが、我々に巡り回ってくるんだということを確信してもらいたいんです。そうしますと多少私町内会で変なふうに思われてるんじゃないかなあっていうふうに思われなくても、正々堂々とこれはもう絶対に我々が生きていくためには、この地球上で生きていくためにはこういう気持ちを持たないと絶対駄目なんだというふうな気持ちになれれば堂々と、私は動物大好きですというふうなことで町を胸を張って歩いてそして動物の世話もできるんではないかと思います。そういう気持ちで私もあちこち、大してお役に立たないんですけどもお手伝いに、ちょっと行ってるわけなんです。

今回も神戸の皆さんには本当にお世話になって、まあ、旗谷先生からちょっとオーバーに紹介いただいたんですが、そんなこと決してないです。足手まといになっただけなんですけれど、現地の方、関係者、本当に皆さんご苦労様だと思います。余り前置きの話をしてますと、折角、今皆さんが活動なさってるのがどのぐらいの自己評価できるかということをお話しできないと思いますから、早速スライドの方で、世界各国がどのような施設をもってどういうふうな心をもって動物救護に当たってるかということをちょっと皆さんに知っていただきたいと思います。

そうすると今、確かに施設的には、我々の国民感情、国民の信条というものもありますからそう外国並にというわけにはいきませんけれど、心だけでも、

我々は間違いが無かったんだということを、自信を持たれるように説明したいと思います。

まず最初に、湾岸戦争、1991年なんですが、皆様ご存じだと思うんですけれど、あのペルシャ湾のオイル流出事故で15万羽の海鳥たちがですね、犠牲に遭って、私もその時お手伝いにいったんですけれど、助けるのは実際5千羽ぐらいしか出来なかったわけなんですけれど、助ける率というか救命率というよりも、世界各国の皆さんが、環境を愛する人間とか動物を愛する人間・人を愛する人間、当然人ですからお互い人間愛さなくちゃいけないんですけど、そういう人たちが、これは絶対に必要なことなんだということで駆け参じたといいますか、世界中4カ国ほどの皆さんたちが駆け付けまして、当初世界各国のボランティアさんが200名ほど集まりましてそれで用意スタートという形でボランティア施設というか救護施設を造り始めたわけです。

ただ、サウジアラビアの場合、何せああいうイメージ的に異教徒の国なものですから、動物なんて本当に大事にしてくれるものなのかな、という考えを皆さんお持ちじゃないかと思います。しかし、そういうもう本当に極限の世界で砂漠の人たちは生活しておられるものですから、とにかくこれ以上環境のバランスを壊せば我々は生活していけないんだという考えを持っておられます。我々の国は山紫水明でなにかちょっと物事が起これば水に流せばいいじゃないか、水が豊富だということで環境そのものが今まで良かったのであんまり気にならないんですが、そういう中近東の人たちというのは、かなり環境に気を配っておられます。

それと同時に、また動物も環境の一部だという考え方で、我々よりも、動物に対する絶滅とかに関してはかなり大きな予算と国民の皆さん、国、国家がですね大きな気持ちをもってプロジェクトを組んでおります。

そういうことで今回神戸のほうは官民一体といいますか、僕第一に好きな言葉ですが、そういう形にはなりましたが、民間のイニシアチブという形がちょっと強いんですけれど、サウジの場合は環境庁に相当する国家機関が、イニシアチブをとったわけです。予算もかなり作りました。それで我々民間人というか動物愛護団体とかそういうのがジョイントして本当に世界各国の皆さんが駆け付けてこのレスキュー活動が行われたわけです。

それと先程動物愛護の意義をちょっと話したんですが、戦争のこともやはりそうなんです。動物愛護の先進国同士が争い戦いをやるわけですけれど、これはもともと動物愛護の精神を普及させてまた別な意味で先進国の人たちが矢をすえなきゃいけないんじゃないかと思います。ちょっと余談になりましたけれども、それをだけ加えておきます。

このスライドはサウジアラビアなのに何で緑が豊富なんだと疑問をお持ちだと思うのですがこれは全部地下水です。皆さんご存じのように石油層がもう40年くらいで枯渇するんじゃないかという常識、情報はお持ちだと思うんですが、現地の人たちはオイルが枯渇するよりも地下水の方が出なくなるんじゃないかと心配されるぐらい、どんどん汲み上げております。

そういうことで、本来ならこういう緑ということは考えられないんですけれど、やっぱり無い物ねだりで現地の人たちはこういう街路樹を植えまして、一日4回から5回のスプリンクラーで人工的にこういう緑を作っております。これは運動公園福利厚生施設の広場というような施設で、その施設を全部借り切って救護活動をやったわけです。

神戸にも運動公園があると思うのですが、その運動公園を全部使わせてくれたわけです。これはやはり国の、行政の力ではないかと思います。

このころ丁度夏に差し掛かったわけなんですけれども、ここには50メートルの大きなプールがあるわけです。普通我々でしたら考えられませんね、夏場に市民プールを野生動物のために取り上げちゃったということになればこれは大変な大騒ぎになると思うんですが、現地の人たちは、我々が動物を犠牲に追いやったんだという気持ち、大きな気持ちを持たれて今回の夏だけは野生動物に、オイルまみれになった動物に提供しようというふうなことで、提供してくれたわけです。

奥の方の建物がですね、小学校の体育館ぐらいの大きさなんですが、そこにペルシャウとかカモメたちを収容しまして、リハビリをやっておったわけです。その奥に大きな50メートルプールがあります。そこを海に帰す前のリハビリプールという形で使っておりました。それと正面に車が2台ほど止まっておりますが、右がですね、クリーニングルームということで使っておったわけなんですけれど、そこから世界各国に水鳥を洗っておる写真とかが打電されてたわけです。

これが、奥の方の一角なんですが、小学校の体育館ぐらいの大きさを4等分しまして診療室、洗浄室、

薬品庫ということでかなりぜいたくなスペースを持ってやっておったわけです。

これは今回ですね、阪神のレスキュー活動もそうですが、とにかく動物というのは食事の次は、私としたらば食事よりもやはり運動関係、そっちをもっともっと重要視しなくちゃいけない、もっと広いスペースをとってあげないと動物というのはやはり体調に変調をきたすというのが、これは常識であります。ただ今回の場合は、やはり国民感情もありますし、それと敷地的な条件もありますのでそんなに贅沢な面積はとることが出来なかったわけです。そこでそれをカバーするのには皆さん参加していただいたと思うんですが、ボランティアさんたち、全く素人のボランティアさんでいいんですけれども、とにかく運動しろ運動しろ朝晩の運動しろと促すことで面積的なことをカバーしていただいたわけです。そういうことで僕は本当にボランティアさんがこんなに集まってきてくれて、オーバーな表現かもしれませんが、本当に鳥肌が立つくらい嬉しかったんです。

それで、このサウジアラビアの場合は、敷地的にも国家的なものが関与してますので、十分面積は与えられたので、何不自由無くリハビリを続けられたわけです。これが丁度診療室の入り口になるわけですね。

これも大体6畳くらいの部屋に、世界各国から送られてきた薬品を整理して、いつでも誰でも取り出しやすいように整理しておったわけです。我々の神戸辺りも本当言うのなら、もう少しきちんと区分したかったのですが、無い物ねだりで無いなりにきちんと我々神戸も、日本も、使いやすいような形でやっておったんじゃないかと思います。はい次お願いします。

これが診療室なんですが、診療室もやはり一区とってまして、十畳以上の部屋を診療室として使っていました。はい次お願いします。

これがその診療室の裏の50メータープールなんですが、これは米軍から頂きましたネットをプールの上に縛りにしていました。なぜかと言いますと当然海鳥たちが多かったもんですから、元気になりますとこれくらい簡単に助走無しで飛び越えるということで、戦車などをカモフラージュするためのネットを張って、ここでリハビリしておったわけです。はい、次お願いします。

これが50メータープールなんですね。ちょっと暗くて分かりづらいかと思いますが、これペルシャウたちが丁度餌をあげた後、羽繕いをするための泳ぎなんですけれども、もういつでも出せるぞというくらいの状態まで回復しております。この羽ばたきで大体お分かりではないかと思うのですが。で、回復した鳥たちからどんどんバーレーンの下の、大体300キロぐらい近くなんですが、汚染されてないところへ運んで行っておったわけです。はい次お願いします。

これは英国の方の動物救護センターの総本山と言えると思うのですが、RSPCAです。そこの王立の動物虐待防止協会という、まあ愛護協会、といっております。ここのリハビリセンターなんですね。まあ本部はここにはないんですが、ただ動物の保護のためのセンターなんです。この敷地が100ヘクタールぐらい、小さなゴルフ場のハーフ9ホール、ショートコースは完全にできるというくらいの素晴らしい広大な敷地をとっておるんですが、ここにいろんな動物の種類にかかわらずにやはり傷ついた動物たちを保護してそれを元に戻そう、また飼い主に返そうという機能目的でこういう大きなセンターをつくっておるわけです。

英国では、もうひとつ北のほうに、エジンバラのほうにSPCAというのがありまして、これスコットランドのSなんですけれど、そこを含めますとそういう施設が、これよりもちょっと小さいんですが、それを含めますと大体8個所くらい動物の完全なレスキューのためのセンターが設けてあるわけです。

我々も本当言うならば、こういうふうにただ行政だけの管理ではなくて、行政と民間が一緒になったような本当の動物愛護のための、救護センターというのがあればいつでも有効的に利用できるのではないかと思います。本当に素晴らしいのではないかと思います。それとこの愛護活動、救護活動において、必ず救護活動の意義というのを、啓蒙活動する教育を同時活動しなくちゃ活動の実が無いということで、普及活動に啓蒙活動にかなり力を入れております。

この建物の中にも、やはり教室2つくらいあるようなレクチャールームがありまして そこに色々な展示をしたりそこで皆さんに、動物好きな方がやって来られるんでしょうが、それ以外にやはり色んな中学生とか小学生とか一般の方になぜ必要かということをそこでやっております。それがかなり重要ではないかと向こうも言ってますし、私も思っております。はい次お願いします。

こういうふうに、手術室もありますし診療室もきちんとしていて我々、町の獣医師の動物病院以上のしゃれた病院を持っております。はい次お願いします。

これはアザラシ専用の、リハビリルームなんですが、ちょっと我々には考えられないくらいのお金を使いまして、相当長期に耐えられるような施設を造ってるわけです。アザラシもありますしまた野生動物もありますし、また牛とか馬とかそういう、犬もそうなんですけど一時的に保管保護収容するという場所も非常に立派なの作っておりました。はい次お願いします。

これは返す前にアザラシを、ここでリハビリをさせるということでかなり大きなプールをアザラシ専用のプールとし、それが3つほどあります。はい次お願いします。

これもそうですね。この奥がかなり大きな建物なんですけどこれは何に使いますかと言いますと、先ほど言いましたように、教育ルームといいいますか啓蒙活動の一環でレクチャールームということで、資料館ですね。ここで、そんなに常日ごろ使わなくても立派な施設に造ってみんなを教育するんだというようなことを言っておりました。はい次お願いします。

これは野鳥専用のものです。どうしても保護した時には、やはり恐怖心がありましてやはり暗いところ、ちょっと離れた場所に造らなくちゃいけないということでそのセンターの方からですね、500メーターほど離れた林の中にこういうのを種類別にですね、造っておりました。はい次お願いします。

これは多目的といいますかプールなんですが、ここに放したガチョウとか白鳥や、また色んな4つ足の動物もここで遊ぶようにということで水を張ってここでリハビリをさせるんだと説明をしておったわけですけれど、これはそれこそ自分が入りたいときに水に入るということで非常に便利なプールだなと向こうでは感じました。この場所で、このシーンでお分かりだと思うんですが奥の方までかなりあるんですが、もっとこれの数倍あるんですね。そういうことで向こうは人口も少ないということもありまして簡単に土地が手に入るということでこういう贅沢なこと出来るんですけれど、ただ土地があるだけではやはりこういう施設造ろうと言ってもかなり莫大な資金が必要なものですからやはり国民とか皆さんとか国の協力が無いかぎりこういう施設は造れないんじゃないかと思っております。はい次お願いします。

これもそうです。はい次お願いします。

これは、SPCAというエジンバラの方の施設なんですけど、ここも先程言いましたRSPCAよりもちょっと規模は小さいんですが、全く同じような施設を造っております。はい次お願いします。

これもやはりこういう風に検査室とか調理室とか手術室とかきちんとしたのがセパレートされてまして、なに不自由無い施設というふうに感じました。はい次お願いします。

これは洗浄室ですね。白鳥を洗っているところです。結構向こう白鳥が多いものですからエンジンオイルとかそこら辺でやられてるようです。はい次お願いします。

これはレクチャーセンターですね。エジンバラの方はちょっと小さな規模なんですけどもそういう規模であってもきちんとしたそういう啓蒙のための教育のための部屋を立派に作ってて設けてるということです。はい次お願いします。

これが全景なんですが、かなり大きな施設を持っております。はい次お願いします。

これは一寸上にこれは鹿専用のリハビリセンターです。これはまたとっても広い広大な面積を持っております。はい次お願いします。

これは南アフリカの去年の夏タンカー事故でこれも15万羽ほどのペンギンがやられたわけなんですけれど、この時にもやはり世界各国のですね、南アフリカの政治上ご存知の方たちが集まってきて、経済的にも大変だろうからということでかなりボランティア団体が集まってくれ手伝いに来たわけです。これもかなり広い面積を持っております。この施設はケープペンギンという固有種がいるもんですから、そのための、その種類だけのペンギンのためだけの施設

です。ですがやはりいろんな動物が来るとそれを保護してるということを言っておりました。はい次お願いします。

この中にはペンギン専用のこういう砂場を作ってみたりとか色んな部屋が作ってありました。はい次お願いします。

これもそうですね。プールも３つほどあります。ペンギン専用のものですね。はい次お願いします。

これもそうです。これはどちらかと言えば外来者と言うか訪問者のためのおしゃれプールなんですけれども、こちらはいつでも放せるぞというのをこちらでですね、飼育しておりました。はい次お願いします。

これは一昨年のスペインでのこれもタンカー事故なのですが、ここのは小規模でそんなに事故は無かったので幸いでした。はい次お願いします。

ここで私が感心しましたのは事故はなかったのにもかかわらず事故直後から、国の方に民間団体が圧力をかけまして、一緒にやろうじゃないかというので国の方もゴーサインを出しまして、ラコルニアという小さな海岸線の綺麗な街の国民宿舎を全部貸し出しまして自由に使えということでした。とても素晴らしいことだったんですが、用意はしたものの15羽ほどの被害だったので非常に良かったと思います。これはその国民宿舎の玄関ですね。はい次お願いします。

これこの国民宿舎の横庭なんですが、ここにネットを張ってここでリハビリしようということで、僕スペインの環境団体の顧問をやっとるもので、とにかく来てくれないかと依頼があったので行ったわけです。この施設で十分だということで行ってきたんですが、本当に十分でした。はい次お願いします。

これがそうですね。ネットを張ったとこです。はい次お願いします。

これは日本なんですが、三田の皆さんはご存じかもしれませんけれども、施設の出来る前の敷地なんです（写真16）。これが1500平方ぐらいではなかったかと思うんですが、やはり我々とすればこれから先は今は我々なりに一所懸命やっておるわけです。

▲写真16

これからも、皆さん国民の理解を得て、また国・行政の理解を得て、期待しちゃいけないんですけど、来ないのが幸いなんですけど、もしこういう今回のような事故がどこかであれば、もっと皆さんが、動物に対して理解を示されて、もっと大きな動物が本当に苦痛無くリハビリを続けられるような施設を造らなくちゃいけないんじゃかなあと思っています。はい次お願いします。

これも三田の方ですね（写真17）。これは夏場の建築中の写真です。はい次お願いします。

これは神戸の方ですね。今もかなり立派なんですがこれもやはりもともと動物にしてみればもっと大きな施設を造ってあげなくちゃいけないんじゃないかというように思っております。はい次お願いします。

これが我々の職場の診療施設なんですけど、我々獣医師の方もこれだけの頭数を保護収容救護した場

▲写真17

合、医学的な予防的なもの含めましてもっと診療施設をやっぱり充実させないとまずいんではないかと思っております。はい次お願いします。

それと、国の方ももっともっとこういうふうにカメ一匹なんですけれども、このカメ一匹をリリースするために、こういうように軍用機の大型ヘリコプターを使うくらいなんです。10羽20羽でもリリースが出来るということであれば空軍の方に電話すればいつでも使ってくださいということで飛ばすわけです。やはりそれだけ全てがまあ動物に対する環境に対する理解がなければこういう風なことはできないんじゃ無いかと思います。だから我々は今回は、これを一所懸命成功させて、今後何かがあったときにみんなが協力して作れるような救護活動と努力をしなくちゃいけないんじゃないかと思います。はい次お願いします。後2枚ほどで終わります。

これもそうですね、これは40羽ほど運んだ時なんですが、その時にも空軍をヘリコプターを使っております。はい次お願いします。

またボランティアさんたちもやっぱりみんな集まって頑張らなくちゃいけないんじゃないか、世界各国の人たち、日本は日本だけでも構いませんけれどやはりいろんな人たちと一生懸命やるということですね。最後にもう一枚ですね。

これはちょっと写りが悪いんですが、サウジアラビアの方でもやっぱり子供たちの啓蒙活動の一環ということで子供たちに自然の大切さ、動物保護の大切さを教えているところです。はい次お願いします。

これもそうですね、これはスコットランドの方なんですが、やはりオイル汚染とかそういう動物に対しての小さいころからそういう扱い方とかそういうのを教育してるということです。次お願いします。

これは皮肉ってるわけでもなんでもないんですが、これが我々が、日本が、こんなに多くの犠牲動物が出たにもかかわらずこういうビニールハウス、これは取り払ったあとなんですが、ここからスタートしたわけです。ですが今回は全て初めてだということで世界の皆さん、また本当に動物を愛する方たちには申し訳が無いということを思っておりますけれども、無い無い尽くしのところでこういうことやり始めてたわけですから今回は許してもらってまた皆さんも先程も言いましたようにやはり動物愛護、何か起きたときには今度はきちんとやるぞという気持ちでいろんな友達に対しての動物の愛護の教育とかそういうことも皆さん頑張っていただきたいと思います。はい次お願いします。これが最後です。　今回そういうふうな色んな不平と言いますか、不十分なとこ、あったわけなんですけども、一番素晴らしかったことはですね、最初にも言いましたようにやっぱり動物を愛する、自然を愛する、人間を愛するという人がこんなにたくさん日本にも増えたんだなという気持ちが本当に嬉しかったです。といいますのはここはもうボランティアさんがみんな集まって食事なんですけれどもこんなに来てくれるとは本当に思いませんでした。必ずや先進国以上にですね、動物に対してイニシアチブをとれる、また自然に対してイニシアチブをとれる、人間に対しても人間観、世界に対しても絶対我々はこれから先頑張ればイニシアチブとれるんではないかと私は自信を持っています。話が大幅に伸びまして時間を越えまして申し訳ございませんでした。これで私の方は終わらしていただきたいと思います。

（座長）

はい、世界の動物救護活動について非常に貴重なお話をどうも有り難うございました。引き続きまして「淡路からのリポート」と題しましてこの度の大地震の震源地のすぐそばである淡路島の津名郡で動物病院を開業しておられます、安藤武樹先生に地域獣医療に携わる臨床獣医師として、大震災が動物にどのような影響を与え、また人と動物との関係がどのように変化したかを、一軒一軒足で調査された結果と、毎日の診療から得られた非常に貴重な経験をお話しいただきます。よろしくお願いします。

（安藤先生）

失礼いたします。淡路島で被災した一獣医師として体験したことを皆さんにご報告いたします。それではスライドをお願いします。

私の住む兵庫県淡路島は人口約17万人の島で、今回震災のひどかった島北部の津名郡は、農業、酪農、漁業と言った一次産業の盛んな、自然環境に恵まれた美しい地区です。震源地の北淡路は、東浦町、淡路町、北淡町の三町で形成され、私の診療の場でもあります。ご存じのように今回の地震は、淡路島全

体に大きな被害をもたらしましたが、これらの被害は津名郡に集中し、観光の中心地である洲本市や、淡路島南部の三原郡は、幸いにも震災を免れ観光の施設も健在で、ただいま観光の美しい季節となっておりますので、ぜひおいで下さい。スライド次お願いします。

震災による人的被害の様子です。津名郡に集中しております。スライド次お願いします。

今回の大震災では、私たち人のみならず、多くの動物たちも過去に体験したことのないような恐怖にさらされました。私は地域獣医療に携わる臨床獣医師として大震災とその後の混乱が動物に与えた影響についてと、震災後に人と動物の関係がどう変化していったかを、皆さんの協力をえながら行った調査や、体験した症例から、特に心的外傷による症例などをご報告したいと思います。

今回行った周辺調査は地震による被害が犬の飼育に与える影響を知る目的で、北淡路3町を中心に全島の8月末の犬の登録頭数を調べ、東浦町、淡路町、北淡町は地域別に細分して、震災前と比較してみました。これら3町については7月末までの被災状況を、罹災証明を基準に、全壊、半壊、一部損壊に分類して被災率を出し、各地区別に細分し地域ごとの登録数の変化と比較しました。また登録犬の飼育の被災の程度も、はがきによるアンケート調査で調べた数字をいただいてご報告します。さらに、東浦町内で4キロも離れていない、被災率100%と被災率0%の2地区を選び、個別に聞き取り調査をしました。実際の飼育状態と、震災による症状の発現頻度を調べました。また仮設住宅に住んでおられる方と、自宅で過ごしておられる方の、飼育しておられる動物の発症の差も比較してみました。震災の多かった津名郡のみ、八月末現在で明らかに増加しております。震災の影響の少なかった洲本市や三原郡の登録頭数は、変化がないか減少しておりました。スライド次お願いします。

住宅の被害や人的被害の多かった津名郡の全ての街では、犬の登録頭数が明らかに増加していました。スライド次お願いします。

東浦町では被災率の高い地区でも増加率は多かったのですが、全壊のもっとも多い地区で唯一犬の登録が減少しておりました。スライド次お願いします。

淡路町では、全壊の多い地区でも増加しておりました。スライド次お願いします。

北淡町でも同様に、全壊の多い地区でも増加しておりました。スライド次お願いします。

また登録している飼育者のうち、おおよそ半数以上は全壊または半壊の被害を受けておられました。その他の飼育者は一部損壊か被害無し、または未回答の方でした。登録していた方の半数以上が、全壊か半壊の被害を受けているということでした。

飼育状況の実態調査では、おおよそ20%の方が犬を飼育しておられ、その内5割から7割の方が登録しておられました。スライド次お願いします。

被災率と発症率の関係では、被災率0%の震源地に近い地区で約2割の犬に症状が現れておりました。同じく4キロ以内の被災率100%の地域では、5割、半数の犬に症状が現れておりました。スライド次お願いします。

仮設に入る結果になった飼育者と、自宅で過ごされた飼育者の犬では、仮設では飼育されている全ての犬に、何らかの症状が見受けられました。自宅で過ごしておられる飼育者の犬では、他の地区と同様に2割程度の犬に症状が現れておりました。スライド次お願いします。

以上のように、犬では登録頭数が増加しておりましたが、私の診療のもう一つの部分であります牛におきましては、各町ともに大幅に減少しております。スライド次お願いします。

次に震災が受診状況や診療内容に与えた影響を知る目的で、被災後の診療軒数を過去数年と比較してみました。特に新規の来院患者数に注目して、カルテから調べてみました。さらにカルテの内容から大動物、主に牛で、震災後2カ月間における診療と震災との関連が認められる症例について、小動物、主に犬猫では震災後1カ月間における診療の内容を検討してみました。震災後の患者数は7月末まで明らかに増加しておりましたが、軽微な症状が中心でありました。このスライドは、新規の来院患者数です。著明に増加しております。これは7月までの数字です。スライド次お願いします。

犬においてはショックによる突然死が多数発生しました。私の診療する地域では、フィラリア症が多く残る地区で、心肥大を伴う高齢な犬を中心にこのような症状を表しました。

猫においては、逃避、食欲不振、脱毛、衰弱などの症状が中心で、死亡例は余り認められませんでした。スライド次お願いします。

牛においては流産、早産が多数発生し、この数字は一年間の件数を超えるものでした。起立不能や発育不全の症例も数多く見受けられました。特に大動物の場合、地震の直接影響だけではなく、発生が高台に多く集中し、ヘリコプターの道路となっており、実際に牛舎の中でヘリコプターの騒音を聞くことが数多くあったのですが、予想以上にひどいもので、これに驚いて発生した暴走や、流産、早産、発育障害が多かったように思われました。これらの事例は、次回以降の救援活動の参考にして頂きたいと思います。スライド次お願いします。

これらの結果から、私は次に2点について気付きました。1つは、人はこのような大災害時、自分のみならず、他者を越えて身近な生き物に対してまで愛情と保護を与えるということです。それほど優しい存在であったということを実感いたしました。またそれ以上に、動物たちは野生という言葉とは裏腹にとても弱い存在であるということも実感しました。スライド有り難うございました。

震災時私たちがボランティアに駆り立てられた感情と同じように、物に対するいとおしさや、何かしなければという気持ちを無条件に受け入れることが出来るのが、私たちの対象であるコンパニオンアニマルだと思います。普段では連れて来られない程度の症状であっても、また普段動物に余り関心を持たないだろうと思う方も、診療に連れて来られました。以上が今回のシンポジウム用にとりまとめた発表ですが、実は私が最も驚いたのは、人で言うところのPTSD、いわゆるベトナム戦争の後に社会問題になったときに皆様もご存じだと思うんですが、今回の震災の後も子供たちによく見られた症状で、暗闇や炎を見て体験したあの時の恐怖の状態を思い出して、不安や不眠、ノイローゼや体の疲れなどを現すような心的外傷が多く見られたということです。PTSD自体は病気というよりは当然恐ろしい体験をしたときに起こる自然な経過だとは思うんですが、人と同じように、また、私の感じではそれ以上に余震や弱い揺れや暗闇を恐れてさまざまな症状を動物たちが起こしたと思っております。

皆さんも体験したと思うんですが、彼らはちょっとした出来事であの恐怖を思い起こしているという状態を表します。例えば地震の当日でもショック死はありましたが、実はその後の軽微な余震や色々な出来事で症状を起こして悪化していくというケースの方が数多く見受けられました。今回動物たちに携わった方ははっきりと認識されたと思うんですが、私自身も今回の震災の前まで動物たちのこのような、心理的な弱さ、そこから起こってくる病気について関心がありませんでしたし、そのような症例を聞くことも少なかったんですが、多分今回診療に当たられた方全ての方が、動物たちも人と同じように、またはそれ以上に心的な外傷が様々な症状を引き起こすということを感じたと思います。これをこれからも重要な課題として取り組んでいきたいと思います。以上で報告を終わります。有り難うございました。

（座長）

はいどうも有り難うございました。引き続きまして「神戸からのリポート」と題いたしまして、この度最も被害の大きかった神戸市灘区で開業いておられます安達先生に、全壊、あるいは半壊した家屋の中に取り残された老人が犬と猫とどのように生き、また家を失い家族を失い、生きる希望さえも失った人が、動物がいたから生かされたというような非常にドキュメンタリーなお話を伺いたいと思います。お願いします。

（安達先生）

神戸市獣医師会の安達です。よろしくお願いします。私が住んでいる場所は午前中に椎葉園長がお話しされてましたけれど、そこの王子動物園のすぐ南側にございます。神戸市灘区で大変ひどい被災を受けた場所です。そこで私がこのシンポジウムの題にありますが「人と動物の大震災」何が起こり、そこで私が何を見て、何を経験して、これから何をするべきか、ということを少しレポートさせていただきたいと思います。

まず初めに私の家の中がどういう状況だったのかを知っていただくために一つ私の子供が書きました作文を紹介させていただきたいと思います。この作文は神戸市小学校阪神淡路大震災記録作文集「地震なんかに負けない」という本に載っています。私も

これ載ってるのを知ったのは子供が夏休みに入ってからでした。タイトルは「私にしかいないただ一人の世界一のお父さん」というタイトルがついています。このお父さんというのはもちろん私のことです。

「未幸？、大丈夫か布団をかぶってじっとしていなさい！地震が起こったときお父さんは真っ先に声を掛けてくれました。私はいつもお父さんに怒られていて、絶対私はお父さんに一番嫌われていると思っていたんだけれど、お父さんは私を誰よりも早く助けててくれたので、私はお父さんはもしかしたら私が一番好きなのかなあ、もしかしたら私を叱っていたのは、私の将来のことを考えていてくれたのかなあ、と思いました。だって私はお父さんがいなければ死んでいたかも知れません。だって私の上には、テレビ、机、本箱、電気が倒れてきたのです。でもそれをお父さんは私の上に来てくれて私を助けてくれたのです。そしてお父さんはスリッパを履いていなくて裸足だったので、足を深く切っていました。私は、痛いだろうなあ、かわいそうと思っていたのだけれど、お父さんは、みゆき、みんなを助けるのに必至でそんなの感じなかったと言っていました。私は、お父さんは優しいなあ、自分がなんば怪我しても人を助けるなんてすごいな、お父さん大好き、と思いました。今までのお父さんはみんなのお父さんよりずっと怖かったんですが、地震が起こってから優しくなるかなと思っていたんだけれど、地震が起こる前よりもっと怖くなりました。でも私は怖いお父さんの方が大好きです。お父さんが怖いのは何かあったときに自分のことを自分でしっかりするように、私の将来のことを考えて、大人になったときのことを考えて叱っていたんだと思います。

というこれ一部なんですが、こういう作文を私の子供が私に書いてくれました。これを見るたびにちょっと目頭が緩みそうになります。私の住居は、6階建てのマンションの6階にありまして、地震直後は本当に家具で立ってるものが何もない状態でした。おまけに家内は早く起きまして天ぷらを揚げまして、その直後に地震が起き、台所とリビングは油とガラスでもうとても手の付けられない状態でした。

私の家族構成は妻とそれから子供が6人、それから犬が2頭おります。しばらく落ち着いて皆を集めてみましたが、余震がひどくて、とてもこのままここにいては危険だということで、ましてや窓から落ち着いて見ますと、もう火の手が灘区の南の方では3個所上がってまして、もう本当に次に大きな揺れが来ればとても子供たちを下まで私はよう降ろさないなと判断しまして、近所にあるお寺に友人たち8人、そして近所の老人たちを集めて、約60名くらいで避難生活を始めました。

大体ここで2日目ぐらいになりますと、私と私の友人たちは生活のペースをつかみまして、何か地域のためにしなくてはならない。で何をしようかということで相談を始めました。

先ず初めに地域に残っている老人を救済しようと先ず民生委員の名簿を借り受けまして、それぞれ地域を決めまして順番に一軒ずつしらみつぶしに当たっていきました。そうするとやっぱり三十数名の独居老人ないし老人夫婦だけでまだ家に取り残されてる方がおられました。潰れた家の中で水も食料もなく、もちろんガスも電気もありませんので、暖房も何にもな無かったんです。これはいけないと思いまして、すぐに温かい食べ物と水を用意しまして一軒一軒配りながら、避難所へいくように先ず説得しましたんですけども、老人っていうのはなかなか頑固なものでそこを動こうとしないんです。

そして我々は灘区の災害本部へ行きまして現実を話しますと、災害本部もこういう経験は初めてで、とてもじゃないけど手が足りないということで、物資輸送とか、それから食料、飲み物の輸送が全く出来ないということで我々がやることになりまして、それで毎日2回災害本部へ行きまして食料とか生活物資をとって宅配することになりました。

また神戸動物救護センターにありました薪で焚くお風呂を譲り受けまして、消防団の詰所で約40日間お風呂屋さんを開きました。老人からは薪で沸かすお風呂は懐かしくて大変好評でした。

さて、ここから私が言いたい本題に入るんですが、私たちが老人救済をしてる時に見たことなんですが、老人と動物が一緒に布団にくるまって暖をとってるというそういう姿がございました。そういう老人たちに話を聞きますと、避難所へこの子たちを連れていけない。行くと他人の迷惑になるし、この子たちがいる限り私たちはこの家で頑張るということでした。

でもこの老人たちは他の老人たちと違って何か、動物を飼っていたために生きる気力のようなものを持っていたように感じます。共生という言葉がありますが、人も動物も本当の極限状態になったときまさにこの共生という行為をしていたんだと私は考えております。言葉が適切ではないかも知れませんが、

現在ぼけ予防、ぼけ治療に動物が大変効果があると言われています。今回の震災のあと私自身が経験したことも良い例だと思います。

最後に2つ私の方から、こうなったらいいなという提言をさせて頂きます。

1つめはこれからの老人を対象とした住宅のことですが、欧米諸国では人と動物が共存できる公共住宅があるそうです。もちろん欧米諸国は土足文化、日本は畳文化というように歴史、文化に大きな違いがあり、また動物への躾け、あるいは動物との接し方など、大きく違っていることもありますが、我々獣医師や動物愛護団体、そして行政が努力し、動物の正しい飼い方を指導していくことが一番大切だと思います。しかし、現在のように公共住宅では人と動物との共存は初めからノーでスタートしています。将来的にはイエスからの出発を考えて、動物と老人が共存できることが可能になればいいなと思っています。

2つ目は避難所においての動物のことですが、避難所に避難された方の中には当然飼っていた動物も一緒に避難されておりました。わたしも小学校でPTAをやっていましたので小学校には度々出入りしましたが。そして動物のエサなどを動物救援センターから運びましたが、その人たちの中には、人に迷惑を掛けてはいけないと廊下の隅に動物をおいたり、気を使っておられる方もいましたが、やはり中にはマナーの非常に悪い方もおられ、問題になったり、期限を切って動物を追いだすケースもありました。

こういう状態を見、そして経験し、またいつあんな大きな災害が起こるかも知れません。もし出来得れば、避難所に動物用のテントやケージなども用意して動物を受け入れる体制もとっていておいた方がいいんじゃないかと思います。簡単ですが私のレポートを終わらさせて頂きます。どうも有り難うございました。

(座長)

どうも有り難うございました。これで5人の先生方の全ての報告は終了したわけでございます。パネラーの先生方は、ただいま机を用意いたしますので壇上の方へお上がり下さい。出来るだけ速やかにお上がり下さい。大幅に時間が延長しておりますので、十分な質問時間はとれないかと思いますが、質問をして頂く方は簡潔にして頂くことと、挙手をお願いします。指名をされましたらマイクを使って住所氏名、また団体企業名、行政の方は所属等を言って頂いた後でご質問を頂くようにお願いいたします。パネラーの先生方、上へ上がって下さい。

大幅に時間が遅れております。3部の開催は4時10分、4時10分からにさせて頂きますので、ご了承ください。それでは只今より質問を受けさせていただきますので、質問のある方、挙手をお願いします。はい、どうぞそこの一番端の方。マイクをお願いします。

(質問者1)

私、滋賀県からまいりました三宅と申します。現在各組織の組織内教育のお手伝いをさせていただいております。特に大阪府の安全運転管理者の法定講習の特別講師をいたしております。

特に死亡事故の減少を願って、厳しいことを申し上げておるんですが、その席に出ておりまして特に若者の交通事故の多発はですね、数字を見ただけでも年間一万人を越えておる。大阪だけでも相当な数ですね。近畿を合わせますとこの多さはご想像どおりでございます。こうしてしゃべってる間に常に4人ぐらいの方が亡くなってるという数字になっておるわけです。ご多分に漏れず、本日会に参加させていただきましたのを私自身飼犬を行方不明にいたしまして、毎朝捜索に出ております。

それで、感じますのは、捨てられている犬の多さ、そして子犬小猫の処分、段ボールに入れて保健所の裏に捨ててあるということを、ほとんど、まあ3日に1回は見るようなことでございます。今のようななされ方をしておれば、その子供が車の免許を取りましたときに、交通事故を、特に死亡事故を起こしましても、届け出はおろか反省すらもしないということになってくるんじゃないかと思ってならないわけです。

中には家庭の事情で、保健所に処分の依頼をしている家の子供がある日保健所の裏の柵に手を掛けまして、恐らくタローという名の犬であったろうと思います。タローごめんねー、タローごめんねー、と泣いているんですね。それを見ましたときに本当に何ともいえない気持ちになったわけです。

そしてまた犬の管理センターで処分される前の犬を見ましたときも、自分の運命がわかるんでしょうね、犬も。ですから鉄柵の隙から鼻先と手を出しまして、出してくれと叫んでいる姿を見たときに、またあるいは琵琶湖のあるところに下水処理場がございまして、あとはテニスコート、ゴルフ場そういっ

たものができてるんですが、そこへ夏はバーベキューに来られる。そういう関係もあるかもわかりませんけれども、平気でそうした場所に鎖にくくったまま水にくくりつけたままで帰っちゃうんですよね。私も電話を受けて、よく似てる犬がいるからってんでいってみましたら、もう鎖が首に巻き付きましてですね、そういうのが何頭もいるわけですよ。

ですから少なくともそういったものを見ましたときに、そういうことを感じるわけですが、平気でこうした処分をする家庭の子供が大きくなって免許証を持つようになりましたときに、いくら交通ルールを、マナーを教えましても、死亡事故は減らないんじゃないか、という気がしてなりません。

現在のやはり大事なことは、法律を徹底して頂くことです。届けのない犬を何とか届け出をさすこと、しなければやめさすこと。これにはやはり行政保健所が徹底していただかなければならんわけです。現在の予防注射の代金を倍にしてでも動物保護の指標とするしかございませんのじゃないかと思っております。現在の行政機構では無理かと思いますので協会が全面的に協力することが大切であろうかと思っております。

そこで本日の事務局にお願いをしたいことは、何事も行政と協力をして連携をして少なくとも現制度の設備を有効に活用すると。今私が拝見していますかぎり有効に活用されてないのじゃないかという気がしてなりません。従って事務局の方も近畿支部として強力に推進をしていただくと。滋賀県にはないように聞いております。私が尋ねましたところ。各府県、各保健所の動物担当者の活用といいましょうか、教育といいましょうか、考え方をもう少し考えて変えていただくということにも努力をしていかないといかんのじゃないか。

動物保護場所の活用は十分ではございません、見てます限り。しかも人間のいわゆる留置場にも立派なものが出来ております。そういうものをどんどん活用していっていただくということが大事じゃないかと思っております。諸先生がたのご意見を承れればありがたいと思っております。失礼しました。

（座長）

一名だけどなたか答えていただけますか。馬場先生いかがですか。

（馬場先生）

三宅さんのおっしゃること、私は全くその通りだと思います。はっきり言いまして私、諸外国の方では各団体が立派な施設をいろんな力を併りて作っていると言いましたけれども、それはやはり広大な面積のおかげだということも思っておりますし、割合日本の場合は、なかなかそういう風に理想の施設は出来ないと思います。

それと同時に、確かに僕も感じておるんですが、やはり行政、国の施設、地方自治体の施設、これはもっともっと有効に使って、そのなかにはやはりその地域地区の、いろんなその、動物を愛する会、何でもいいです。もっときれいな言葉使ってもいいんですが、ほんとに動物を好きな方がそういうふうな施設に対していろんな協力体制をとる。人手が足りない、これから尚更日本も不景気になると思うんですが、そんなにいろんな職員を雇うということも出来ないと思いますし、そういう時においても、若い人たち老人の方たち一緒になってその施設の運営に参加する。本当に心開いて官民一体となった形でほんとの動物愛護ということに行動することがやはり理想ではないかとそういうふうに私は思っております。

（座長）

よろしいでしょうか。他に、向こうの筋の後ろから、ピンクの方。

（質問者２）

名古屋の中日新聞生活部の記者で都築と申します。安藤先生にお話をお聞きしたいと思います。犬の登録件数の増加というお話がありましたが、非常に興味深い御調査で、詳しく概要を知りたいわけなんです。このことは犬が、まあ動物を飼うことによって人が何を受けるのか、動物から何を人間が受けているのかということの反映だと思うんですが、震災をはさんで一年後で、犬の登録が増えた、この理由はどのように御推察でしょうか。それともし、津名郡以外で神戸市もしくは神戸近郊で同じようなデータ収集があれば、これもまた非常に面白いと思うんですけれど、そのような調査があればぜひお教えいただきたいと思います。

（安藤先生）

今年から登録の方法が変わりましたので　昨年までとの比較というのは色々な意味で単純にできることではありませんが、全国的に昨年並の登録であったと思います。ワンちゃんの登録ですが、狂犬病予防注射と一緒に行います。狂犬病予防注射は人間の

ための、防疫的な意味での処置だと思いますので、ワンちゃんを飼う人が登録をするということは、経済的な負担とか多くなっていくわけですね。

ですから、私が思うのは登録をするということは自分の飼っている動物に対して今まで以上の価値ですとか、関わりが深くなったと理解しております。

今回地震がひどかったものですから、私たちの地区では登録を受ける、集団的に登録を受け付ける時期が一カ月ずれたので色々な事情があるかも知れませんが、スライドで御説明したように淡路島の中で、震災を免れた地区と私たちの地区とでは明らかに数字の違いがありましたので、これをとって動物に対して今まで以上に関心を向けるといいますか、経済的な負担が出来ると、いうようなことはいえると思っております。神戸の方ではそのようなことがあったのかはわかりませんが、全国的には昨年並ということをお聞きしております。

(座長)

神戸の登録について安達先生お分かりでしたら。分からなかったら私の方から。

(安達先生)

詳しい数字は旗谷先生の方が御存じだと思いますけれど神戸の場合、東灘からずっと西のほうへいってあれだけ南の方半分くらいが家が無くなったにもかかわらず、九月末までで、昨年比にしますと94%の実績頭数がございます。

(座長)

この辺の事、もしまた時間がありましたら後でちょっとだけお話ししたいと思います。他に。ちょうどそこの真ん中の方。

(質問者3)

東京から来ました田谷と申します。JRA日本中央競馬会に所属しております。今日のお話で、動物は人の心を思いやり、人はまた動物を思いやるということの話しだったように受け止めたわけです。

どの先生に聞いていいのかちょっと分からないんですけれど、犬とか猫、3000万年とか5000万年の人との歴史を踏まえて、進化してきたと思うんですね。その進化の中に体、姿形の進化もあったと思うんですけれど、動物にも意識があって、意識の進化もあっただろう。そういう中で人との関係で、私たちも進化しているかも知れませんけれども、犬とか猫が、意識の面でどのように進化してきているのか、私も馬のことでそれを大変興味をもっておりますので是非お聞かせ願いたいと思います。

(座長)

市田先生いかがでしょう。

(市田先生)

そういうのはまだ考えたことが無いので申し訳ないんですけれど、ただ、飼っている人の意識というか、例えば動物を扱う扱い方とか、例えば動物が病気になったときに具体的にどうするんだと、獣医さんに連れていったら当たり前じゃないかというふうな形のものが大分変わってきたんじゃないかということは言えると思います。

ただ、我々自体にしましても進化しているのかどうかといわれると、よく自覚というのがございませんので、はっきりとは分かりませんけれど、例えば震災に関しましては、あれだけひどい震災の被害を受けてあれだけ多くの方が動物と一緒に、あるいは動物を連れて避難されたということ自体はすごいことではないか。よく、この子は子供と同じですよと言われるのを聞くんですけれど、そういったことに関してはやはりそうであったんではないか。

いわゆるその子供とは思わないにしろ、いわゆる家族の一員というふうな形でやはり必死の思いで連れて逃げたというような形のもので、そういう扱い方によって動物レベルのような受け取り方、例えばこの子は何を言っているんだろう、何をして欲しいんだろうそういうものを、人間の方が理解するというふうなものは以前と比べて大分あったんではないだろうか。

ただこれはデータとしてこうだからこういう数字でこうなったというのは私は持ち合わせておりませんけれども、日常の診療だとかそういったことを通じましてそういうふうにはある程度は感じております。

(座長)

あと一題か二題。一番前の方どうぞ。

(質問者4)

北区からまいりました。これは座長さんにお答え願ったほうがいいんじゃないかと思いますが。神戸市立森林植物園の中にうさぎの園というのがありまして、うさぎが約30ほど飼育されておりましたが、

これが全滅したということだったです。私がいったときに設備の故障か何かでどこかに引っ越ししてるのかなと思ったんですが、後日電話で伺いましたら、いわゆる会部集団自殺ではないかというお話なんですね。この辺のことが、また次の災害のときにこういう事故がおこるのかなあと、実は思っているんですが。この辺は。今日は動物の専門の方が多いんでちょっと伺ってみたいなと思っております。約30ほどおりましたが、全部死んでおります。震災の朝、全く姿が見えないというお話で、全部穴の中で多分死んでいるだろうというのが電話で聞いた範囲の話でございました。ちょっとここいらへん知りたいんですが。

(座長)

そのうさぎは野生じゃなくて飼育されてるうさぎですよね。私、今その話初めて聞いたわけなんですけれども、神戸市役所農政局の久米先生お見えになっていますけど、うさぎは飼ってらっしゃるんですか。そのへん行政の立場からお分かりになってましたら。

(農政局の久米先生)

今北区の方からの御意見に関しまして、私なりに非常に解釈に苦しむ点でございます。それは死んだのか中にはいってどうなっているのかということの、まず逆にもう少し質問の方に、私がどうなったかというところまで少し聞かないことには、お答えはしにくいというのが現状でございます。はっきりいって。

(座長)

ありがとうございます。もしよろしかったらこれについて調査しますので、後で住所、電話番号等お教えいただければと思います。ほかにございますか。その後ろの方どうぞ。

(質問者5)

亜細亜大学教員の井上でございます。目下東京の小金井公園で、何とか関東第二次震災が起きた場合に犬を集めて管理が出来、救護が出来るような体制を作ろうというので5年前から運動を始めまして、ことごとく失敗しています。

失敗の原因は東京都の公園管理課、これが全然話にならない。犬の飼い主が自分らで犬の遊び場の清掃をしようよと、それに一頭1万円づつ集めて清掃用具からロッカーを作ってそこでやろうと。犬の毛を公園に散らかさない、糞は人のも取ろうよという呼び掛けをしたところが、みんな逃げちゃったというのが現状で、「東京の出合者めと、私は西宮の出身で西宮の甲陽園へ行ってみる。犬の飼い主はジェントルマンばかりで、自分の犬も犬なら人の犬も犬と、お互いに遊ばしてる。東京は日本の悪の温床で悪発祥の地だ、関西へ勉強に行ってこい」とこういう悪態をついたんですけれど、逆に関西の方が、先に事故に遭ってしまった。

ぜひ今日のお話なりスライドを、東京でたくさん上演していただきたいというお願いかたがた、問題を起こしてますのが大型犬なんです。ハスキーとかグレートデンとかドーベルマン、秋田犬の中型から大型、柴犬は小型でも人を噛む癖があって弱っているんですけれども、小金井公園で100頭以上集めて朝晩私眺めておりますけれども、今度の事故でそういう大型犬が人に与えた危害、それから犬同士が与えた危害、事故はなかったでしょうか。

私はこれは東京で起きたら大変なことになると思って、いつもハスキーの観察をしております。ああいうの見てると凶暴であるし、力が強い。それで、御婦人が特に大型犬を平気で連れて歩いていると犬の方がたいがいなめているというような状況が起きてますので、こういう事故があったのかどうか教えて頂けたらと思っております。

(座長)

スライド等資料に関しましては、これは資料集を買って下さい。これに全部出ております。2000円です。第2問目ですが、これは神戸の市田先生。

(市田先生)

事故ということで、一番多かったのが咬傷事故、いわゆる噛まれたと。それで先ほど言われましたように一番ひどい方が、手のここにある筋が切れたと。これはあのやはりハスキーなんですけれど、この子の場合は最初からきついというわけじゃないんですね。先ほどお見せしましたように、ケージありますね、あの中に入れるとコロッと変わっちゃった。外では抱っこしてもなにしても何にもないんですよね。喜んで喜んでしているからみんな遊びに行って、ケージに入れるときにちょっと抵抗する。でも入ると。そしてお水をやる、えさをやる。やったやつを取ろうとしたとき、このときにボコーンと来てるんですよね。それで、単純に噛まれただけの場合もありま

すし、今言ったような、この方は入院されて、手術されて無事治って元気なんですけれど、そういったものというのはボランティアさんの場合には非常にあると。

我々もこういう活動を行いまして、当初そういったこともあるだろうかなくらいにしか思わなかったんですけれど、やはりそういったことが多々ある。

これは一つは動物の側ばっかりじゃないんですよね。人の側も見ますと、日曜日に来られる。ずーとボランティアしてきますと木曜日・金曜日になりますと疲れてきます。疲れてきた時というのは何かでふっと気が抜けてしまうのかもしれない。

先程も私の時に言ったことですけれども、動物というのはある程度長くそこに住むようになりますと自分の縄張りというものを持ってきます。そして自分の言いたいことを主張する。我々にしても、先程馬場先生がスライドで出しましたけれど、一時の緊急避難的な形でケージの中に入れて飼う。だから出して朝晩、それ以外も一生懸命やってあげよう。という形で一生懸命やって頂いたんですけれどやはり外の方がいいよというの場合が多かったということです。

それとやはり、飼い主さんというんですか、世話される方がやっぱりころころ変わっていきますとどうしても、主人というか頼れる反面変なことをすれば「コラ」と言って怒られるというふうなことが欠落してくるという可能性としてはあると思います。だからおとなしくなってきたのもあるんですけど、反面やはりきつくなってしまったという子も中にはおります。だから早く飼い主さんというのを決めてあげるほうが動物にとっては分かりやすいんではないかと。

人間であれば、その理屈とか何とかっていうことで話し合いとか出来るんですけれども、そういったことがやはりなかなか出来にくいというふうなことであると思います。

それからもう一つ、犬同士というのは先程言ったように、縄張りを持ってきますと必ずけんかをやり始めます。パドック、ああいう形のものに入れた場合に、ケージ飼いの場合は何とか中に入れてしまえば隣とはけんかできないわけですけれど、ああいうふうな所に入れますとやはり動物の性格というんですか、動物同士はものすごくけんかするとか、人間には駄目だとかいろんな性格がありますので1匹で入れられる子と2匹に出来る子と3匹に出来る子といろいろ段階のものが出てくるので、それをうまく配置していくというふうな形でないと話にはならないんじゃないかと、そんなふうには思っております。

(座長)

よろしいでしょうか。いろいろ質問が、簡単な質問ですか、じゃどうぞ。

(質問者6)

付属天王寺小学校の5年生の綱木まほです。保護された動物などを元気にして、幼稚園や老人ホームなどをまわるのはどうなんでしょうか。

(座長)

どなたに答えていただきましょう。馬場先生いかがでしょうかね。

(馬場先生)

保護した動物、引き取り手の無いワンちゃんたちを老人ホームに連れてという、それ非常に良いことだと思います。それで今現在獣医さんたちを中心に、全国各地に老人ホームを慰問したり、動物を貸してその飼い主とおじいちゃんおばあちゃんと一緒に過ごすというそういうボランティアがあるんですけれど、そういう会がいっぱいできております。

そういうことですから、神戸の中でも獣医さんだとか動物を好きな方の協会があります。そういう人たちと一緒になって、今は後片付けやらがたくさんあって、大変な時期だから、落ち着いてから、まだもらい手のつかないワンちゃんをみんな連れて、飼いすさんが集まってそれをやるのは常に良いことだと思います。ひょっとしたら神戸でも綱木さんがおっしゃるようなことが実現することがあるかも知れません。期待しておいて下さい。

(座長)

よろしいですか。まだまだ御質問あるかと思いますが、一応ここで質問は終了させて頂きまして、後3部でも討論の場がございますので是非いろんな御提案等頂きたいと思います。終わります前にこの救護活動に、私も参加した一人といたしまして、自分で感じたことも入れながら、この第2部をまとめさせて頂きたいと思います。

先ず初めに今回のような大災害は、記憶に新しいところでも普賢岳の火山爆発、あるいは奥尻島の地震等においても多くの動物が被災したわけでございますが、今回ほど動物の救護が話題になったことも

なかったし、これほど大規模な救護活動が展開されたことはございませんでした。それが故に、全てが初めてのことばかりで当初のスタート時点ではいろいろと戸惑うこともあり、失敗や模索を繰り返しながらも多くの国民の皆様から寄せられた、被災動物を何とか助けて欲しいという期待と願いが非常に強いものがございました。

その現れが、全国から私達の動物救援本部に寄せられました2億2千万円にのぼる義援金であり、また関係者団体、企業の強力な御支援、そして忘れてはならないのが、「動物を助けなければ」と一途な気持ちで北は北海道、南は九州から駆け付けて頂いた、延べ数にして実に1万7千名にのぼるボランティアの皆さんの献身的な努力と支えがあってこそ今日に至っているということでございます。

一面、私達もこれらの活動を通して実に多くのことを学びました。なかでもこの被災動物の救護はただ単に動物の命を救うだけではなく、実に多くの市民を救う活動につながっているのだという事実に気付かされたことです。先程の安達先生あるいは安藤先生のお話もありましたとおり、家族を失い、家を失い生きる希望さえ失った方、あるいは震災により心に大きな傷を負った人々が、動物がいたから生きられた方、動物を生かすために生きる力を得た方、また不安定な毎日を送っている多くの人々が、動物と一緒に生活することにより、何とか心の安定を保とうとしたようで、神戸動物救護センターで保護収容し里親に出した動物の実に69%が被災地である神戸市を始め兵庫県下へもらわれていった事実とともに、地震前まではそれほどかわいがっていなかった犬や猫を急にかわいがりだしたり、新たに動物を飼育しだした人が増えた結果が安藤先生がおっしゃいました動物病院を訪ねる人と動物が増加したということであり、このようなことは神戸でも同じ傾向にございます。

また、淡路で狂犬病予防接種数の増加、また神戸においてもこれほどの被災を受けていながら9月末現在で先程安達先生がおっしゃいましたように93.7%の接種を行っております。ということは、大震災の中動物は大事な家族の一員として、人と共に逃げ惑い、避難し、生きていたということです。コンパニオンアニマル、伴侶動物という言葉が盛んに使われる中で、確実に日本における動物の地位の向上が確認できたと同時に、先程もお話ししましたように、人間がこの度の地震により心に大きな傷を負い、不安定な生活を送っている中で目に見えない精神的な痛手を無意識のうちに動物をかわいがることにより癒そうとする行動、あるいは無心な動物に愛情を注ぐことにより知らず知らずのうちに心の安定を保とうと人間が動物に助けを求めていった姿が浮き彫りになってきたのではないかと思われます。

この地球上には実に多くの動物が生存している中で、馬場先生のお話しにもありましたとおり、人類が発生させる地球的公害問題等により野生鳥獣を始め種の断絶の危機にさらされている生物がたくさんあります。何とかこうした生物と人間が共に生きられる均整の取れた地球にするために、あらゆる機会をとらえて真剣に考えていかなければならないかと思います。

この度の大震災により多くの人々が動物により助けられたことを強く心にとどめ、今後はさらに水準の高い動物福祉について我々は一層の努力をしていかなければならないと考えます。

以上です。それではこれで第2部を終了させて頂きます。どうも有難うございました。

(座長・林)

第三部を開始致しますので、よろしくお願い致します。

それでは、第三部の総合討論をこれから始めたいと思います。私、人と動物の関係学会の会長をやっております林と申します。この第三部の座長を務めさせていただきます。ここでは先ず最初に6名の方々から、話題提供頂きまして、その後どうか会場の皆様方からいろんな御意見を頂きながら、この、人と動物の大震災の中で今後何を成すべきか、タイトルにございますように動物救援マニュアルの確立に向けてということでまとめさせて頂きたいと思います。

それでは先ず、第一番目にお話頂く方は、兵庫県の保健環境部生活衛生課の主査をなさってます杉原さんでございますが、今回のこのシンポジウムの2つの団体、私共の学会とそれから兵庫県南部地震動物救援本部、この救援本部はですね、私共から見ますと画期的ともいえる様な行政と民間ボランティアの方々、多くの方々が、非常にスムーズに1つの救援本部を結成されたということで、恐らく行政側からの御苦労があられたと思うんです。そのことにつきまして、先ず杉原さんにお話をお伺いしたいと思います。どうぞよろしくお願いします。

(杉原さん)

只今御紹介にあずかりました兵庫県保健環境部生活衛生課の杉原でございます。阪神淡路大震災における兵庫県南部地震動物救援本部の動物救護活動につきまして、行政サイドからの報告をさせて頂きます。

先ず始めに震災以降、約9カ月間被災動物の救護活動を実施してきましたが、この間本事業に温かい御支援、御協力を頂きました各種ボランティア団体、あるいはボランティア各位、また日本動物愛護協会他10団体からなります兵庫県南部地震動物救援東京本部、総理府、日本獣医師会、全国各自治体の方々に厚く御礼を申し上げます。

では震災発生からの対応経過について先ず報告をさせて頂きます。先程からも何度も出ております通り平成7年1月17日午前5時46分観測史上例のない震度7の直下型地震が阪神淡路地域を襲いました。地震は10市10町に甚大な被害を及ぼし、死者5480名、負傷者34900名、行方不明者2名、焼失家屋7456棟9322世帯、倒壊家屋192706棟406337世帯、道路鉄道等交通アクセス、通信網がほぼ完全に破壊され、都市機能は完全に麻痺してしまいました。

この災害で被害を受けたのは人だけに限らず、ペット動物も飼い主とはぐれたり、負傷するなど多くの被害を受けることになりました。被災推定頭数として、犬4000頭、猫4700匹に対する救護をどのように行うかが課題となりました。

私事ではありますが、私自身もこの地震を経験し、住いの倒壊等は免れましたが、地震直後、家の中の家具はほとんどが倒れ、倒れた家具の合間をぬい、家族共々家の外に出るのがやっとであったことを覚えております。

この後、私の所属します動物衛生係といたしましては、先ずトラ、ライオン等のいわゆる特定動物が逃げ出すことがなかったか、施設はどうかについて確認作業が始まり幸いにもそのような事例は発生していませんでした。

翌18日になりますと被害の状況が刻一刻と県庁に入るようになりました。被害は拡大するばかりであり、死亡者数の増加情報に伴いまして、私の所属します生活衛生課としては、新たな課題として約2000名の方々の火葬体制の整備を求められるに至りました。

その後、季節的に真冬であったこともあり、避難所への約5万食の温かい給食の提供、100万人の方に対しまず入浴計画、1000台の洗濯機配布計画等、被災者の方々の生活に密着しました対策に携わることとなりました。県は震災後特に、全庁的にも、出先機関も含めまして、人の救護活動で能力一杯状態であり、このような状況の中で動物救護活動をどのように進めるか、19日夜、係で協議をしまして、獣医師会等を指導、助言することにより対応するものとしました。21日、兵庫県獣医師会、神戸市獣医師会、及びかねてから県と協力等の関係にありました日本動物福祉協会阪神支部の各代表者を参集し、私どもが作成しました活動基本方針をもって依頼しましたところ、資金面での心配はあるもののとにかくやらなければならないと快諾を得まして、ここに兵庫県南部地震動物救援本部を設置することに至りました。

なお、20日には総理府より日本動物愛護協会を事務局とした11団体からなります兵庫県南部地震動物救援東京本部が設立されたむね報告があり、資金面救援物資面での大きな心の支えともなりました。動物救護活動につきましては行政で実施することも含め、種々検討しましたが、次のような理由から今回は民間団体による体制整備を図り、県、市は指導助

言等することとしました。

先ず第一に、震災当初、行政担当者は全て人の救済活動に当たらなければならない状況にあり、この段階で動物救護にまわることは被災者の方々の理解が得られない状況にあったこと、しかし被災動物の放置は動物愛護の観点から許されることではなく、被災者の方の心情も考慮し、可能な限り早急に被災動物救護を行う必要はありました。

第二に、動物の収容、保護を行政が実施する場合ですが、通常では財政面人的面等から収容保護等致しました動物を長期的に飼育管理することは不可能であります。従いまして、法的根拠のもと、止むを得ず安楽死処分を実施しております。しかし不測の事態で生じたこの動物を現行法制を適用して安楽死処分をすることは道義的にも許されず、県民の理解を得られないと判断しましたが、県の財源等を用いて長期間の動物飼育を実施するか否かの審議をするには多くの議論と時間を要し事態への遂行が困難であると判断もしました。

第三に動物救済を求める声が震災当初から大きなものがありました。この事業を獣医師会等が中心となって動物に関わります者たちが団結して本事業に当たることが県民の期待に応えることになり、全国の義援の力が寄せられることが期待できると判断し、今回は獣医師会等の民間団体による対応を求めることとしました。

次に、活動方針としましては、先程の本部活動報告にありましたように6点を定め、当面は被災を免れた各開業獣医師で、これら事業を対応することとしましたが、一方では活動拠点となる救護センターの用地調査も開始することとしました。こうして通信網交通網が破壊された中、動物救援活動が始まりましたが、各動物病院は次々と運び込まれます被災動物でただちに満杯状態となり、救護センターの設置が急務となりました。

1月27日、神戸市の決断により、神戸市動物管理センターの敷地内にビニールハウス製の神戸動物救護センターが設置され、2月16日には三田市の英断によりまして三田動物救護センターを設置することが出来ました。

また、神戸動物救護センターの開設に当たりまして、兵庫県南部地震動物救援本部設置のマスコミ発表を行いましたが、発表に当たっては、被災地の状況と人命救助と県の内部事情を考慮しますと、余り早い時期の発表はむしろ反感を買う恐れがあり、一方動物救護体制が遅くなれば、対外的な批判を買うこととなることからずいぶん気を遣ったことを覚えております。マスコミ発表に当たりましては、ボランティアの募集と寄付の募集とを合わせて行いましたが、私たちの予想を遥に上回るボランティア参加申込と寄付が寄せられたことに正直大きな驚きと感謝の念を抱きました。

神戸三田両動物救護センターでは、県、市の各獣医師会会員、動物福祉協会会員、全国から集まっていただいたボランティアの方々が頻繁のなか、何もない中から動物救護に当たって頂き、現在もこれが基礎となって両センターを運営されております。

両センターでの作業は動物の飼育管理や受入作業ばかりでなく、営繕的なものまで含むものであり、また保護された動物には環境変化等からきたのではないかと思われるストレス性の下痢、嘔吐、食欲不振を呈するものも多く、ボランティアの方々の苦労は尽きることがなかった状態でした。

季節も春になりますと学生を中心としたボランティアの方々の数は減少傾向を見せ、また気温が高くなりますとビニールハウスやプレハブハウス内でのケージ飼いでは動物収容面で対応できなくなり、新たな救護センターが必要となり、5月中旬に神戸動物救護センターが、また6月には三田動物救護センターがそれぞれ現在の姿に建設するに至りました。

県としましてはこれまでの間、本部に対しまして指導助言等を行うと共に、被災地区については従来の保健所における狂犬病予防法等に基づきます犬の収容作業は人に危害を加える恐れがある等、緊急の事態を除き本部活動を優先させることとし、また飼えなくなった犬等の引き取りについても飼い主から依頼等があった場合には飼い主に対し救援本部と一度相談するよう対応することとしました。また本部より被災動物の収容について協力要請等があった場合には、応援等することともしました。

現在までの本部の活動実績は、先程の本部活動報告の通りでありますが、現在本部における動物の受け入れは被災地からの要請も激減したことにより基本的には収束しております。所有権放棄された動物について、里親をいかに見付けるかが本部の大きな課題となっています。これまでの間、先程からの報告にもあります通り、神戸動物救護センターにおける里親探し、また9月に各地区で開催された動物愛護週間事業に本部として、里親事業を展開することや、県獣医師会の開業獣医師の方々の協力を得て、里親探しを行う等、種々の方策を展開していますが、特に病弱、老齢、気性が荒い動物が里子として出に

くい現状の中で、今後より一層の里親事業の展開が必要であろうとも考えております。今後とも本部に対する皆様の御支援、御協力をお願いいたします。

未曾有の大震災の中での動物救護には関係者の多大な尽力を頂き、今日に至っていますが、この間、県と市は本部に対しまして全体事業の方針案作成、寄付金出納や義援物資の管理指導、歳入に伴う事業展開案の作成、事業実施要綱案等の作成、マスコミ発表資料案作成や記者発表調整、建設事業の設計案作成等々につきまして、提案、指導、助言等することにより事業の推進を図ってきました。

しかし、体制自体が本当にこれで良かったのか今もなお常に考えさせられる状況にはあります。その一つは財源についてであり、もう一点は人の確保です。今回本部に対する指導助言等を行うため私共所属します生活衛生課では、2名の職員が担当となりましたが、私どもは震災前に災害を想定した震災時の動物救護活動について、財源面や人的面等を含めた具体的な方針案や活動案を関係機関等と新規調整等を行ったことがありませんでした。

また、今回の震災においては人の救護活動に行政職員の人的配置に不足が生じる状態であり、施設的にも県の各機関は人の救援物資の基地等とならざるを得なかった状況でもありました。このような中で被災地の状況等も考え合わせますと、特に被災現場等での動物救護活動を行政指導型で対応することは困難でありました。

しかし、一方では今回のべ17000人あまりのボランティアの方々が現場で活動して頂いたことを基本として、今後の災害時の活動方針としてよいのか、簡単に判断がつく問題ではないと考えます。只言えますことは、各自治体等に置かれましては、災害時を想定して活動方針、活動内容等を検討し、関係団体との協力体制を整備しておくこと、そして更につけ加えるならば、動物救護センターの用地を確保しておくことが動物救護活動の基本となるのではないかと考えます。どうも有り難うございました。

(座長)

どうも有り難うございました。一般に行政は、予算を伴うことを予算措置も無しにやるっていうのは非常に大変困難な組織になっておりますけども、これをあえて決断されたということ、しかしそれはあくまでも指導という形で主体を民間ベースに置かれたということ、その中で特に気を配られたのは人の救援の中でどうやって動物の救援を入れていくかという、一つ一つにすごくIIで言い尽くせないほどの御判断があったんだと思います。私も結果として非常に素晴らしい活動をしてこられた、それについては逆にお礼を申し上げたいと思います。

この動物救援本部の中には、先ほど杉原さんから御紹介ありましたように、いろんな動物愛護に関する団体が加わっておられるわけですが、そこの救援本部の副本部長をなさっておられます日本動物福祉協会の阪神支部副支部長でございます松田さんに、行政とはまた別に、動物愛護団体としてのどういう活動をこれまでされてこられたかということを簡単に御報告頂きたいと思います。それでは松田さん、お願いいたします。

(松田さん)

皆さんお忙しい中を今日はようこそお越し下さいまして、有り難うございます。本部を運営する者の立場として深く感謝いたします。私の気付きましたことを少しお話しさせて頂きます。

1995年9月1日に動物の保護及び管理に関する法律施行20周年、及び世界獣医師大会開催記念動物愛護シンポジウムが開催されました。第1会開催から4年目となります。この第1会の開催日には感慨深いものがありました。ようやく日本においても動物について国としての関心が示され、国民、行政機関、獣医師、動物愛護団体が一同に集い、議論が始められたという記念すべき日でした。横浜での今回の愛護シンポジウムは、動物愛護シンポジウムとしては日程が一日だけとなりましたことは、まことに残念なことでありましたが、日本における人と動物の関係については、議論が本格的になされているとは言えない状況ではないでしょうか。極端な溺愛型、放任型、無関心型と共に何でも非難型とあり、学識的な議論が期待されるところであります。

長い間国として人と動物の関係について考えたとき、その大部分は効率よく動物達を利用する方法か狂犬病予防法に基づいて人の安全確保に徹していたと言っても過言ではないでしょう。ようやく出来ました、この動物福祉の基本法である「動物の保護及び管理に関する法律」は余りにも不備が多くて、罰則を怪いながらほとんど実行のないものとなっています。

このような現状を考えますとこの度のシンポジウムは大変意義の深いものであります。動物好きの人にも、嫌いだと思っておられる人にも、話りあえるような理性的な人と動物の関わり方を議論できれば

法律の整備にも適切な提言が出来るのではないでしょうか。

私はこの度の兵庫県南部地震動物救援本部設立以来執行部として関与し、神戸動物救護センターではボランティアとして動物救援活動に従事してまいりました。25年間のボランティア活動と、そして今回の経験から人と動物の関係について、少々述べさせて頂きたいと思います。

9月1日には、神戸動物救護センター開設以来の収容頭数が1000匹となりました。犬、猫、猿、モルモット、アヒル、鶏、インコ、熊と動物種は多様でした。巡りあった人も、飼い主を始めとして、譲渡を希望される訪問者、ボランティア、獣医さん、見学者と様々な方に出会いました。

人は、動物達の幸せをどれだけ考えているのか。収容動物の中には、震災がなければ症状が悪化するのに任せて治療を受けることなく生涯を終えたかも知れないと思う様な例もあり、被災を受けてようやく適切な獣医療を受けられたのではないかと思われるような動物もいました。それでも、契約の期限には迎えに来られて、連れて帰られたのです。その後の生涯がどのようになるのか、いささか気にはなりますが、所有者の権利を上回る動物福祉はまだこの国では認められていません。

人は好きだから動物を飼うという言葉を当たり前に使いますが、飼われる動物達の立場になって、どれだけ動物達を幸せにできるのかとの考えを示された方は少なかったように思います。動物を迎えることにより、人も動物も共に幸せになることが望ましいことでしょう。

適切な代替の言葉が当てはめにくいのですが、私は飼うという言葉は余り好ましいと考えていません。飼うと、お金で買うと、買うと飼うが同意語になりやすく、そのまま命の価値につながる場合が多いように思われるからです。使役動物の養成に際して、人の役に立つことを周知させることから動物達に親しみを深める、と説明される場合が多いようですが、この考え方は多少危険が伴うように思います。

人の役に立つか立たないかで動物の価値が決められることは、一方的な人の都合だけになりやすいからです。動物達を愛することにより、動物に助けられる経過が望ましいと思うのです。人が動物と共生することにより得られる利益を考えて迎えるとすれば、利益が無くなれば捨てることになるかも知れません。私たちが動物達と共生する、共に生きることで不利益になることも多いのですが、経済動物としての価値に固執することが無ければ、そのようなことを考えることも余り無いはずです。

さて、動物達は人をどれだけ幸せに出来るのでしょうか。この震災に際して、改めて家族としての動物達との絆に気付かれた方も非常に多かったのではないでしょうか。自分自身が救われたいのか、動物達の幸せを願うのか、所有権放棄をされた方々のなかにも多様なケースが伺えます。人は自らの幸せを願うほどに他人と動物達の幸せも祈ることが出来れば自己犠牲は納得の出来るものとなるのではないでしょうか。

無条件の愛情であればこそ、人にも動物達にも素直に伝わるのではないでしょうか。動物達が人を慕うことは、一部の例外を除いては、ほぼ絶対服従に近いことであり、それだけに人の責任は重大であるように思うのです。適切な言い回しではないかも知れませんが、人は人に対して裏切りの行為があっても、動物には誠実でありたい、そのような思いを抱かせるほどに彼らは無心なのでしょう。

人はなぜ動物達を求めるのかと問われれば、答えの一つとして共通語がないからと答えることが出来るのではないでしょうか。もしも彼らと共通語を用いて意思の疎通を図れば、多くの飼い主と呼ばれる方々は待遇改善を訴えられて、とても共に生きる共生どころではないのかも知れません。自分自身に好都合の解釈が出来ることにより、動物達に対する行為についての自己採点を良くすることが出来、自己満足を得られることで、心の安らぎがあるからではないでしょうか。震災の打撃から立ち直ろうとする人の足手まといとなったことも事実であれば、人に生きる力を与えるほどの大きな働きをしたこともまた然りなのです。

自然淘汰と人口淘汰について述べさせていただきます。動物達は大別して、野生動物と家畜動物があります。野生生物と家畜動物との大きな違いは、前者は自然繁殖、自然淘汰の原則に従うことにあり、後者は人工繁殖、人工淘汰の原則に従わされていることでしょう。犬も猫も人によって人社会に組み込まれてしまいました。これ以上の種を犠牲にしないように野生動物のペット化は厳禁するべきでしょう。人工淘汰をしなければならないのであるからには理性をもって対処することが大切です。

一つ、人工繁殖を必要最小限度の数にとどめること。そしてこれは不妊手術の奨励や推進によること。

二つ、殺処分を極力減らすこと。

これは終生飼育、つまりは安易に飼育をさせない

ことなどによります。

三つ、殺処分方法を可能な限り安楽死処置に近づけること。

これは殺処分に至るまでの過程における管理と直接安楽死処置の方法というものを考慮するべきです。

四つ、野生動物と家畜動物の扱いを混同させないこと。

これは家畜動物であるものを「野生に帰す」と言うふうに、放すという表現を美化して捨てないことです。

災害に備えての提言を申しあげたいと思います。動物達との共生が始まる時点において災害時にも対処できる個人の、各々のマニュアルを備えておくことが大切です。動物達との共生は各人の意思で決められたことです。最後は自己責任を果たす決意が必要なのです。飼育環境、経済力、体力、時間的余裕、家族構成、知識等を総合的に判断して飼育すること、飼育するかしないか、動物種、大きさ、年齢、特徴、頭数、御近所等への配慮などを、事前に家族や有識者に相談して決めることです。動物達を守る主たる責任者はあなた達御自身であることを御理解頂きたいのです。

行政機関や動物愛護団体は手助けをすることが本分であるべきです。今日にでも御家族の皆様で緊急時の対策を話し合って下さい。災害だけが緊急事態ではありません。御家族の病気、そして移転、移動、経済的な問題、動物達の病気等も考えておく必要があります。責任を持てる頭数は特に重要なことであります。

兵庫県南部地震動物救援本部では、この度の震災について事業報告書をまとめ、マニュアルを作成し今後の災害に備えることになるでしょう。私たちの体験から申しますと、人と動物の救援活動は同時着手であって頂きたいと提言いたします。災害と同時に行政機関は、官民協力体制の元に、ただちに動物収容施設を建設し、一時収容に尽力して頂きたいと存じます。

これは動物達の保護と同時に、国民の安全にも大切なことであります。所有者の精神的な負担を軽減することと、浮浪させないことは動物嫌いの人々に対しても有意義なことであります。人畜共通伝染病や咬傷事故等を抑制するための対策的にもとても有効なことでしょう。

基金の対策として、登録料に災害基金として加算することも検討されてもよいのではないでしょうか。動物達のための過剰な支出という、動物と無関係な

▲写真1

方からの反対意見に対応することにもなるのではないでしょうか。平常時にも災害対策基金口座を設けて、管理団体を組織されるとよいのではないでしょうか。平常時であるからこそこれらの諸問題に取り組めるのではないかとこの度の経験から思いました。

それではちょっと、スライドを御参考までに見て頂きたいと思います。スライドをお願いいたします。

これは救護活動におきまして、倒壊家屋から救出するときの写真です。行政の方も非常な御協力を頂きました。次お願い致します。

同じ場面です。このすき間にちょうど動物、犬が下敷きになっております。次お願い致します。

鎖で繋がれているために、犬小屋もろとも下敷きになったために救出が困難で鎖を切らないと救出できない状況にありました。今危険を冒して行政の方が鎖を切るために首を突っ込んで下さっています（写真1）。次お願い致します。

そして救出されたのがこの犬で、（写真2）この犬はやがて飼い主が判明しまして飼い主の元に戻りましたが、飼い主の御都合によって、その後権利放

▲写真2

▲写真３

棄なさいまして、新たな幸せを求めて今は幸せに暮らしております。次お願い致します。

これは被災地における動物達で、こういう状況でたくさんの動物達が繋がれておりました。次お願い致します。

これも同様に非常な老犬ですが、この犬は特殊な例でありまして、どうしてもオリに入ることを非常な恐怖心でもって抵抗致しまして、ケージに入れたわずか10分の間に大怪我をしたほどの犬でした。とても年がいっておりましたし、飼い主にもかわいがられておりましたが、飼い主はこの犬を置いたまま他府県に避難をなされた方です。そして私が救護致しまして、個人的にこの犬は収容いたしましたが、その後突然死によりまして死亡いたしました。でもその間、とっても可愛い犬になったことを覚えております。どうぞ、次お願い致します。

この犬も被災地においての犬です。次お願い致します。

この猫（写真３）は火傷をしておりまして、避難所で他人によって救護されておりましたが、飼い主も判明しておりましたが、とても猫の治療にまで至らなかったということで緊急の救援活動を受けて、私が救護に参りました。次お願い致します。

もう、ほとんど駄目かと思うような状況ではありましたが、神戸市獣医師会長の旗谷先生のところで入院致しまして、このようにきれいに見事に甦らせて頂いて、今も、皆様の温かい飼い主としての救援をお待ちしております（写真４）。よろしくお願い致します。次お願い致します。

これは震災とは全く関係ございません。ですが、一般に動物飼養ということで皆さんに御参考にし頂ければと思って用いた写真でございますが、これは普通にアヒルが泳いでいるってお思いになるかも知れませんが、只泳いでいるようには見えますが、これにも縄張りがございます。そして夜店で買ったヒヨコのアヒルをここに放せば生きていけるだろうという判断で、安易に捨てる状況で放されるわけです。次お願い致します。その結果このアヒルは3日間、4日間なにも飲まず食わずで獣医さんに所見をお願い致しましたが、全く空腹の状況で、餓死の状況で死んでいたということですね。そういう状況もあります。ですから、動物を自然に帰すというような判断は非常に難しいことだといういい例だと思います。次お願い致します。

この犬は飼い主に飼われていて、お宅は立派なお宅です。しかし、このシェルティーは吠えて困るからということで飼い主が毎日毎日このように新たな縄で括るわけです。次お願い致します。その縄がこうやって毎日切っては括られ切っては括られということを繰り返されているわけですね。何のための動物との暮らし方なのか、こういうことも皆さんに本当に考えて頂きたいと思います。次お願い致します。

これもやはり救援活動とは関係なく、日常の救護活動で得た資料ではありますが、このマルチーズは

▲写真４

本当に浮浪犬として収容したときは見るも哀れなこのような姿でありました。次お願い致します。

獣医さんとか、お世話になりまして、このように甦った美しさになりまして、今は本当に幸せにこのお嬢さんに飼われております。次お願い致します。

この犬も出血性腸炎で長い間、半年間の治療を要しましたが、救護当時は噛みついてどうしようもないほど凶暴な犬でした。次お願い致します。

そして、日を経るに従ってこのように穏やかな表情になっていきます。次お願い致します。

そして1年後にはこのように見事な犬に甦りました。ですから、いかに巡りあった人によって動物の運が変わるのか、そして、動物っていうのはいかに人によって幸にも不幸にもならされるのかということがよくわかる例だと思います。次お願い致します。

これはもう閉鎖したペットセンターですので差し支えないと思ってお出ししましたが、あるペット店での屋上での繁殖犬の状況です。この隅っこの糞がおびただしいことからもお分かりになるように、このようなブリーダーとしてのモラルのない増やし方、そして飼育方法、こういうことが日本において許されているということが残念なことです。次お願い致します。

これもやはりペット店での猿です。こういう猿が何の苦情も持ち込まれずに、こうやって販売されるという名目で拷問を受けているという事実を皆さんに知って頂きたいと思います。次お願い致します。

これは英国における、先程馬場先生のお話にもございましたが、英国では非常にやはり進歩しておりまして、こういう動物のケージがありながら、ペット店の写真ですが、この中にペットを置かないのが普通のやり方だと聞いております。ここにペットを置くのはお見合いのときぐらいで、ブリーダーのところで生まれた犬を斡旋するということを主にして、そのことによって病気の媒介なども防いでいるということを言っておりました。次お願い致します。

これも同じペット店での写真です。次お願い致します。

これもやはり英国でのRSPCA、先程馬場先生のお話しにもありました民間の施設でございますが、こういう動物救護車が24時間稼働しております。これにはここのスタッフの獣医さんが乗って、緊急の出動に24時間待機しておられます。万が一スタッフの獣医さんが居られないときには、開業の獣医さんが役割を交代なさって、最寄りの獣医さんがお乗りになって緊急の動物の救護に向かうと聞いております。どうぞ次お願いします。

これは、その救護施設のシェルターです。そしてこの広いフィールドもみんな民間人の寄付によって賄われているということを伺いました。中央の施設は検疫施設でございます。検疫舎である程度安全を確保された上でこのフィールドに動物達を放していることを伺っております。次お願い致します。

こういう多くの動物達は、やはり英国でも収容されておりました。只、私たちとの大きな違いは、80%が再び新しい飼い主に巡りあうことが出来る。平均、この当時で、8カ月収容して80%の新しい飼い主に巡りあえる。うらやましいようなお話でした。次お願い致します。

これもやはり同じ施設でございます。ここには犬が収容されておりました。次お願い致します。これも犬舎内の、一部床がコンクリートで冷たそうに見えますが、これは床暖房が入っておりまして、乾燥もよく冬はちゃんと暖房が効くようになっております。次お願い致します。

これもやはり同じようなシステムになっておりまして、タイルですがやはり床暖房が入っております。そして上にはちゃんと扉に温度の調節、コントロールが出来るような施設になっております。次お願い致します。

これは猫を収容している施設ですね。そしてこのシュレッダーで切ったようなこの紙が猫のお布団になっておりますが、これは民間の方がみんな協力して裂いてもって届けて下さる。そういうことによって民間の方とシェルターとの絆が新たにできているということを伺っております。次お願い致します。

これもやはり猫のシェルターですが、これはみんなスタッフによるボランティア奉仕で造られた猫の小屋で、ここで広く放し飼いにされて居りました。次お願い致します。

これは救護動物なんですが、こういう子犬もやがて老齢になるという、いい見本になると思います。この子は救護しました当時、4カ月ぐらいで先天性の股関節脱きゅうで非常に憔悴な犬でした。次お願い致します。

そしてやがて老齢になって、あの子犬もこういうおじいさんになる。人も動物もみんなこうして、若い人はみんな年がいく、年がいけばやがて人の介護を受けなければいけない状況になる。これは動物にも全く同じ状況が生まれるということです。次お願い致します。

そしてやがてはこうやって、本当に眠るだけの動物になる。これは生きているんです。念のため申し上げておきます。みんな3匹仲良く昼寝をしている写真なんですが、本当に老犬であるということがわかるような状況になっているということですね。ということで皆さんの御参考にしていただければと思います。これからも皆さんの身近な動物達を、どうぞ震災と無関係であっても、皆さんの救いの手を待っているということをお忘れなく、今後とも動物福祉に御関心を寄せ頂きますようによろしくお願い致します。有り難うございました。

(座長)

どうも有り難うございました。このように動物救援本部を御指導された行政の立場から、杉原さんから、それから実際にその中で中心的な活動をしてこられました松田さんからお話し頂きましたが、こうした運動は先程も杉原さんからお話がありましたように、一万数千人のボランティアの方達が支えて下さったわけですが、これからボランティアの立場として、いくつかの経験、これは本当に貴重な経験なんですが、何人かの方々にその経験をお話し頂きたいと思います。その中にはもちろん良かったこと、そして今後こうしたほうがいいという反省点も含めまして、お話し頂ければというふうに考えます。先ず最初に、これは神戸の動物収容センターでボランティアをなされました名古屋市の山田さんに、是非お願い致します。どうぞよろしくお願いします。

(山田さん)

どうも皆さん、今日は。名古屋から参りました山田と申します。2月の1日から6月にかけまして5カ月間、行ったり来たりはしながらも割と長い期間、神戸のセンターの方でボランティアとして活動させて頂きました。現在は地域新興に関するプランニングとかマーケティングの事務所をやっておりまして、動物関係の仕事以外の、これまで動物に携わったことのない職業ではありながらも、そんな長い期間、神戸の方でお世話になったものでございます。

それで、一般ボランティアという言い方をこれからちょっとさせて頂きますが、職業的に動物と関わってない、多くのボランティアの中の一人として神戸の活動がどうだったか、というようなことを振り返ってみたいと思いますけども、約5カ月間の活動を通しまして感じましたのが、ボランティアの有効活用がうまく出来てないケースが多々あった。せっかく、大切な活動のインフラとしてボランティアが集まってきてるのに、うまくそれを生かしきれていない面みたいなものが多々あったというようなことを考えました。今後もちろんあってはいけないことなんでしょうが、こんなような不測の事態に対応する活動のマニュアル化のようなことを考えていくのであれば、ボランティアを上手く活用するためのノウハウは各種団体の中に蓄積していって頂く必要があるんじゃないかというふうに痛切に感じています。

それで、ボランティアと言いますと、今お話しされました松田先生もそうですし、神戸市獣医師会の先生方もそうですし、皆さんボランティアとして参加されてるわけなんですね。私もそうですが、ただ、そのボランティアの中でも動物の救護活動に関するグループは大きく3つぐらいにカテゴライズ出来るんじゃないかと思います。

1つが、運営の執行部、もしくは本部という言い方をしますが、運営の執行に当たるグループ、それから動物と日常的に職業的に関わってらっしゃる主には獣医の先生、AHTの方、というような職業的に関わってらっしゃるようなグループ、それから私のように、動物が好きで、動物を飼ってたことがあってというような個人の愛護家といった人々が集まって来るグループぐらいに分かれるんじゃないかと思います。

それで、今回の神戸を中心とした動物の救護活動の中ではですね、この日常的に余り接することの無い、通常は先生と患者とかいうような立場で接してるような人達が混在しながら、長期間活動してきたことについての特殊性をすごく感じるんですね。普通でしたらうちの猫がとか、うちの犬が、先生どうしましょうというふうに御相談しているような状況ですが、このボランティアの中では同じボランティアという肩書で働く。そのことから来る難しさと言

いますか、特殊さ、善し悪しではないんですね、特殊さ、日常的に無いようなものがあると思います。

それで、その辺を活動の中で上手く、専門家とそうでない人達の役割をすみ分けていかないと、緊急時に対応することを目的としたこんなような活動は、上手く機能していかないんじゃないかという気がしますし、普通の人間の救護のためのボランティアと違って、非常に長いスパンに渡る活動が求められるという動物の救護活動の中では、その辺のすみ分けを上手くすることがやはり必要で、執行部の皆さんも、非常に高度な運営を求められて、大変だなぁということは重々承知しながらも、これからということで考えていくのであればその辺のノウハウの蓄積をすることが必要ですし、また非常に難しい運営が強いられているんだよということをやはり理解して、温かい目で見守りながら参加するというようなことが大切なんじゃないかと思います。

それで、私の個人の活動の中で気付いたところをもう少し掘り下げていきますと、組織をある方向に向かって動かすのにはマネージメントやリーダーシップというのが必ず必要になってくると思いますね。それがなければ上手く組織は機能しない、動いていかないということなんですが、組織のマネージメント的な側面というところに少し着眼したいと思うんです。

なぜその辺にスポットを当てるかというふうに言いますと、もちろん動物の救護ですから動物に目が行くのは当然なんですけども、ボランティアとして関わる人をモチベートするっていうことが、組織や活動の活性化に関して非常に大きな役割を果たすのに、逆に今回余り見られなかった部分じゃないかというのが一点。それからその人が今回の活動を通じて、満足感だとか、達成感だとかというようなものを感じられるような、そんな活動にしていって欲しいのがもう一点。

それで、なぜそんなことを言うかというと、今回神戸、三田合せて千数百人のボランティアが参加しましたが、次の不測の事態に対する活動に向けては、これらの活動に参加した人が大切なインフラになるという信念の下に、どうやったらその参加するボランティアをモチベート出来るかというような観点が必要なんじゃないかと思います。

それで、私が神戸に参加しましたのは、施設建ち上げから約1週間後のまだまだフレームワーク出来ていない、非常に活動初期の時期から参加させて頂いた訳なんですけども、最初のうちは緊急事態で対応ということで、非常に風通しのいいやる気満々の少数精鋭のような組織で運営されてましたし、問題になるようなことは何もありませんでした。しかし、活動が1カ月を越えて学生の方とか大勢の方が参加されるようになってから、やはり人が集まるといろんな意見の対立が生まれる必然から来るところだと思うんですが、日々の業務に関する不満だとかいうようなことがボランティアの中から聞えるようになりました。

具体的には仕事の進め方に対する意見の食い違い、それから指揮指導するリーダーがいないから何をやっていいか分らない、長期のボランティアに仕事が集中し過ぎる、活動全般に関わる指揮命令系統が不明なため誰に相談すればいいか分らない、運営本部からの決定事項がトップダウンとして下りてくるだけで全体の流れ、向いてる方向っていうのが見えない、それから獣医師と一般ボランティアのコミュニケーションギャップだろうと思います。意見の食い違いによる不満を、具体的にいうともっと細かなレベルであるのですが、大体まとめますとそんなようなことが聞かれました。その辺は後ほど山口先生の方から御報告になるアンケートの中でも同じ様な意見が寄せられていたということで、私が感じたことと非常に近いというものだと思います。ボランティア全体、特に私のような一般ボランティアは沢山その辺を感じてたんじゃないでしょうか。

それで、どうしてそんな不満が聞かれ始めるかというふうに考えてみますと、やはりボランティアに対する位置づけ、考え方が日本の社会でまだまだあいまいなんだろうと思うんですね。ボランティアに対して仕事をしなさいといっていいのかどうかすらも分らない。それでボランティアもどの領域まで踏み込んでやっていったらいいかどうか分らないという自分の中での戸惑いみたいなものも実際ありました。運営の主体とボランティアの関わり方のスタンスみたいなものが確立されていない日本の中では、これから解決していかなきゃいけない問題じゃないかとは思いますが、そんなことを感じました。

また今回特徴的だったのが、ボランティアの方の活動に参加した人達が、非常に忙しい中、3日とか1週間とかいろんな活動のスパンの人達が入れ代わり立ち代わり入ってくる、というようなことです。そんな活動をして、活動に入ってきてじっくり腰を据えて、場を見極めて、雰囲気を掴んで仕事をして下さいっていうようなことでは、その人の参加できる期間がすぐ終わってしまうというような状況も多

々ありました。その辺の数多く集まってくるボランティアをどうやって早くから立ち上げていくかというようなことも課題としてあると思いますし、1日2日の参加のボランティアにも、やはり満足感、達成感みたいなものは持って帰って頂きたいし、もうあんな所には行きたくないというふうに思わせないような、そんなシステム作りといいますか組織作りを是非していきたいと思います。

それで、じゃぁその組織の中でボランティアとして参加をさせる個人をどうやって活性化していくんだ、具体的にはどうすればいいんだということなんですが、一番大切なのはコミュニケーション、情報の共有だと思うんですね。現場で働いている人、ボランティアに只単に犬の散歩をしなさいと言うんではなくて、活動全体の方向がこっち向いててこういう役割があるんだから、だからその中の一つとして犬の散歩があるんだということを日常的に語ってあげる、方向性を示してあげる。作業レベルでドろすんじゃなくて、活動全体、恐らく執行部本部、行政辺りの持ってらっしゃるこの活動の意義を、マインドとしてボランティアと共有することが大切なんじゃないかと思います。

皆さんも御存じの例かとは思いますけども、あるとき男の人が、街中で大きな石を運んでると、あなた何をしてるんだというふうに聞かれたので、石を運んでるんだというふうに答えた。片や同じように石を運んでる人に、あなたは何をしてるんだというふうに聞いた時に、私はピラミッドを造ってるんだというふうに答えた。同じ石を運ぶ作業にしても、石を運んでるというふうに思ってやってる人と、ピラミッドを造ってるっていうふうに思って石を運んでいる人とではやはり踏ん張りの度合いが全然違うし、やってる本人の満足感、達成感も違う。そんなようなところに一つ象徴されるんじゃないだろうかと思います。

で、もう少し組織のレベルに具体的に、どうしたらというところに落としていって考えますと、分担の明確化かなぁと、日常の先生と患者の関係を持ち込むのではなくて、獣医療場面での獣医の先生の役割、それから一般ボランティアとしての役割というところを、明確にする。でもそれは同じボランティアの枠組みの中であり、主従の関係では決してない、同じボランティアとしての活動の仕方であるというのを、是非組織的に作って頂くことが必要なんじゃないかと思います。今後もあの動物救護の活動を、ボランティアとして組織するには、やはり獣医療専門の方ばかりでは運営していけないんじゃないかと思うんですね。

というのは、この辺は人間の治療と違って、医療部分とそれから日常のケア部分というのは動物の場面においては表裏一体だと思いますから、今後の活動では同じように獣医師と、もしくは動物を職業的に扱ってらっしゃる方とそうでない人間の混在型の組織作り、組織運営みたいなものは絶対に欠かせないアイテムっていうか、形だと思います。そこをどう上手くすみ分けていくかというノウハウを作っていければと思うのです。

一応、今組織の面について言っていったんですが、本来の目的とした動物救護から外れて組織のことなんてという御意見もあるかとは思うんですが、こういった組織作りに少しパワーシフトしてやっていくことが、間接的には活動全体の活性化になると思いますし、これからの活動の糧になるんじゃないかということで、組織のマネージメント、リーダーシップ、組織作りについての意見を述べさせて頂きました。

それから少し視点を変えて、私のような一般ボランティアが他の動物愛護団体、救護団体とのネットワークについて感じたことなんです。今回活動初期に1週間か2週間程度でしょうか、愛の駐さん、というところと若干の交流はありましたが、それ以降の被災動物の救護に関する交流はほとんど無かったと思います。

ただ、私を含めて、今回の震災にボランティアとして参加したメンバーはロイヤリティーを組織、例えば神戸のセンターというところにロイヤリティーをもって集まってきたわけではないんですね。動物の救護をしたいっていう思いで集まってきたボランティアがほとんどだと思います。その中では各団体に集まったボランティアを一つの支援として考えるならば、余り足るところより足らざるところへというか、お互いにもってる試練の足らない部分、強み弱みを補完する意味での協調みたいなことはやっていっていいんじゃないか、逆に一般ボランティアから見るとどうしてそれができないんだろうというのがわりと不思議な世界のようなこととして、疑問符がつきました。

日常的な活動の御意見、活動の趣旨とか、各団体によってのカラーの違いなどがあるということは十分承知していますが、被災動物の救護という、いわゆるエマージェンシーの場面において、もう少し共通言語を見付けて、共通のフレームワークのフレー

ムの中で活動したほうが、参加したボランティアが行っても仕事が無いという状況の中でいるよりは、足らないところへ行って仕事をする活動の仕方があってもいいんじゃないかと思いました。

それから最後に預かった保護動物についてなんですが、私たちは、私はということなんですが、最終的に今回の被災動物は一匹も殺さずにこれから幸せな生活を送ってもらうようにするんだという信念に支えられて活動に参加しましたし、そのことを誇りにも思ってました。現在の活動もその方向に向かっていってらっしゃるんですけども、地震って言う単発の震災が起きて、継続的な震災ではなくて、だんだんにその活動事態が収束していく場面の、その局面の中では、被災動物とそれから通常の保護動物との線引きというか、生み分けが非常にしにくくなってるんじゃないかと思うんですね。

被災動物だから助ける、そうじゃない動物だから後はもう行政に任せてしまうという言い訳が成り立たなくなっていて、実際そのことに関して非常に矛盾を多くのボランティアは感じてると思います。新たな世界に接したというふうな、今まで見ることのなかった世界に接したことによる驚きが、ああそうか、そんなふうに動物というのは行政で保護されてるんだと知った、そんなプリミティブなレベルの人も、僕も含めてなんですが、初めて気づいたというような人も多くいたと思われます。

今回の震災の動物救護のボランティア活動をきっかけにし、これから先日本の社会の中で動物をどう扱っていくんだということを、もう一回スタート地点に戻って議論するいい機会なんじゃないかと思います。書生論だというふうに言われ、笑われるかも知れませんが、「今回初めてボランティア活動に参加したよ」っていう7割以上の多くの一般ボランティアはそんなふうに感じてるんじゃないかと思います。以上で発表を終わらせて頂きます。

(座長)

どうも有り難うございました。恐らく後から少し討論の時間がとれるとすれば、この問題についてもまたいろんな方からの御意見がお聞き出来るんではないかと思います。それでは続きまして、今度は三田の方の救護センターでボランティア活動の経験を持っておられます、千葉県佐倉市の原さんから是非お話しを頂きたいと思います。それでこれから3人の方にお話しいただくんですが、大分時間が迫って参りましたんで、出来ましたら一人10分くらいででですね、以内でお話し頂ければと思います。

(原)

三田動物救護センターでボランティアをしております原希です。三田動物救護センターに来たのは2月の中旬でした。それまで仕事もせず毎日無為に過ごしてきた僕は、連日報道される阪神淡路大震災の被災地の状況、そして、そこで活躍するボランティアの活動に刺激を受け、今この瞬間を無駄にしていいわけがないと、2月初旬神戸に向かいました。

もともと被災地で暮らしていただろう動物達の救護活動に参加したかったのですが、なかなかその情報が得られず、先ずはとにかく現地に入ろうと、受け入れ先を探し、神戸市中央区の避難所に行くことにしました。避難所では、市役所区役所等の対策本部からの情報収集と、避難されている方々への連絡係、それに炊き出しなどを行いました。ここでの滞在で、被災地の現状を目の当たりにしたのですが、僕がテレビや新聞等の報道で見て想像していたそれより現実は遥に悲惨なものがありました。

この後行く神戸三田両動物救護センターは被災地から少し離れたところにあり、そこから今回の地震の被災地に及ぼした影響を推し量るのはむずかしく、もしこれら2個所のみでのボランティア活動だったら、僕の中での阪神淡路大震災はイメージの世界で終わってしまっていただろうと思うと、10日間ほどの短い期間のボランティアでしたが、先に避難所にいったことは多分に有意義だったと思います。実際にこの後の両動物救護センターでの活動に対する姿勢に少なからず反映し作用したと思います。

千葉の家を出てくる日の朝新聞誌上で見付けた記事を頼りに避難所をあとにしました。神戸動物救護センターを目指し、三ノ宮駅前からバスに乗ったのですが、新神戸トンネルを抜けそこに整然と現れた住宅地のその当たり前の風景に改めて被災地がどれだけ打撃を受けていたかを実感すると共に、同じ神戸市内でもこれだけの違いがあるのかと驚きました。神戸動物救護センターに着くと先ほど第2部で報告を行われた馬場先生に親切に迎えて頂きました。馬場先生からこのセンターでの活動内容の簡単な説明を受け、早速犬の散歩に出ました。

このセンターの最初の印象は立地条件に恵まれているということでした。散歩のコースは広大で、ハスキー犬等大型犬もゆとりをもって散歩をさせられ、しかも住宅地の側にあるにもかかわらず一般の人は余り通らない。が、日帰りのボランティアさんたち

は沢山来てくれる。また、天候の良いときには淡路島まで臨むことが出来るなど立地条件は非常に良いと感じました。只それぞれの作業においては専属的に役割分担がされていて、日常が全般的に淡調に感じられました。

そのような中、馬場先生から今度三田に出来る救護センターに移るんだが一緒に来ないかと声を掛けられましたが、まだ神戸動物救護センターに来て1週間ぐらいしか経っていなかったのと、そこで話される三田のことといえば山奥のとんでもない所でとても人の住めるような所ではないといったような噂が飛び交っていたので、そのときは神戸に残りました。しかしそれから2、3日もすると神戸動物救護センターのボランティアの数が急激に増え始め、逆に三田はボランティアの数が少なくて困っていると聞き、そっちの方で役に立てるのであれば、と思い三田に向かうことにしました。

三田の市街から小さな山を一つ越え、窪地に落ち込んだようなその施設を目の当たりにしたとき、建設してまだ日の浅いその施設は一見殺風景で周りを取り囲むフェンスばかりが妙にいかめしく映りました。そして寒空の下そこに響く犬達の声もどこか物悲しく聞えました。既存の施設を使いある程度維立した体制で活動が出来ていたように思えた神戸の動物救護センターと比べ、元々野原だった所を造成し急造したこの施設は余りに何物にも乏しく、設備はもちろん犬猫の扱い、管理、作業手順、そしてボランティア達自身の滞在に要する生活基盤まで構築しなければならないような状態でした。

実際僕が三田動物救護センターに来て、最初に手掛けた作業は犬でも猫でもない、風呂場作りでした。他にもアスファルトの破片を集めて土手に階段をこさえたり、近くのゴルフクラブがみんなのために開放してくれた入浴施設にみんなを送迎したり、日に日に歪んでいくフェンスを押したり引いたりとその活動を強いられる分野は多枝に渡りました。

また、動物達の管理においては経験も知識も無いけれど、毎晩遅くまで何とかして犬猫達を今日以上に快適な生活を送らせてあげたいとみんなで頭を突き合わせ意見し話し合い、そして足りない部分を獣医師会の先生方に補ってもらい、いろいろと試行錯誤を繰り返しながら組み立てていきました。もちろんそれらは素人作業で、単純に設備の面で言ってしまえば、先の風呂場は後に本来の機能を果たすことが出来ず、工具置場になってしまい、他にも後々業者の人に依頼し根底から修繕しなければならなかったものが沢山ありました。

が、震災直後のあの2月、3月動物達は毎日ひっきりなしに運れて来られ、そしてボランティアも続々と詰め掛けた中、設備の拡充は追い付かないときに混乱しきった状態をボランティア達が乗りきっていったという事実は評価できるものと思います。ここまで言うと三田動物救護センターは立地条件も悪ければ設備もなくて環境も悪い、と悪いところばかりになってしまいましたが、実際ある程度安定状態になった5、6月と当時を比べてしまうとやっぱりかなり悪かったです。

しかしあの頃のボランティア達は一様に滞在日数を増やし、あるいはいったん帰った者もすぐにこのセンターに戻り、またボランティアが地元の同士を呼び、とボランティアの数は思いのほか膨れ上がってしまいました。実際この頃のボランティアとして1日に参加した人数の最高時で93人を数えることもありました。これらの傾向は色々な作業を行っていく中で志を同じくするボランティア達が助け合い、協力することにより自然と連帯感と仲間意識が生まれたためであったと思います。

これは全く別の話しで今になって思う素朴な疑問なのですが、あの頃本当に雪の降る中をビニールハウスのなかで30人近くが、そして決して衛生的とは言えない毛布にくるまり、更には定期的に風呂にも入れない人間達ばかりでひしめき合うようにして寝ていたのに、風邪等の病気に罹るものがほとんどいなかったのが今思うと不思議でなりません。

春休みも終わる4月ごろになるとボランティアの数も当然減少していきました。しかし動物達の数はまだまだ多く、この時期犬猫合せて約140頭の動物がこの救護センターで暮らしていました。こうなると、今までの作業手順ではとても回せず、作業の仕方、そして設備面でも、大幅な見直しを図らねばなりませんでした。

また、この頃からボランティアの傾向もかなり変わり始めました。いわゆる、本当に長期のボランティアがそのほとんどを占め、人数は十人前後を推移するという状態になりました。そしてその期間が長期化すればするほど、たまに来てもらう短期のボランティアの方と、もしくは以前ボランティアとして活動していて数十日ぶりに戻ってくる人達と上手く折り合いが掴めない。また、長期ボランティア同士での倫理感の違いから来るいさかいなど、感情面での問題が表面化しだしました。

そして季節も夏になると、ここの盆地的気候もあっ

て、昼間の気温は連日３５度を超え、かなり過酷な条件下での作業となり、長期のみんなは体力的にはもちろん精神的にも相当減入ってしまっていました。こういった活動が、そして集団生活が長期に及ぶとき、それら感情面的な問題はやはり付き物だということを、改めて痛感しました。

最後に今回ボランティア活動を通して一番感じたことは、普段は常に誰かに手綱を握られ、無気力、無感動と言われがちな若い人達をいざ解き放ったとき、そこには何かを創造しようとする生き生きとした意欲が感じられたことを、最後に申し上げます。「有り難うございました」。

（座長）

どうも原さん、有難うございました。

今お二人の実際にボランティア活動された方のお話しをお聞きしたんですが、動物救援本部ではボランティアに参加された方々に対してアンケートが行われました。

それを解析されるチームがございますけれど、その中のお一人であります、日本動物福祉協会の山口さんから、いろんな方々の、ボランティアとして参加された方々のご意見をここで、短い時間ですけれども、少し紹介して頂きたいと思います。それでは山口さんどうぞよろしくお願いします。

（山口さん）

今回のこの未曾有の大地震では、地震国を自認していながら、その組織だった対応が立ち遅れ、我が国の危機管理システムの不整備が指摘されましたが、一方、日本では育たないといわれておりました、ボランティアの活動が目覚ましく、マスコミでも大きく取り上げられました。

動物救援活動におきましても、情報も交通も遮断されたなかで震災直後すぐに被災者の方々、それから近隣地区のボランティアの方々の手で開始されておりました。

その中でも注目すべきことは、立ち上がりはその方々よりも少し送れましたけれども、動物に関わる諸団体が、行政と連絡を取りながら今までにない動物救援組織を作り上げたことだと思います。初めての試みで、すでに今までにお話しされた先生方のなかでも、やはり手探りでの出発ということがございましたが、その通りで、全国から参加されたボランティアの方々のお力を支えに神戸市、三田市の二箇所に設置された動物救護センターでは、現在も動物の救援活動を続けております。

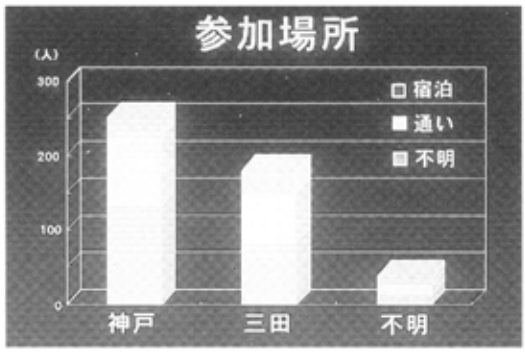
で、今回のシンポジウムを機会に、今ご紹介のございましたアンケートを通した、ボランティアに参加してくださった方々の意見、感想によって今までの活動を振り返り、今後の活動の参考および、災害時動物救援マニュアル作成に向けての資料にして頂ければと思います。

このボランティアに参加して頂いた方は、割と年令の若い方が多かったのですが、職業も参加した動機も異なり、参加した時期や期間によってもかなり印象が違うようでございました。今さっき原さんがお話しになられましたように、初期、立ち上がりの時期、ボランティアがたくさん参加された春休み、それからまた減ってきた五月以降と、色々皆さんの意見が分かれた、印象もご意見も違ってたように思います。このアンケートは南小岩ペットクリニックの杉本先生、それから私の二人前にお話しなされましたボランティアの山田さん、それと私と三人が集計をさせて頂きました。で、分析とまではいかないんですけど、その集計結果をここでお話しさせて頂きたいと思います。

実施方法といたしましては、神戸、三田両動物救護センター開設初期から、４月末までにボランティアとして参加し、住所の分かっている全てのボランティアの方、約千百名に７月中旬アンケートを発送いたしました。そして８月５日までに来た回答について集計をいたしましたが、回収した回答は437でございました。この回答の集計結果は、ホールで売っております資料集に掲載されておりますので、よろしければご覧いただければと思います。

それでは資料集に載っておりますのと、時間もあんまりございませんので、簡単にスライドでご紹介したいと思います。スライドお願い致します。

これは参加場所を訪ねたもの（グラフ１）でござ



▲グラフ１

いますが、不明の方がございますので、この不明を三田に加えますと同等ぐらいになりますが、一応こういう割合でございました。次お願いします。

それからボランティアの情報取得と言いますか、ボランティアの募集を、いつ、どのような方法で知りましたかという問い掛けに対しまして、やはり2月という回答が一番多くありました。それとその方法としましては、マスコミですね、新聞、ラジオ、テレビ、というのが一番多かったです。次お願い致します。

それから参加の申込み方法でございますけれど、現地救護センターというのがやっぱりもっとも多く見られました。他の団体の方々もそれぞれ現地救護センターと連絡を取りあいながら、派遣をさせて頂きました。

それから参加方法ですが、圧倒的に、ご自分がなんとか動物を助けたいという自主参加が多く見られました。なかにはAHTの学校等で、学校の授業の一環として参加できたらすると言って下さったところもあるようですが。次お願いします。

ボランティアの受付窓口として、今後次のマニュアルを考えるのに情報源はどこがいいですか、といった質問に対しましては、やはり、マスコミが一番良いという答えが圧倒的に多かったです。次お願いします。

それとボランティアの登録制ということについてですが、これはもしボランティアの登録制があれば、それに応じますか、という問い合わせなんですが、それについてはやはり登録制があれば応じたいというのが、パーセンテージを言いますと、79.8%もありました。やはり、この震災でボランティアに目覚めた方がかなりいらっしゃったということで、大変心強く思います。

しかし、このボランティアの登録制を望んで登録いたしましても、今度は登録した人に対して現場での人数を調整しながら、申込者への連絡も忘れないで欲しいという意見もございました。次お願いします。

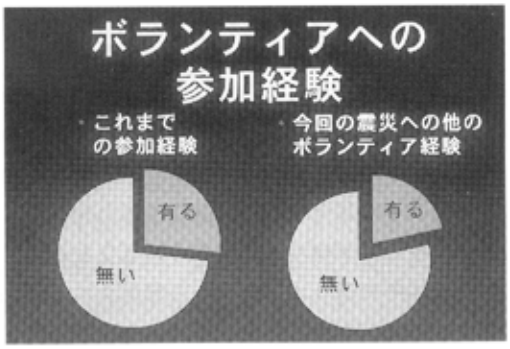
それから申込後の活動の開始ですが、大体は連絡後すぐ現地に入って出来ましたけれども、人数の多い時はやはり待たされたと。その方はやはり一時でも早く動物を助けたいと心に思っておられますので、ちょっといらいらしてらっしゃるような表現がございました。次お願い致します。

ボランティアへの参加経験でございますが、ご覧のように（グラフ2）これまでの参加経験、ボランティアに参加したことがない人が、圧倒的に多く、今回の震災の他のボランティア経験っていいますのは、動物以外のことですが、これもほとんど動物に来られた方はやはり動物のことに何度も来られる、よそにいかないでまた次も動物に来てくださることが多かったです。このボランティア経験が無いというのは、73.2%です。次お願いします。

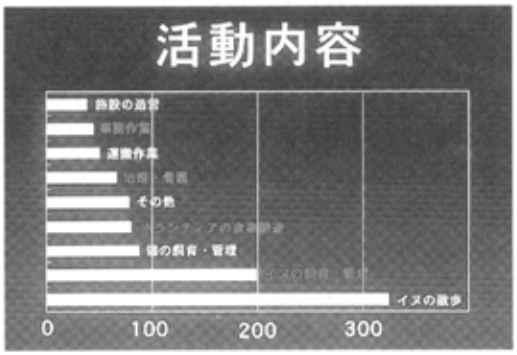
で、動物救護を選んだ理由ですが、やはり動物が好きだから、あと動物も人と同様に救護されるべきだと思ったから、動物がかわいそうだと思ったからというのがほとんどということで、中には獣医師のように職業上といわれる方もいらっしゃいました。次お願いします。

動物の飼育経験ですが、これをご覧になってお分かりになられますように、犬猫を飼っていた、あるいは今飼っているっていう方がやはり多いです。その他っていうのは犬猫以外の動物でございます。次お願い致します。

で、活動内容でございますけれども、一番下にございますのが犬の散歩、数字をご覧いただければ分かりますように、犬の散歩に飼育管理、猫の飼育管理というのが多いんですが、それ以外にもその、たくさんボランティアが集まったときには、その方達の食事の世話もしなければならないなと動物を、直接世話する方々へのバックアップ体制もまた必要で、これも必要なボランティアだと思われます。それ以外にも運搬作業、それからもちろん獣医師の方々は



▲グラフ2



▲グラフ3

治療看護の方を受け持っていただきました。それから先程ございましたように、施設の立ち上がりの時期には施設を建てるということも、みなさんボランティアの方、専門家じゃなくボランティアの方の手で行われました（グラフ3）。次お願いします。

活動環境ですが、ほとんどの方はスムーズに活動に、参加できたということでございます。次お願い致します。

他のボランティアとの交流でございますが、これは他のボランティアというのは同じ動物救護センターに来ていらっしゃった方々という意味でございます。不十分だと思われてる方が、やはり不満をこの後の意見のところにも出してこられて、もう少し皆さんのコミュニケーションをはかるようなミーティングがあればいいんじゃないかという意見もありました。で、活動終了後もなかには住所交換をして今も付き合ってらっしゃる方々はおられますが、もうその後ぷっつりと縁が切れてしまったという方々も多いと思います。次お願い致します。

ボランティア活動に対する評価、これは自己評価でございますが、このように、社会勉強になった、ボランティアの意義を認識した、動物のことを学べた、有意義だったということで、圧倒的に、何かを学ばれて帰られた方が多いようでございます（グラフ4）。次お願いします。

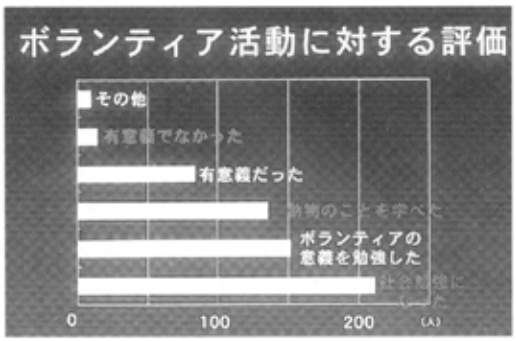
ボランティア参加後の動物への接し方でが、変わらないと答えられた方は元々自分は動物を愛し、共に暮らしていて、動物への接し方がそんなにその今までと変わることはないということでしょう。ただ変わったと言われる方は、動物の心の動き等、再認識というか、初めて気づき、そのことが頭にあり、家に帰っても自分の飼い猫、飼い犬との接し方が変わったというふうに説明しておられました。次お願いします。

これは同様な災害発生時における参加を希望いたしますかということを言いましたなら、これはなんと98.1%の方が参加いたしますと答えられております。次お願いします。

今後のボランティアについて、これは動物救護ということとは関係無しにボランティア活動ということでございますけれども、これにも参加したいと言われる方が、91.7%もございました（グラフ5）。次お願いします。

これで終わりですか、どうもスライド有難うございました。

数字的に出せる部分はこれで終わらせて頂きますけれども、これ以外にたくさん文章で書いて頂くような項目がございました。そして意見があまりたくさんで、色々ございますので、全部をここで読み上げるわけにはいきません。それで、まとめてちょっと説明させて頂きたいと思います。資料集にもそれをいくつかは載せてございますので、お手元にございます方はお読みいただきたいとおもいます。



▲グラフ4

▲グラフ5

やはり一番目立ちましたのは、先程から何度もお話しに出てきましたけれども、組織作りということでございます。素人がほとんどのボランティア集団だから、リーダーが必要だという意見がもっとも多く、特に春休みなど人手が多かった時期には何をしてよいか分からず、意見を聞いてもなんの指示もなくて困った。うろうろするだけであった。自分は本当に役に立ってるんだろうか。それで結局帰ってしまったという意見もございました。動物の救護、世話についてのエキスパートをリーダーにして、その下にサブリーダーを置して、収容動物の状態の把握、毎日の仕事の分配や全体の取りまとめ、新しいボランティアに対する説明、指導が必要であり、かつミーティングも行って皆の意見を挙げることも大切。また作業マニュアルのようなものを作り、ボランティアの質を良くするための研修があればよいという意見もございました。皆様動物が本当に好きで来て頂いているんですが、各個人で飼っていらっしゃる我が家の猫、我が家の犬には対処できても、たくさん収容された所ではどういうふうに動物達に対処していいか分からないという状況があったようにも書かれておりました。

次が人間関係でございますが、これは人間が集まれば必ず生じることですが、やはりいろんな苦情が書かれてありました。例えばわがまま勝手が周りを不愉快にして仕事の能率を落とすとか、グループを作って排他的になる。同じボランティアなのに対応に差が見られると、これは先程も少し出てましたけれども、宿泊者と通いの方々との間で差が出ていると。それから獣医学生とその他の方々に差が見られる。それから自分の気に入った作業をする人がいるとか、サークル活動と勘違いして騒いでいる人がいるとか、いろんな意見がございました。これもやはりある程度リーダーという存在の必要性を示唆するものだと思います。動物達を助けたいと皆同じ想いでこのボランティア活動に参加したはずですので。

3番が動物の世話ですけれども、動物が好きで参加された方ばかりですから、動物の管理には皆さん心を配られておりました。けれども、特に初期のビニールハウスのケージの中で飼育したときの動物達の精神面でのケアについてもっと力を注ぐべきだったとの反省が目を引きました。震災の衝撃、ショック、これは午前中の方でも出ておりましたけど、飼い主との離別による不安、毎日世話をする人が変わる不安、ケージの中にいるストレス等が動物を精神不安定に陥らせ、いらいらを募らせて、人間不振に陥らせております。そして下痢の症状につながったり、あるいは咬傷事故につながったという事実がございました。それからパドック付き犬舎にかわって、下痢等はほとんど無くなったという獣医さんのお話しでしたけど、動物と人間の信頼関係はなおかつ築き上げる努力をしなければなりません。

それから新しい飼い主の募集ですけれども、このボランティア活動された方々は皆さん一人残らず、自分達が世話をした動物達の行く末を心配されて、もっとマスコミを広く使って全国民に訴えることが必要だというご意見が多くありました。中には新しい飼い主として申し込まれた方々みんなに引き取って頂けばよいのにという意見もございましたけれども、皆さんにやっぱり大切な家族として迎え入れられることを願ってるわけでございますので、現実には断らざるを得ない申し出もございました。

それは例えば多頭飼育の家庭の方は一頭増えても一緒よ、そんなかわいそうならうちが引き受けるわ、とおっしゃいますけども、そこに一頭増えることで、そこで抱えていた問題をさらに広げることにもなりかねませんし、それから問題を悪化させて近所との折り合いがさらに悪くなるということもございます。それから転勤等で手放される可能性のある家庭の方や、1年や2年で、寿命は1年や2年じゃございません。若い子は十年以上生きますので十年以上共に暮らすということは、それなりに人手もお金もかかるということを認識されない方々、繋ぎっぱなしで餌だけやっていればいいというわけじゃございませんので、それだったら最初から飼わないほうが良いという、私達から申し上げますと、お任せするわけには行きませんという方になります。

また数人の方から、事前チェックと事後調査が必要という意見もございました。

情報伝達につきましては、ボランティア活動を離れて、両救護センターから離れていきますと、なかなか状況の情報が入手できないので、定期的にニュースレターを発行するとか、マスコミで様子を流して欲しいという意見が結構ございました。これを読みまして、離れてもなお多くの方がセンターの動物達を気にかけていることが分かりました。

それから最後に、災害時動物救援マニュアルについて、ご意見がいくつかございました。その中には、いますぐにでも今後に備えて全国規模の組織、災害時動物救援マニュアルが必要ということで、救援基金も物資もノウハウもプールして、エキスパートの人材登録も備えた組織を、全国組織を作り、マニュ

アルを作成して、各自治体と連絡を取り、万が一の時には土地を確保していただいておいて、そこに施設を建て、日本中で起こりうる災害に対応することが求められているというご意見がありました。今までは三田と神戸に来てくださったボランティアの方々へのアンケートでございますけども、このアンケートに上がってこなかったボランティアの方々がたくさんおられます。特に初期の頃にはその当日から、最初に少し申し上げましたように、その当日から自分も被災しながらも、動物達を預かって下さる先生方、それからケージを貸し出して下さる先生方、餌を配って下さる方々、そしてこのセンターが立ち上がるときにも、ケージを運ばなきゃ、と言うので、東京からケージをお願いしても、大阪までしか行きません。そこから先は送れません。道路が寸断されておりますので、それで大阪の獣医師会の先生方に夜ボランティアをお願いして運んで頂きました。この運送のボランティアもとても有り難かったです。

物資が届かないときに、なんとか物資を届けようという、こういうアンケートに出てこなかったボランティアの方々にも、それから自分では手は出せない、身体が弱いから手が出せないですけれども、その分お金でなんとかみなさん動物達を助けて下さいと言われる方々、この方々もボランティアの支えになってくださいました。今まで動物を助けてこられた陰には、その方々がいるということを、私は皆様にお話ししたいと思います。

私達も寄付を集めましたが、本当に皆さん動物のことを思ってお手紙を添えて下さったり、お電話で長々と色々お話しをくださったりしまして本当に有り難かったです。ここで最後に本当にこの全ての被災動物のことを思って手を差し伸べて下さった方々に、御礼を申し上げたいのと、このアンケートの作成、回答、集計にご協力下さった方々、未熟でございますので最初から最後まで皆さんにご迷惑をおかけしっぱなしでいたんですけども、なにも文句を言わずにご協力を下さった方々に本当に厚く御礼を申し上げたいと思います。有難うございました。

(座長)

はい、どうも有難うございました。

それでは最後に三田に人と自然の博物館という博物館がありますけれども、そこにおられます、そこの主任研究員をなさってます戸田さんに、この方里親を引受てくださった貴重な方のお一人ですが、里親の立場から少しコメント頂けたらと思います。どうぞよろしくお願いします。

(戸田さん)

兵庫県の三田市に住んでおります戸田と申します。

只今紹介頂きましたけども、私も被災直後に、私は実は三田市に今住んでおりますが、その前は芦屋に住んでおりましたので、震災の翌日すぐ前にいた家の近くに救援物資を持って参りました。その時に、もちろん人を救援ということを念頭において行ったのですが、避難所で非常に多数の犬猫を連れてきておられるのを見まして、人だけではないということに気がつきました。

それで、その直後ですので組織だった動きってのは、ほとんどありませんでした。当面自分の力でできる範囲ということで、たまたまその避難所へ行った時に、私の知人が、その近くのマンションで被災をして、飼っておられた猫の姿が見えないということで一緒に探したら、家具の隙間に隠れておったんです。それをお預かりするということで、それがこういうボランティア的な活動をしたきっかけです。

このケースは、私が知人から直接預かり受けたというケースで、この場合は私はこの方とはずっと以前、そこに住んでいた関係から面識も若干のお付き合いもあったりして、個人と個人の付き合いの中でお預かりしたということです。この猫の場合は連れて帰って、非常に落ち着きを失って怯えていたのですが、数日後、四、五日した後に姿が見えなくなりました。それで私もかなり探し回ったり、あるいは近くに以前知人からもらってました顔写真入りの手配所を張り回ったりして探しました。

その結果、数日後に、自分から戻ってきたわけなんです。

多分推測するに、自分で連れてこられた後、もとの家に帰ろうと思ったのか、あるいは居心地が悪かったのか、何かの理由で出てって、で数日後帰ってきた。そのとき相当痩せて、ガリガリの状態で帰ってきております。

この猫についてはその後落ち着いて、実は今は里親の状態で飼っております。これは知人の場合で、その後どうしようかということをお互いの間で話し合って、話し合いの中でこういう状態になっております。

それからまた別のケースなんですが、震災の後一週間足らずのうちに様々な救護のボランティアのグループが神戸市内で活動始められたのを新聞で知ったので私も、あるグループのところに、お手伝いと

いう感じでお訪ねして、私の場合は仕事上そこで活動するということは出来ませんでした。そこで、これも一時預かりをするという形でボランティア参加をしたということです。この場合、やはり猫なんですが、2匹ほどお預かりをしました。これはちょうど活動が始まったばかりだと思いますが、本当に公園に、仮設のテントを張って、私が行ってみてる間も次々運び込まれてきてるという状態の、かなり混乱した状態で、私はお預かりしたんですが。

こういう初期の時は、お世話してるボランティアの方も、こちらの行った方も、ルールも何も無しなんで、非常に、お互い訳が分からない状態で、とりあえずお預かりしてしまったということになってます。で、この猫2匹の場合は、その後は、そのとき一応後の方で、誓約書といまではいきませんが、一応約束として、私の名前と住所と連絡先を書いて、それからお預かりした猫の名前を教えて頂きました。で、その時、非常に混乱していたのですが、私としてはこの猫を飼うのに、その猫のコンディションが全然わからないので、出来たら元の飼い主の方に直接聞くしかないかなと思っていたら、たまたま聞けたんですね。それで、その方の持ってる携帯電話の電話番号を聞きだしまして、それでその後は、直接その飼い主の方と連絡を取りながらお預かりしたということです。最初のお約束では、三月いっぱいということでお預かりしましたけれども、結果的にはその被災してた方は、家があの方確か焼けてしまって、新長田の市民センターにずっと避難をされてたそうなんですが、仮設になかなか申し込んでも当たらないということで、結果的にはずるずるとお預かりした形で、最終的にこの方にお引き取り頂いたのが7月の末ということで、約6か月間お預かりしました。

それからもうひとつ、その次のケースなんですが、今申し上げました一時預かりの方が三月過ぎて、そろそろ引き取ってくれるだろうなと思って、私の場合直接救護センター行ってボランティア活動出来ませんので、もう少し何かお手伝い出来ないか、結局里親をやるという形でお手伝い出来るかなと思って、私は三田におりますんで、三田の救護センターにお訪ねして、一応里親の申し出をしたんです。

それは確か6月頃だったと思うんですが、まだその預かった猫がいたままですから、少し早かったんですが、一応予約をするような形で訪ねました。その場合ですね、まあ最初に行ったときはどれにしましょうかっていうような形で救護センターの中で見せて頂いて、これにしようかなって言う形でお約束して頂いて、その日は時間も遅かったんで、後日引き取りに参りますということで帰った。

それで、その後引き取りに参ったんですが、引き取りに行ったらですね、そのとき最初に対応して頂いた救護センターのボランティアの方と違う方が対応して頂いた。ちょっと雰囲気が違うんですね。で、すっとすぐに渡してくれなかったんで、なんでかなと思いながらしばらく待ってると、　実はその最初私が予約した猫は、かなり我がままって言うか、一匹飼いの初めて一匹だけ飼うんだったらいいけれども、私の場合既に預かったり、あるいは元々私も別に猫飼っていますので、それで里子になると非常に難しいということでした。

急遽そこで、方針を変更しました。結果的にはまた別の猫を選んで、二匹ほどお預かりしたんですが、この猫の方は、初めから里親ということでそこの救護センターで用意されてる誓約書に一応名前を書いて、それから引き取ったわけです。

その後その猫は、最初やはり環境が変わったということで下痢をしたり、それから一匹は耳疥癬症を持ってまして、実はいつも私がいつもかかりつけになってるお医者さんに随分お世話になったんですが、若干トラブルというのか、そういうのがありました。

現在は最初にお預かりした、私の知人から預かった猫が結果的には里親になった。それから途中で、1週間程してお預かりした猫が、6カ月程度お預かりしてお返しした。それから私が最初から里親のつもりでお預かりしたものは、これは今、かなり落ち着きました。

ということで、この3つのケースを私は経験しておるんですが、この中で里親の立場で、先程からずっとお話しに出てます、今後どのように活かすかという辺りのマニュアル化に向けて、若干の要望なり意見ということでまとめますと、里親の立場としては、その犬猫の情報っていうのは、最初の知人からのケースはこれは直接聞けましたし良かったんですが、間に救護センターのようなものが入ってる場合は、そこを通してしか聞くことは出来ませんので、出来るだけ必要なことは知りたい。知ってた方が後、助かるなあと思います。

若干具体的に申し上げますと、三田の救護センターでは猫のことですが、種類、性別、年令、それから避妊をしてあるかどうか、それから名前。それからセンターで飼ってた時与えてた餌、これらは教えて頂きました。でその以外のことはほとんど分からなかった。

後で困ったのは、猫の場合特にそうでしょうが、排泄がどういう躾けをしてあるかが、これ割と大事なことでして、よく砂を使ってたり新聞紙だったり色々あるでしょう。うちの場合砂を使ってますが、やっぱり違うんですね。そうすると猫の場合非常に習慣性が強いですから、違ってると全然それ上手くいかない。ある一時預かりの猫は、いつも堅い床の上でしてたらしいですね。うちに来た場合どこでしてたかと言うと、やっぱり最初連れてきたとき非常に怖いっていうか、怯えてたもんで、押入れの中に入ってしまったんですよ。押入れのなかに、暗いとこに入ってて、これはまあ落ち着くからそのまま置いとこうと思ってたら、押入れの中にある衣装箱の上で排泄をしたということで、非常に後始末が大変で、これには往生したということです。で、後で飼い主の方に、その人とは直接電話で連絡取りましたんで、聞いたら、そういう場所で排泄してるんだ。だから猫としたら当たり前だったのかも知れませんが、こちらとしては非常に戸惑った。

それから当然細かい健康状態とか癖とかそういうのが分かれば、出来ればそれも教えて頂いた方がいいということです。これは里親でお預かりした猫が、一カ月位でしたか、近所の方を噛んで、怪我をさせてしまったんですよ。これもその猫の気質というのが分からないんですね。一月ぐらいでは。結構綺麗な猫だったので、その方は非常に猫好きっていうか犬猫好きで、ついつい抱き上げてしまった。抱き上げてしまって、そこにその方が飼ってる犬が近づいたもので、その猫がびっくりして、その方の手を噛んで、かなりひどい怪我をさせたんですよ。ある程度その性格が分かっていれば、怯えやすいとかちょっと噛むような癖があるというのがわかってれば、当然こちらも気を付けたはずなんです。

それから、誓約書みたいなものを当時お出ししたりしましたけれども、後で見ますと、その誓約書に救護施設の連絡先が何も書いてないんですね。これは最初に混乱時期にやってたボランティアグループの方の誓約書です。

ですから結局最初に一時預かりをした猫については、その救護ボランティアの方に元の飼い主に返却しましたということを連絡することが出来ない。当時はその携帯電話で新聞に載ってたんですね。

今はその携帯電話に電話しても出てこないということで、初めてのケースですから、割と基本的な細かいところがまだ十分出来てなかったなあと思っています。

そういうようなことで、里親の立場から申し上げれば、里親もこれはまあ非常に長期に渡る、ある意味ではボランティアなんですが、私なんかは割と大猫好きで以前からも飼ってますんで、いいんですが、もし初めてお預かりするような家の場合はやはり民間の飼育マニュアル的なものが必要じゃないかと思います。

これは通常市販されてる犬の飼い方猫の飼い方なんてたくさん出てますが、そういうものではちょっと違うんですね。やっぱりもうちょっと成犬、成猫、それから不安定な状態でやって来るわけなんです。そこら辺についてはやっぱりこう特別のマニュアルが要るんだろうという気がします。

それからもう一つは先程も出てましたが、里親の方がどういうふうに飼っておられるかの追跡調査と同時にその里親の方に対してボランティアとして一緒にやってるという意識を高めるような何か例えばニュースでも結構ですし、そういうやり取りが欲しいなあという気がしております。私なんかすぐ近くでこういう場所で接してます。もらったならもらったきりでそのまんま途絶えてしまうという方もおられるかと思いますので、その辺が気がついたとこです。非常に個別的な事例ですが、一応里親の立場として責任を感じております。どうも有難うございました。

（座長）

どうも有難うございました。それではこのシンポジウムの終了が大体6時ということでもうその時間迫っておりますが、少し時間を延長してですね、6時20分頃までこれから話題提供いただいた方々に壇上へお上がりいただいて、会場の皆様からご質問を、それからご意見どちらでも結構です、いただきながら少しディスカッションの時間を取りたいと思います。

それでは、どうぞお手洗行かれる方、5分間ぐらいは時間がかかると思いますので行って頂いて、6時きっかりから始めますのでどうぞよろしくお願いします。それでは話題提供頂いた方々、壇上にお上がり頂けますでしょうか。

それでは今らっとお手洗行っておられる方もおられますけれども、少し雑談的に始めてまいります。

この動物救援活動といいますのは、おそらく大きく言って3つ今回あったのかなあ。

もちろんその中の中心的な活動は、現在このシンポジウムの協賛の片側であります兵庫県南部地震動

動救援本部がなされた活動、これはことの広がり、全国から多数のボランティアを集められ、尚且つ活動期間が非常に長い。これからもまだ活動を続けられる予定でおられますけれど、これが一つの活動として非常に組織的な活動、先程杉原さんからもお話し頂きましたし、それ以外の方からもお話しいただきましたけれど、行政が始めて本格的に取り組んだこういう動物救援活動だっただろうと思います。

皆さんがたご存じのように、それ以外に、この救援本部に属しておられない、この組織の中に入ってきておられない動物愛護団体の方々、ないしは個人の方々が、地震直後からあちこちで救援活動をなさいました。これは大変すばらしい活動を進めてこられたんだと思います。

それからこういう組織だった動き、2人であれ3人であれですね、もっと大きい既成の動物愛護団体というようなある程度活動経歴をもっておられる方ではなくて、極端を言うと読売新聞社が提供してくれた今回のシンポジウムのポスターですが、瓦礫の下から救い出した猫に餌をやってる姉妹がいます。良く見てくださると。これも一種の動物救援活動でありました。

つまり個人レベルで、地震の起こった直後から数千人の人、数万人の人が、ひょっとしたら、私達今から調べようがありませんけれど、なんらかの形で動物救援活動に携わられた可能性があります。ですからそれはもうここではお何いすることが出来ない活動ではありますけれど、私達が動物救援活動というときにはこの3つのことを頭に入れて、そして将来の動物救援活動のマニュアルってのを作っていくべきだろうと。

今回は特にお話し、一番お話しして頂きやすい形で、またこのシンポジウムを開催して頂きました兵庫県南部地震救援本部からの報告が中心となっておりますけれど、あらかじめこの総合討論始める前に申し上げておきますけれど、動物救援活動っていうのはそういうものだろうと私は思います。

それでいろんなお話がおそらくあると思いますが、先ず会場の方からこの6人の話題提供の方々に、ご質問、先ずご意見の前に、ご質問ございましたら受け付けたいと思いますけど、ございますか。はいどうぞ。短くね、質問ですから要点をはっきりさせて言っていただけるでしょうか。

(質問者1)

質問させて頂きます。亜細亜大学の井上と申しますが、兵庫県の杉原さんにちょっと質問でございます。行政の在り方が、今回やむをえないとしましても、事後処理的なやり方、日本の政治行政が全て事後処理的な方向へ昨今向いておりまして、まるで裁判所か弁護士のような仕事ぶりになっとる。

その中で、今後多少杉原さんは先取りして他の自治体、国家に対してアプローチしていかなきゃいけない、自分達の経験を前進させなきゃいけないということをおっしゃって、有り難く思ってるんですが、具体的には兵庫県、また杉原さんの部課ではどういうふうな計画でそれを進めたいと思っておられるか。おそらく日本の壁を破るのは大変だと思いますけれども、そのご計画と方法をちょっと教えて頂ければ有り難いと思います。

(座長)

はい、それじゃあ杉原さんお願い致します。

(杉原さん)

はい。今のご質問回答が非常に難しい。正直言いまして。先ず兵庫県としましてはこの震災活動についてのご報告結果というのは色々な場をとらまえて今までやってきました。これは行政レベルの全国的な研修においても、同様の発表をさせて頂いております。

今後県といたしましては、いわゆる動物の保護及び管理に関する法律を提唱しております。総理府等と相談協議をかけながら、なんとかそのこの震災、我々が、私も一つ言わせていただきましたが、財政的な確保と、それから人の確保。これがどうしてもあの生きている動物を扱う以上必要不可欠です。その後行政が直接やるのか、あるいは今回のように民間レベルが中心となってやはりやるべきなのか、これはこれから全国的にも議論を、逆に我々としてはして頂きたいんですが。少なくともどちらがやるにしても、当初、震災が起こった、あるいは大災が起こった時に当初動けるような形でのものはなんとか同の方でもご検討頂いたいというようなことを踏まえて、総理府なりと今後いろんな意見交換なりほしてみたいと考えております。

(座長)

はい有難うございました。よろしいですか。他にご質問ありますか。はいどうぞ。出来ましたらお名前と、どういうことをやっていられるか、差しつかえなければお話しいただければと思います。

（質問者２）

西宮の矢野と申します。被災地で個人レベルの動物救援活動をやっているものです。

ちょっと第二部のことに関連するかと思うんですが、収容数、収容頭数の問題なんですけれど、ここ最近かなり減少しているとなっておりますが、私共相談を受けます分では、ここ一月ぐらいなんとか一時収容してもらえないかという相談がかなり増加しております。と申しますのが、おそらくは借家の問題、当初はそのまま十分住めると思われていたものが、大家さんのほうの都合で急に出て欲しいというふうに変わってきてる。現実にまだ解体はこれからまだまだ中途段階でして、今まだ追い立てが進んでる段階ですが、ただ救援本部のほうに相談をもちかけても、全く受け入れてもらえなかったという話しが、かなりの数来ております。

その辺りで現状これだけ数が、収容数が減ってるということは、まだまだ受入可能かと思うんですけれど、受け入れて頂けないのか、受け入れて頂けるのか、それと１カ月２カ月単位というふうに最近はなってるようですけれど、１カ月２カ月でちょっと新しい家を探すなり立て替えるなりというのはかなり無理がありますので、その辺りもう少し置いて頂けないものなのかということ。

それと入れて頂けない場合の、その被災犬被災猫はどうすればいいのか、現状どうされているのかという辺りをお聞きしたいのですけれど。

（座長）

これは、松田さんにお答え頂くのが一番でしょうか。

（松田さん）

難しい質問ではありますが、基本的にはこれは本当に厳しい言い方をすれば飼い主さんが個々に動物と暮らす原点から考えて頂けたら、始めに自分でなんらかの決意をもっておられるということが非常に大切なことであります。しかし、それを今、災害にあった今、これを求めるのは、非常に同時に苛酷であるということは承知して言っております。

ですが、私達運営をする側から申しますと、運営をする側にも体力的にも経済的にもいろんなキャパシティーっていうものはあります。限度っていうものがあります。ですからこれがエンドレスに行えるって保証は、私自身からしても震災以来ほとんど休みなしに勤めております。それは運営に当たるものの責任っていうことと同時にやはりあの現場を把握するものが常に常駐してないといけないという責任感から基づいてるんですが、そういうことから考えますと運営をする側の人間的なこともお考え頂きたいというのがこの際皆さんにお願いしたいことでもあります。

これは非常に深刻な問題でありまして、今後の救援活動っていうものについて、どのぐらいの範囲に、どのぐらいの施設を、どのぐらい運営するのかということは、これは国のレベルで考えていくことであって、今ここで答えが出せるってことは非常に困難なことであるってこと申し上げたいと思います。

それは初めてのことであると同時に、今私達が一、二カ月と定めておりますのは、これはやっぱり全然預からないよりは多少のご援助になるということも事実だろうと思います。そして一、二カ月の間に個人レベルで次のステップを考えて頂けるっていうそういうクッションになるということも事実であろうと思います。

ですがそれで一年二年預かってくれっていうご要望に対して、仮に一年預かることに、動物に対して本当に意義があるのか、そういうことも考えて頂きたい。一年まるっきり飼い主さんのもとを離れることが動物に対して本当に幸せなことなのか、それであれば放棄して新たな飼い主に巡り合って新たな幸せを求めることも、動物福祉の上では、あるいは必要なことではないか、そういうことも検討して頂きたいことではあると思います。

このことについては、非常に異論がたくさんあるということは承知して申しております。ですが私は横浜のシンポジウムでも申し上げましたけど、人と人っていうのは基本的に意見が違って当たり前なんですね。ですからその意見の違いをどれだけ話し合えるかというとこに活路を求めないと、意見が違うから「はい、さようなら」では物事成り立たないんですね。ですから矢野さんも必死の努力をしておられると同時に私達も必死の努力をしてここまでやってまいりました。ですからこれ以上多くを求められても、私がここで全部を保証しますというお答えを出来ないことも事実でございます。これでよろしいでしょうか。

（座長）

はい・・・

（質問者２）

すいません、松田さん個人に申し上げたことではなくって、救援本部全体のことだと思うんですが、この頂いております資料の後ろを見ましても、有給の職員の方が十数名おられるようですけども、その方もちろん事務の方もおられるかと思うんですけれども、その松田さん個人ではなくって、もし他にボランティアの方がまだまだ参加できるような状態であるとか、他の団体を受け入れられるとか、そういうふうな形でいけば、この収容数が６頭とか９頭とか一所状態はもう少し増やして頂けるんではないかと思うんですけれど。

それと私が申しましたのは、１カ月２カ月単位ということであって、その１年２年という飛躍した話しではなくって、実際に相談受けます立場からしますと３カ月から４・５カ月受け入れて頂ければなんとかなるんだと、それも頭から相談窓口ではねられて、保健所へ持って行きなさいと言われたこともあれば、有料の訓練所を紹介されたこともある。それも出来なければもう好きなようにしなさいというふうに言われたという話しも結構聞いているんですが、その辺りもう少しきちんとした相手の立場も考えたお答えも頂けるとか、そういうふうなことをなんとかして頂くというふうなことは出来ないんでしょうか。

（松田さん）

相手の立場を考えるという意味では、同時に運営するものの立場もお考え頂けたら有り難いと思います。それは個々にその立場にならないとお互いの苦労っていうものは分からないと思うんですね。ですから私達も今回この運営をして初めていろんな苦労にぶつかったわけです。ですからこれを今後のマニュアルとして残すために皆さんと議論をするのであって、今は不備が多いことは充分に承知しております。

そして１カ月２カ月の対応しか出来ないというところには、ある意味では公平っていうことが非常に大切になるんですね。それは多頭飼育の問題にもなるんですが、多頭飼育で例えば10匹飼ってる方に10匹全部をお預かりするということを承諾した場合には他の９匹の飼い主さんをお断りして10匹が受け入れられるということになるんですね。それと同時に、その一人の方に一年お預かりするとしたら、その一年というものは拘束、部屋が詰まるわけですね。だとしたら、こういう義援金の運営という公平ということを大切に思うと、ある程度一人一人全部の方に公平に行き渡るということも非常に必要な要件になってくると思います。

そういう意味からしますと、お困りなことは分かっていても２カ月、１カ月２カ月でお譲り頂いて、次の方にまたご利用頂く、ということも非常に、私達のサイドから見ると大切であります。それは飼い主さんの立場から見ると非常にお困りだということは重々良く目に見えております。事実私どもの救護センターからお引き取りになられて他に移ってらっしゃるという例もフォローで確認しております。ですがそのことについて始めにも申し上げましたように、これは飼い主さんの責任であるべきことであって、基本的には私達も行政もサポートをするというのが基本であるべきだと、私はそう思っております。

あくまでも動物と関わるものは、動物と最後まで責任をまっとうしないといけないというのが私の厳しい意見かもしれませんけど25年のボランティア生活でそういうことを身に付けて参りました。ですから私は、自分の動物については責任をも持っております。

（座長）

大変少ない予算の中で、しかも大変努力されてる中で、しかも多くの方々に公平にということをお考えになってるわけですから、その時その時のケースバイケースで、いろんな判断っていうのはあると思いますけど、ぜひ今後とも、恐らく窓口で冷たく断られることがないような、つまり断らなきゃいけないときでも、相手に冷たいような雰囲気を与えないことが大切だと思います。

もしそういうことが起こってるとすれば、慣れがでてきて、これは同じ断るにしても相手に対する配慮を欠いてるかなと思います。そこがほんとお疲れになってる方に、こういうことを、無理をお願いするのは酷ですけど、僕は今あの松田さんそこまで言って下さったのを大変嬉しく思いますし、どうか今後とも頑張ってやって頂きたいなあということを思います。

他にご意見があるかと思いますけど、特にどうでしょうか、ボランティアのなかで、先ほどお二人の方から、山田さん、原さんからお話し頂きまして、特に山田さんも原さんもおっしゃってるんですけど、非常に良かった、だけどやっぱりいくつか問題点があったということがございましたけど、もしこの中でですね、他にボランティアとしてご参加くださっ

た方がおられましたら、ご自分の経験でも、また質問でも結構ですから、ご意見いただきたいと思います。どなたかおられますでしょうか。他に・・・。どうぞ。

(質問者3)

大阪から参りました神山と申します。

私は神戸市北区のセンターに震災直後、一月の末から三月の終わりまでずっと泊まりで、ときどき家に帰ったりしながらですが、ボランティアに参加しておりました。

先ほどパネラーの方からボランティア間でのコミュニケーションの不足により対立とかいうお話しがありましたけれども、山田さんがおっしゃいました、組織のマネージメントという面でひとつ指摘させて頂きますと、組織の上下での意志の伝達の欠如というのが大変問題だったと思います。

例えば、一々申し上げますと、北区で新しい大舎を建てようというお話しがございましたけれども、一体いつ建てるのか、どこに建てるのかということが、ぎりぎりまで現場のボランティアの責任者にも伝わっていませんでした。

それから現場の方で生じている問題を、上の方の執行部へ伝えるという方法が全くありませんでした。こういうことがありますと、ボランティアの方も自分たちが軽んじられてるんような気がして、なかなか熱意というものが出てこないということにもなりますので、その辺のところを今後マニュアルとか作成する時は活かして頂きたいと思います。

(座長)

はい、大変貴重なご意見ですが・・・

(松田さん)

そのことについて一言申し上げておきますが、こういう土地の利用とかいうことについては非常に難しい問題を含んでおります。

ぎりぎりまで発表できないという要因もございます。

それは発表したが為に、せっかく制約が出来たものが、動物が来るんだったらやめようとかというような、そういうこともありまして、ぎりぎりまで内部で詰めるだけ詰めて、そして公表するっていう段階を踏まなきゃというようなこともあります。そういう要件もあるということをご理解頂きたいと思います。

(座長)

はい、私が聞いてます限りでも、三田の最初の予定地がどんどん山の奥の方へさがったという話を聞いていますが、大変難しい問題があると思います。恐らく、私達が何かをするときに、同じことでも、意味が分からずやってると本当にこう腹立たしいといいますか、その説明が無いということは、ボランティアはまさに、自分の有益のためにやる非常に自主的な活動であるにも関わらず、これが自主的な活動にならない、強制された活動になってしまうという危険があるわけです。

これは動物救援活動だけではなくて、今回無数のボランティアがこの阪神大震災では存在しましたが、ボランティア活動そのもの、これは全体に通ずるところですが、おそらくどんな役割分担をしても、みんなが全体は何をやってるのかというのを常にチェックしながらいけるようなシステムを作らなければならない。これは指導者の責任ってのは大変だと思うんですね。他の指導者以上に大変だろうと思うんですが、是非それを心掛けて頂きたいなあと思います。

それで、実際その指導者の大切さをお話し頂きました山口さんから、何か追加でお話しございますか。

(山口さん)

追加でといいますか、私アンケートを取りまとめたというだけですが、ほんとに大変だと思います。

いろんな年令の方、いろんな職業の方、バックグラウンドの違う方、経験豊富な方、全然動物との経験のない方、好きだけれども飼ったことも無いっておっしゃる方々、その方々を指導しながら取りまとめて役割分担をし、かつそのボランティアの方々の意見を挙げてそれを上に反映させ、上からの決めたことを下に徹底させるというこれは本当に大変なことだと思います。

ですから上に立つ方を選ぶことも、これも大変な仕事で、これによって組織が効率的に上手く、そして人間同士の争いもできるだけ少なく運営できるかどうか、みんなが働きやすい職場と言いますか場になるかどうかというのはここにかかってるんじゃないかと思います。

(座長)

監督が悪いとチーム全体が死んじゃうと言うことだと思うんですね。そのことを山田さんもおっしゃってましたので、もしご指摘がありましたら。

(山田さん)

ボランティアの組織のなかで、例えば会社に勤めてお金を貰いながら働くっていう上意下達の社会は多分ボランティアにはなじまないんじゃないかと思うんですね。指導者っていう言い方をしますけれど、運営本部とボランティアのグループというのはフラットな関係で、ボランティアグループのなかでも自治が求められるし、その中では情報のコミュニケーション、さっきも申しましたけれども、そのことが大切なことで、上下ではないという概念がこれから大切になって来るんだろうし、そのことはマニュアル作りのなかで、マニュアルとしてではなくヒストリーとして、人の中に語り継ぎながら残していってできるもんじゃないかなという気がします。

(座長)

はい、それとこの、一般的にボランティア活動全体についてお話し頂いているんですが、特に動物救援ということになりますと、動物のことについてある程度知ってる方と知らない方というような、これは動物救援に対するボランティア活動のひとつの特長ですけれど、この中でもし、獣医師の人が偉そうにしてて、他の人に不愉快な目をあわせたとしたら、これは大変問題でありましてですね、そういうことは私は無かった、あったとしても大したことではなかっただろうと信じたいんですが、これについては、今後とも動物救援活動を進めていくうえで大切な気持かなあという気がいたします。どうでしょう何か会場から何か質問、つまりある程度の知識のある方と無い方っていうのも、これはやっぱり先程何人かの演者、話題提供の先生方おっしゃってますように、完全にボランティア活動っていうのは組織のなかでは対等平等な関係であるんだという基本原則でおられることは異論はないと思うんですが、何かご意見ありましたら・・・どうぞ。

(質問者4)

私も、障害児問題では、長年ボランティア活動してたり、学生時代からその全学連の関西委員長やったり、ばかげた市民運動の親玉やったり、ずっとやってきてますので、その中でやはり専門知識のある時には、リーダーといえども専門家を対等に扱って教えを乞うということやらなかったらリーダー動まらないんですね。

それで、リーダーの役目っていうのは、ボロかすにいわれるのを平気で受け流すというのと、専門家の知識を上手によりあわあせて行政上政治家以上の知識を集結してしまうというやり方でありまして、私今日の話聞いてまして、もう六十四になって、膵臓癌の手術してテレビでずーっとこの関西問題見てまして、さてどこまでものを喋ったらいいのかなというようなことを考え考え来ておりますけれど、見事なもんだなと。ご立派なもんだなと。

私ら戦時中、昭和六年生まれの人間から見ましたら、

(座長、話を遮って)

ちょっと短くお願いできますか。

(質問者4)

はい。

(座長続けて)

このことについていえば、特に動物救援活動の点で、私の尊敬してます、今後の活動のなかでリーダーでもあり、専門家の知識を持っておられる旗谷先生から、ちょっとお話し頂きたいと思うんですが。

(質問者4)

はい。どうぞ。失礼致しました。

(旗谷さん)

私は専門家でもなんでもなく、偶然この地震の時に神戸の代表してたということでこういう体験をしたわけでございますが、先程のリーダーあるいは通達の云々と、今回我々非常にあの、今回組織が良かったか悪かったかは分かりません。

ただし兵庫県南部地震動物救援本部というものがありましてここで全てを決定する、重要な次項は全てを決定して、その決定次項を、神戸、三田で実行していくと、こういう組織であったわけですけど、今回非常に困ったのは動物行政の一本化ということがなされてない。それがために我々、その救援本部にはいってくる情報自体が、その日の午前中、昼、夜で変わってくる。

例えば総理府でこういう話があったんだとか、農林水産省でこういう話があったんだとか、そのときそのときでどんどん変わってしまう。それをなんとかまとめて神戸のセンターに持ってくるわけですが、それに非常に時間がかかる。そこにまた確かに下の、下と言ったらおかしいですが、ボランティアの方々の意見を吸い取ることが出来なかった。これは確か

に、ミーティングをする時間が非常に少なかった、これは出来なかったって言うほうが正確かも分かりません。

当初、本当に混乱のなかで、もうみんなくたくたになって寝る時間を惜しんで救護に割いたということがございます。その点から言ってもう少し、人的あるいは資金的余裕ある救護活動が出来ておれば、もっといい動きができたかなあと思います。

(座長)

はい、有難うございました。他にどなたか、もう予定の時間は迫ってきておりますが、ございますでしょうか。どうぞ。

(質問者5)

福岡の樋垣と申します。

今回私は完全な部外者の立場で参加したんですが、部外者から見ると、本当私今日は参加しなかったことを恥じて参加したんですが、組織は全体的にものすごく上手くいってると思います。

ただ連絡などの対外的な広報が我々外部から連絡すると、上手く連絡がいかない、たらい回しにされる、それが一点。九州で普賢岳の火砕流ありまして、島原で、今度のほど大きくなかったんですけど、ずっと地元で、福岡市部の開業獣医師がボランティアに参加したのです。そのときに、長崎県中を通じての、組織があって、それに参加しました。ただ、組織はばらばらで小さな個人のグループがありまして、そこは何も支援がないみたいだったからそっちも支援しようということで支援に行ったんですが、やはり、組織が責任者というのがきちっといないと、こちらがそちらに連絡しようにも支援しようにも話し合いが上手くいかないというのがありました。

今ボランティアのなかで、リーダーがいないという問題がありまして、やっぱり組織ができるとボランティアのなかでもリーダーを作ってやると対外的にもある程度きちっと上手くいくんじゃないかというのが経験しております。

ただもう今回は、今日参加して恥じております。もうちょっと何か参加しなきゃいけなかっただろうと思います。ただ、ひとつお願いはこのノウハウをやっぱり対外的に公表して埋め合わせることです。そうすると、あってはならないことですけど、またもし、今後、日本全国何処であるか分からないし、これを活かされるようなものを残して下さることを希望します。

(座長)

どうも有難うございました。おそらく今日のシンポジウムでは、今あの最後にご発言頂きましたように、この1月17日から今日までの9か月間、もうずいぶん救援本部としてもお疲れになっておられると思います。

また救援本部のなかで、動物救援活動やっておられる方以外の、他の方で、個人ベースでやっておられる方今日ご参加頂いていると思いますが、その方も、もう9カ月もたって相当お疲れになっておられると思ういますが、もう一踏ん張り、まだ動物たちはいるわけですから、この阪神淡路大震災で被災した動物たちの為に、もう一働きお願いしたいということと同時に、特に今日強調されてますのは今後、こういう不幸なことは二度とあってはならないんですが、震災というのはまた起きる可能性があります。

そこでこれだけ行政が指導された形でこういった組織が動いたということは、殆ど日本では史上初の初めての出来事、いろんな教訓がこの中で生まれてると思いますが、先程の山口さんからご発表頂きましたアンケートを見ても、全国的な組織が欲しいという方もおられます。これをどうしていくかというのは、行政の方、それから民間の方、愛護団体の方、そしてまた一般の方、これからみんなが考えていくところですが、是非ともこのシンポジウムとしてはシンポジウムをやっただけに終わらないで、今後こういう震災が起きる可能性がまたありますので、ここからできるだけの教訓を引き出したいと思います。今回皆様方、もしご関心がありましたら二千円で資料集は販売しておりますけれど、これは単なる資料集で、どんな形でご活用して頂いてもいいんですが、私どもとしてはこのマニュアルづくりに向けて、このシンポジウムをその一歩としていきたいというふうに考えておりますので、どうかよろしくお願いします。

どうも皆様大変長い時間有難うございました。また今日の演者の方々、話題提供の方々大変長くまでお疲れさまでした。本当にどうも有難うございました。これで終わらせて頂きます。

(太田)

朝の十時前からもう八時間余になります。最後に閉会の挨拶として、本シンポジウムの運営委員会の委員長でもあり、救援本部本部長、ならびに兵庫県の獣医師会の会長でもあります鷲尾勝彦先生から挨拶をお願いしたいと思います。お願いします。

(鷲尾)

今日早朝から9時間半に渡る延々の時間を皆さんが終始熱心にこのシンポジウム意見討論会を無事終了できましたこと、心からまずもって、救援本部長として厚く御礼申し上げます。

シンポジウムの話題の中に、意見の交換の中にたくさん大事なものが残されました。この討論の中で、いずれにいたしましても我々救援本部に関係をいたしましたものにつきましては、初めから交通は途絶、電信電話は途絶、水は無い、食料は無い、その中でわずか一週間余りで打ち立てた団体でございます。非常に物事が出来なかった。先が見えなかった。初めての災害で知識もなかった。この中で奮励努力をいたしまして、今ここにシンポジウムの意見討論となったわけでございます。これからは、色々意見の中に最後はマニュアルをこしらえて、同民の安定のために全力を尽くそうではないかという心の意識が、皆さんと共に固まりつつあるように思えてなりません。

これからは皆さんのご協力を頂戴しながら、関係したものは心を新たにしまして、そしてこの動物と人との関わりは言うに及ばず切っても切れないものでございます。皆さんの協力を得ながら最後まで本当に先程言いましたような動物愛護の本当の運営がなされるように、我々も努力をいたす覚悟でございますので、最後まで協力を惜しまずに、これから共に動物も人間も死に至るまで手を繋ぎながらいかなければならない、という意識をもたざるを得ない形が生まれます。

色々不服なことがたくさんございましたが、行政当局、あるいは国民の意識を昂揚して頂きながら、皆さんと共にこれから動物の関わりを深くして、お互いに動物も人間も生命が尊いのが初めてわかりつつあるように思います。

皆さん、いずれにいたしましても、今日は、あるいは今日だけでなしに、1月17日からのことを考え合わせまして、これからいつ終わるとも知れない救援体制を、皆さんで固めて頂きたいとこのように考えております。

遅くまでご苦労さんでございます。お礼を申し上げまして、皆さんがたと共に今度の再会を願っております。よろしくお願いいたします。本日はどうも有難うございました。今後ともよろしくお願いします。

(太田)

本当に長い間有難うございました。それではこれにて閉会いたします。気を付けてお帰り下さい。なお6時半から、もう過ぎてますけども、懇親会が2階の紫陽花というレストランで行われます。今からでも遅くありませんので是非とも参加頂けるようお願い申し上げます。どうも有難うございました。

・・・・　第三部おわり　・・・・